

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 79 集

多気城跡Ⅱ
岡本城跡

平成 25 年 3 月

宇都宮市教育委員会

序

多気城跡と岡本城跡は、宇都宮の中世を考える上で貴重な城跡です。

多気城跡は多気山全体を城塞化し、戦国末期に宇都宮氏が本拠とした関東屈指の山城です。また、岡本城跡は、宇都宮氏の北の守りとして岡本富高によって築かれたと伝わる平山城です。何れも宇都宮氏と関わりの深い城跡です。

この2つの城跡は、これまで考古学的な調査があまり行われておらず、不明な部分も多いことから、城跡の範囲や内容を把握することを目的とし平成21年度から23年度にかけて発掘調査を実施しました。

その結果、多気城跡については、主郭と考えられる「御殿平」の南側を防御するための豎堀や腰曲輪の状況が確認され、岡本城跡については、15～16世紀にかけての堀跡が発見され、城が長期間にわたり使用されていたことがわかりました。

本報告書はその調査成果をまとめたものであり、宇都宮市の中世の歴史を解明する上で、その一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査及び報告書の作成にあたり、ご尽力・ご協力を賜りました地権者並びに地域の皆様方、及び栃木県教育委員会等の関係諸機関の方々には厚く御礼申し上げます。

平成25年3月29日

宇都宮市教育委員会
教育長 水越 久夫



多気城跡遠景



岡本城跡全景

例 言

1 本報告書は、栃木県宇都宮市田野町に所在する多気城跡及び同市中岡本町に所在する岡本城跡に関する発掘調査報告書である。

2 多気城跡及び岡本城跡の調査は、遺跡の範囲及び内容等の確認に伴う調査で、多気城跡は平成21年度、岡本城跡は平成21年度～平成23年度にかけて国庫補助事業として実施したものである。

3 調査期間は次のとおりである。

多気城跡 平成22年1月12日～平成22年3月12日

岡本城跡

第Ⅰ次調査 平成21年7月1日～平成21年8月31日

第Ⅱ次調査 平成22年8月2日～平成22年10月12日

第Ⅲ次調査 平成23年11月15日～平成23年12月14日

4 調査面積は次のとおりである。

多気城跡 5,000㎡

岡本城跡

第Ⅰ次調査 約200㎡ 第Ⅱ次調査 約200㎡ 第Ⅲ次調査 約100㎡

5 多気城跡の発掘調査での測量、写真撮影等は今平利幸が、岡本城跡の発掘調査での測量、写真撮影等は近藤真・今平利幸がこれにあたった。

6 遺構・遺物の整理、実測等は、齊藤しのぶ、中山真理、村上啓子、鈴木千佳子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は、今平利幸、齊藤しのぶ、中山真理がこれにあたった。

7 本書の執筆は第Ⅱ章1を近藤が、それ以外を今平がこれにあたった。

8 出土した遺物及び調査図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。

9 発掘調査の関係者は次のとおりである。

[調査主体]

(多気城跡・岡本城跡第Ⅰ次調査)

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 埴 静夫

〃 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄

教育次長 岡本典幸

調査担当 文化課長 森山和夫

文化課長補佐 栃木邦夫

文化財保護係長 大塚雅之

文化財保護係 神野安伸・君島直人・今平利幸・須田浩太郎・
前原義之・井上俊邦・黒須寛・柴正美・笥芳子

(岡本城跡第Ⅱ次調査)

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 竹澤 謙

〃 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄
教育次長 岡本典幸
調査担当 文化課長 高橋充史
文化課長補佐 阿部紀夫
文化財保護係長 大塚雅之
文化財保護係 江川尚美・神野安伸・君島直人・今平利幸・
前原義之・阿部雅子・近藤真・柴正美・降幡敏彦

(岡本城跡第Ⅲ次調査)

〔指導助言〕

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 竹澤 謙
〃 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄
教育次長 手塚敏男
調査担当 文化課長 高橋充史
文化課長補佐 伊藤泰拓
文化財保護係長 大塚雅之
文化財保護係 石川和弘・今平利幸・君島直人・前原義之
・阿部雅子・近藤真・柴正美・降幡敏彦

〔調査補助員〕 入江つや子・入江タカ子・入江通子・鈴木智子・枝明弘・若林政弘・広田
とく・鈴木正男・市村康子・福島千代子・星野徳夫・五月女芳・阿相タケ・阿相忠也・小
森行男・江連恵子・住谷昭・村上アイ

10 発掘調査の実施並びに本書の作成にあたっては、栃木県教育委員会の指導を受けると
ともに次の諸機関及び諸氏のご指導を賜った。記して感謝を表したい。(順不同、敬称略)
(財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、田熊清彦、齋藤恒夫、武川夏樹、荒川
喜夫、齋藤弘、関口和也、玉生勝経、君島京子、小森文夫、小森常市、枝孝一、小森薫、
近江利男、落合克昌、市川正

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構が原則1/80もしくは1/100とし、遺物は1/3もしくは1/4で示した。また、遺物実測図番号は遺構平・断面図の番号及び図版の遺物番号と一致する。
2. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は真北を示す。
3. 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。
ローム粒…LR ロームブロック…LB 今市パミス…IP 七本桜パミス…SP 鹿沼パミス…KP 炭化物…C
4. 遺構においては次の略号を使用した。
溝…SD 土坑…SK 不明…SX
5. 土層断面図において■は黒色地山、■はSP層、■はIP層、■はローム層、■はKP層、■は粘土層、■は砂・礫層を示す。

目 次

序・例言・凡例・目次・挿図目次・表目次・図版目次

第 I 章 多気城跡

1 はじめに

(1) 調査の経過 1

(2) 遺跡の環境 1

2 調査概要

(1) 遺構 8

(2) 遺物 14

3 おわりに 15

第 II 章 岡本城跡

1 はじめに

(1) 調査の経過 17

(2) 遺跡の環境 21

2 調査概要

(1) 遺構 24

(2) 遺物 28

3 おわりに

(1) 確認調査成果について 49

(2) 発掘調査から見た岡本城 49

挿 図 目 次

第1図	多気城跡全体図	2
第2図	調査区全体図	3
第3図	周辺城跡分布図	7
第4図	竪堀・曲輪b・曲輪c平面図	9
第5図	断面図(1)	10
第6図	曲輪d・曲輪e平面図	11
第7図	曲輪f・曲輪g平面図	12
第8図	断面図(2)	13
第9図	出土遺物実測図	14
第10図	多気城跡調査区部分竪堀及び腰曲輪想定図	16
第11図	調査区全体図	18
第12図	周辺遺跡分布図	23
第13図	T-1平・断面図	29
第14図	T-2平・断面図	30
第15図	T-3平・断面図	31
第16図	T-4平・断面図	31
第17図	T-5平・断面図	32
第18図	T-6平・断面図	33
第19図	T-7平・断面図	33
第20図	T-10平・断面図	34
第21図	T-11平・断面図	35
第22図	T-12平・断面図	36
第23図	T-13平・断面図	37
第24図	T-14平・断面図	38
第25図	T-15・16平・断面図	39
第26図	T-17・18平・断面図	40
第27図	T-19平・断面図	41
第28図	T-20平・断面図	42
第29図	T-24平・断面図	42
第30図	T-21~23平・断面図	43
第31図	出土遺物実測図(1)	44
第32図	出土遺物実測図(2)	45
第33図	出土遺物実測図(3)	46
第34図	出土遺物実測図(4)	48
第35図	岡本氏・玉生氏略系図	50
第36図	岡本城跡周辺の小字図	50
第37図	岡本城跡調査区部分復元想定図	51

表 目 次

第1表	周辺城跡一覧表	6
第2表	出土遺物観察表	14
第3表	周辺遺跡一覧表	22
第4表	出土遺物観察表(1)	47
第5表	出土遺物観察表(2)	48

図 版 目 次

PL1	①竪堀状況(南から) ②T-1確認状況(東から) ③T-1断面確認状況(南東から) ④T-1確認状況(北西から) ⑤T-2確認状況(東から) ⑥T-2断面確認状況(南東から) ⑦曲輪f断面確認状況(東から) ⑧曲輪f断面確認状況(南から)
PL2	①曲輪b全景(西から) ②曲輪b全景(東から) ③曲輪b平坦部確認状況 ④曲輪b断面確認状況(東から) ⑤曲輪b断面確認状況(南東から) ⑥腰曲輪遠景(北から) ⑦調査区全景(南から)
PL3	①T-1調査前(西から) ②T-2調査前(北から) ③T-3調査前(西から) ④T-3堀確認状況 ⑤T-2堀確認状況 ⑥T-4堀確認状況 ⑦T-5南側堀確認状況 ⑧T-5北側堀確認状況
PL4	①T-6堀確認状況 ②T-7堀確認状況 ③T-10石積遺構確認状況(北から) ④T-10石積遺構確認状況アップ(北東から) ⑤T-10溝確認状況(東から) ⑥T-10溝確認状況(西から) ⑦岡本城跡遠景(南上空から) ⑧遠景写真(南から)
PL5	①多気城跡出土かわらけ ②多気城跡出土砥石 ③岡本城跡出土かわらけ
PL6	①岡本城跡出土内耳土器 ②岡本城跡出土陶磁器(1) ③岡本城跡出土陶磁器(2) ④岡本城跡出土陶磁器(3) ⑤岡本城跡出土茶臼(1) ⑥岡本城跡出土茶臼(2)
PL7	①岡本城跡出土砥石 ②岡本城跡出土刀子 ③岡本城跡出土鉄鏟 ④岡本城跡出土紡錘車 ⑤岡本城跡出土鉄製品(1) ⑥岡本城跡出土鉄製品(2) ⑦岡本城跡出土鉄滓 ⑧岡本城跡出土縄文土器 ⑨岡本城跡出土内耳土器

第 I 章 多気城跡

1 はじめに

(1) 調査の経過

多気城跡は戦国時代末期に宇都宮氏の居城として使われた城である。総面積が約150haに及ぶ広大な山城で、中腹には宇都宮市指定不動明王坐像を本尊とする多気山持室院不動寺が所在する。

山のほとんどが雑木林もしくはスギ・ヒノキで構成されている。近年、植林した木の間伐作業用の運搬車及び間伐機械の大型化に伴い、その搬入道路の開削が必要となるケースが増えている。今回の調査区内も、以前作道が行われ、曲輪の一部が削られている状況であったことから、その状況把握と文化財保護の観点から平成 21 年度に国庫補助を導入し調査を実施した。

なお、平成 3 年度には、林道建設に先立ち、多気城跡の東側の守りと考えられる張り出した大規模な曲輪付近の調査が行われたほか、翌年度には、民間開発に伴い、多気城跡の外郭線と思われる堀・土塁が確認された割田遺跡の調査が行われている。

今回の調査区は第 1 図の曲輪Ⅲの南斜面上の堅堀とその東側の腰曲輪がみられる約5,000m²を対象に行った。第 2 図はその部分を拡大したものであるが、以前間伐材の運び出しの際に道が斜面上に造られ、曲輪が部分的に壊されている状況を確認した。

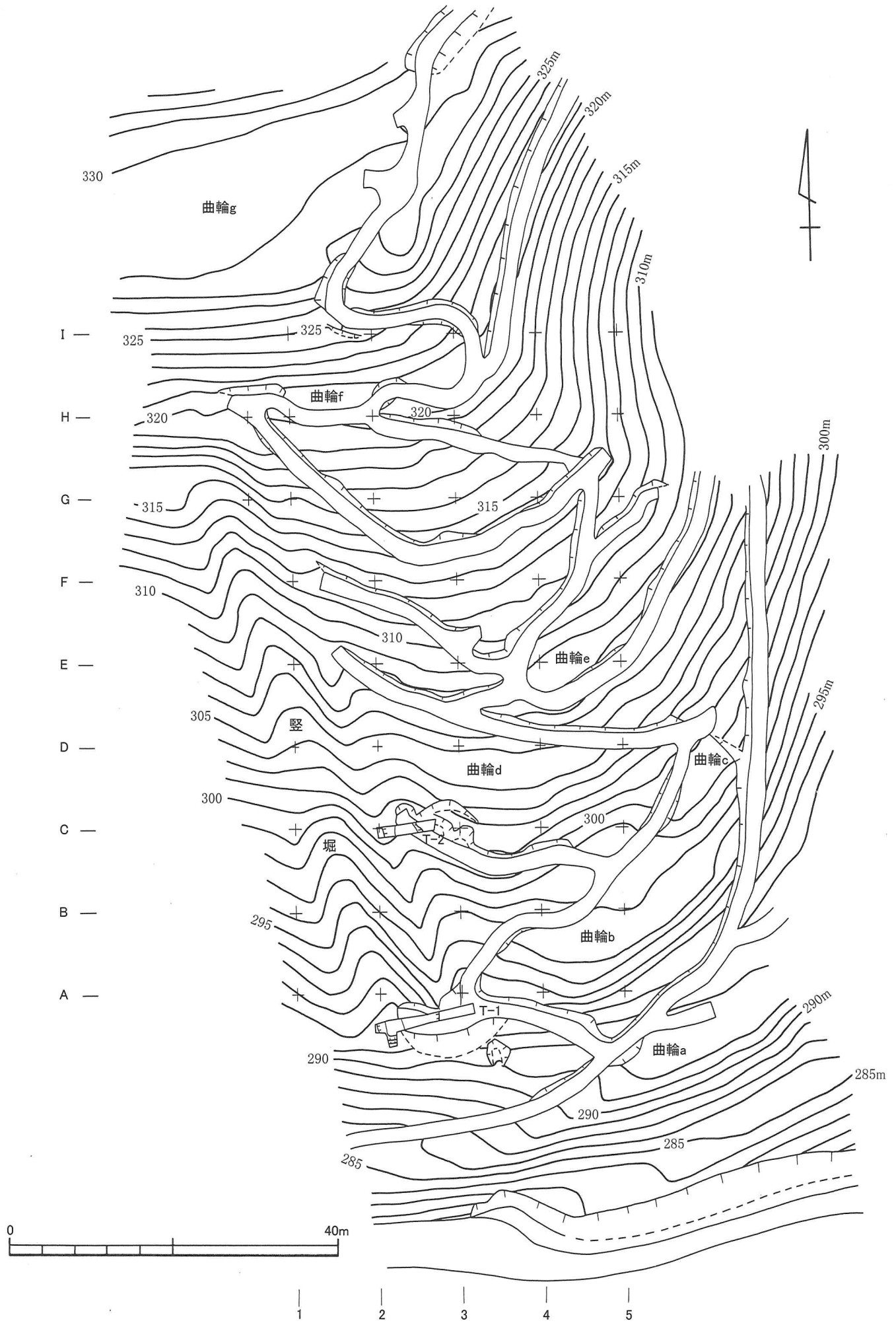
【調査日誌抄】

- 1月12日 多気山駐車場にプレハブ設置。現地の下草刈り等を実施。
- 1月15日 堅堀部分の下草刈り。堅堀の南端にT-1を設定し掘り下げ。
- 1月19日 堅堀部分北側の下草刈り。
- 1月20日～22日 曲輪下草刈り。
- 1月26日 基準杭の設置。T-1土塁セクション清掃後写真撮影、セクション図作成。
- 1月27日 T-2を設定し、掘り下げ。
- 1月29日 堅堀周辺平面図作成。T-2掘り下げ。
- 2月4日 堅堀周辺の平面図・コンター図作成。
- 2月5日・8日 切通し部分の清掃後、セクション図作成。
- 2月9日・10日 曲輪b平面図作成。
- 2月15日～19日 切通し部分の清掃後、セクション図作成。
- 2月22日～26日 T-1堀部分の掘り下げ。
- 3月1日 T-1拡張部セクション図作成。
- 3月2日・3日 曲輪g平面図及びコンター図作成。
- 3月4日 曲輪d・eの平面図作成。
- 3月5日 T-1埋め戻し。
- 3月12日 プレハブ・トイレ等の撤去。

(2) 遺跡の環境



第1図 多気城跡全体図



第2図 調査区全体図 (1/600)

多気城跡の所在する宇都宮市は、栃木県の中央部に位置し、関東平野の最奥部にあたる。本城跡は、宇都宮の市街地から北西約9kmに位置する。この城跡の東側には大谷石で有名な凝灰岩を産出する地域が広がり、本城跡の岩盤も凝灰岩層が見られる。城の東側は姿川、西側は姿川の支流である赤川が南流する。

主郭部分にあたる場所は「御殿平」と呼ばれ、標高は377mである。主郭は土塁により二分され、北側に最高位の場所があり、物見台的な役割を果たしていたものと考えられている。さらに北側の尾根上に延びる曲輪とは堀切により切断される。江戸初期の慶安4年（1651）に成立した『下野一国』によれば、「本丸東西六拾間南北三拾間」とある。東西約109m×南北約54mとなり、山頂部南側の平坦なスペースを指していると思われる。主郭の南側には坂虎口、枅形虎口など幾重にも虎口が設けられ厳重に防御されている様子が窺われる。

主郭から南西に延びる尾根には広い曲輪があり、そこから派生する南東の尾根上には大小の曲輪が階段状に連続する。また、主郭から南東に延びる尾根上にも階段状に曲輪が連続する。

これらの曲輪群を防御するように多気山中腹（標高225m付近）の南麓部を大規模な横堀が巡る。その総延長は約2kmにわたる。その東端には東へ突出する方形の張出し部が2ヵ所ある。平成3年度にこの付近が調査され、幅約8m、深さが4.5mの薬研堀が確認されている。土塁は内側と外側にあり、内側の土塁は幅約6m、高さ約2mで、内側斜面で三列の石積みが確認されている。そして、土塁の切れた部分で柱穴が確認され、この部分が木戸等を設けた虎口部分であることが判明している。また、この横堀の南西付近の坂虎口の一箇所、鍵の手状に曲がる土塁の一角に6～7段の石を積み上げた石積遺構が確認されている。城内にはこのような石積遺構が他にも何か所か確認されている。さらに西南麓の標高190m付近にも横堀が巡らされ、南西方向（鹿沼方面）をより強く意識した造りとなっている。

平成4年度には、城の外郭部分に当たる割田遺跡が調査された。この調査では、多気山から独立した南東側の丘陵上で堀・土塁が300mにわたり確認されている。堀の規模は上幅約7m、下幅約0.2m、深さ約4.2mの薬研堀で、土塁は幅6～7m、高さ1.5m、外側にも高さ約1mの土塁がめぐり、内外に土塁をもつ。これは、先に見た多気城の堀の構造と類似し、同時期の普請と考えられる。また、「折り」と土橋が一箇所確認されている。本遺跡以外にも周辺の丘陵上には堀があった可能性があり、これらが多気城の外郭線を成していたと考えられる。この外郭線と東の姿川、西の赤川に囲まれた城の規模は東西約1.5km、南北約2kmとなり、関東屈指の大城郭といえる。この外郭線に囲まれた城の南側には、現在でも「下河原」「粉河寺」「清願寺」「裏町」「扇町」「塙田」「源石町」といった宇都宮城下と同じ地名が残っている。このことは、国綱の本城移転が、防御強化の城の機能移転だけではなく、まさに城下町を含む宇都宮氏の本拠の移転であったことを物語っている。次に、本城跡の歴史について概略を述べる。

この城は、康平6年（1063）に宇都宮宗円が築城したとする説や、天正4年（1576）に宇都宮国綱が築城したとする説などがあるが定かではない。城の北東中腹には、現在多気山持宝院不動寺（真言宗）がある。寺内には平安後期作の不動明王坐像が安置されている。この仏像は宇都宮初代宗円が前九年の役（1051～62）の際に、源頼義に従い下向し、勝山（現在のさくら市氏家字勝山）で戦勝祈願を行った時のもので、その後、長治2年（1105）に二代宗綱が、当寺に移し本尊にしたものであると言われている。尚、寺伝によれば、弘仁13年（822）に、勝道上人の弟子尊鎮が馬頭観世音を本尊として開山したと言われている。

また、多気山の南東約1kmの大谷寺内には平安初期～鎌倉期にかけて彫られた千手観音像をはじめとする大谷磨崖仏（国特別史跡・重文）があり、この一帯が古代から中世初頭にかけては宗教的な空間であったことがわかる。

『宇都宮記』には、国綱が天正4年(1576)2月3日に普請を始め23日間という短期間でこの城を完成させたとある。一ヶ月弱という日数は、150haに及ぶ城域を築城するにあまりにも短すぎるので、基本部分はそれ以前に出来上がっていたと思われる。また、国綱はこのとき9歳であることから、父広綱が計画し実施したものと考えられている。尚、その年の8月7日に広綱は病死したとされる。

江戸後期に書かれた「宇都宮弥三郎国綱御家臣記」(柿沼輝家文書)には「多気兵庫頭」が居住していたことが記載され、宇都宮氏の家臣という家伝の「若目田氏系譜」(若目田久四郎家文書)には、「元龜四(一五七三)癸酉年八月依広綱殿命為多気城主有軍功」と記されている。このことから、元龜年間には多気城は存在し、宇都宮氏の家臣が居住していたと考えられる。

このころ宇都宮家中は、北条方・反北条方のどちらに属するか意見が分かれ、元龜3年(1572)には北条寄りの皆川俊宗が宇都宮領内に侵攻し、これに対し、佐竹・宇都宮方が皆川方の深沢城ほか11の城郭を攻撃している。また、壬生氏内部も宇都宮方の鹿沼城主徳雪斎周長と北条方を志向する壬生城主壬生義雄が対立し、天正7年(1579)に義雄が周長を殺害し、鹿沼城に入城する。このような時代の流れの中で、先に述べた多気城の強化改修工事が行われている。第3図17と18は壬生氏方の城で、その他の城は宇都宮氏方の城である。その多くは天正年間に築城されたと伝えられ、多気城との関連が指摘されている。

天正12年(1584)6月～7月にかけて、佐竹・宇都宮連合軍と北条氏直軍が下野国三毳山南麓の沼尻で対陣し、天正13年(1585)4月には、佐竹・宇都宮連合軍は壬生氏の本拠である鹿沼を攻撃し、続けて壬生・羽生田城を攻めている。これに対し、12月には北条・壬生・那須勢が宇都宮に攻め込み城下が放火されている。このような北条氏の攻勢が強まる中、宇都宮氏は本城を宇都宮城から多気城に移す。「日光山常行堂常住三十講表白」の奥書には「天正十三年酉乙八月廿八日宮ヨリ田野山ヲ城二取」とあり、そのことを裏付けている。また、「桜井武兵衛覚書」に「新宇都宮たけ」、「清水正花武功覚書」に「宇都宮新城」と登場する。尚、本拠を移した後の宇都宮城は有力家臣である玉生美濃守に任せたようである。

天正18年(1590)に北条氏が滅亡後、豊臣秀吉は7月26日～8月3日まで宇都宮城に滞在し「宇都宮仕置」を行っている。「今宮祭祀録」には「上ヨリ御奉行衆七月十三日二宮江御越候御帰之以来悉クたけ宮江移申候」とあり、秀吉滞在後に多気城より宇都宮城に本拠を戻したことが窺える。

国綱は、永禄11年(1568)に宇都宮広綱と佐竹義昭の娘との間に嫡子として生まれる。『下野國誌』には父の広綱が天正4年(1576)に32才の若さで亡くなり、国綱が幼少であったため、その死が伏せられていたと書かれている。『佐竹系譜』には元龜3年(1572)に「宇都宮広綱病あり」とあることから、広綱は元龜以降病に伏していたことがわかる。また、その死後は、母である佐竹義昭の娘南呂院と宿老が佐竹義重の後見を受けて政務を取り行っていたようである。その後の佐竹氏の動きを見ると、天正5年(1577)の北条氏の関宿・古河着陣に対し宇都宮氏を支援し、翌年には佐竹義重が壬生氏攻撃のため出陣するなど、下野国内で反北条の旗頭として活動を行っている。

宇都宮氏が多気山に本拠を移す時期は、国綱18歳の頃となる。『今宮祭祀録』によると、同年に国綱が佐竹義重とともに「田気ノ御堂」を建立したとある。このとき義重は三十代後半で、国綱にとっては「東方之衆」の旗頭であるとともに伯父であり、且つ幼少より指導を仰いだ父親的な存在であったと考えられる。父祖伝来の居城である宇都宮城から多気城に本拠を移したのには、北条氏の脅威だけではなく、それに対抗する佐竹氏の戦略的な意向もあったと考えられている。

天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原北条氏攻めにおいて、国綱は義重とともに秀吉に謁見し、豊臣方として行動する。国綱は石田三成の配下として忍城攻め等に参加している。北条氏滅亡後は、秀吉より旧領を安堵されたほか、羽柴侍従の称号を許可されている。

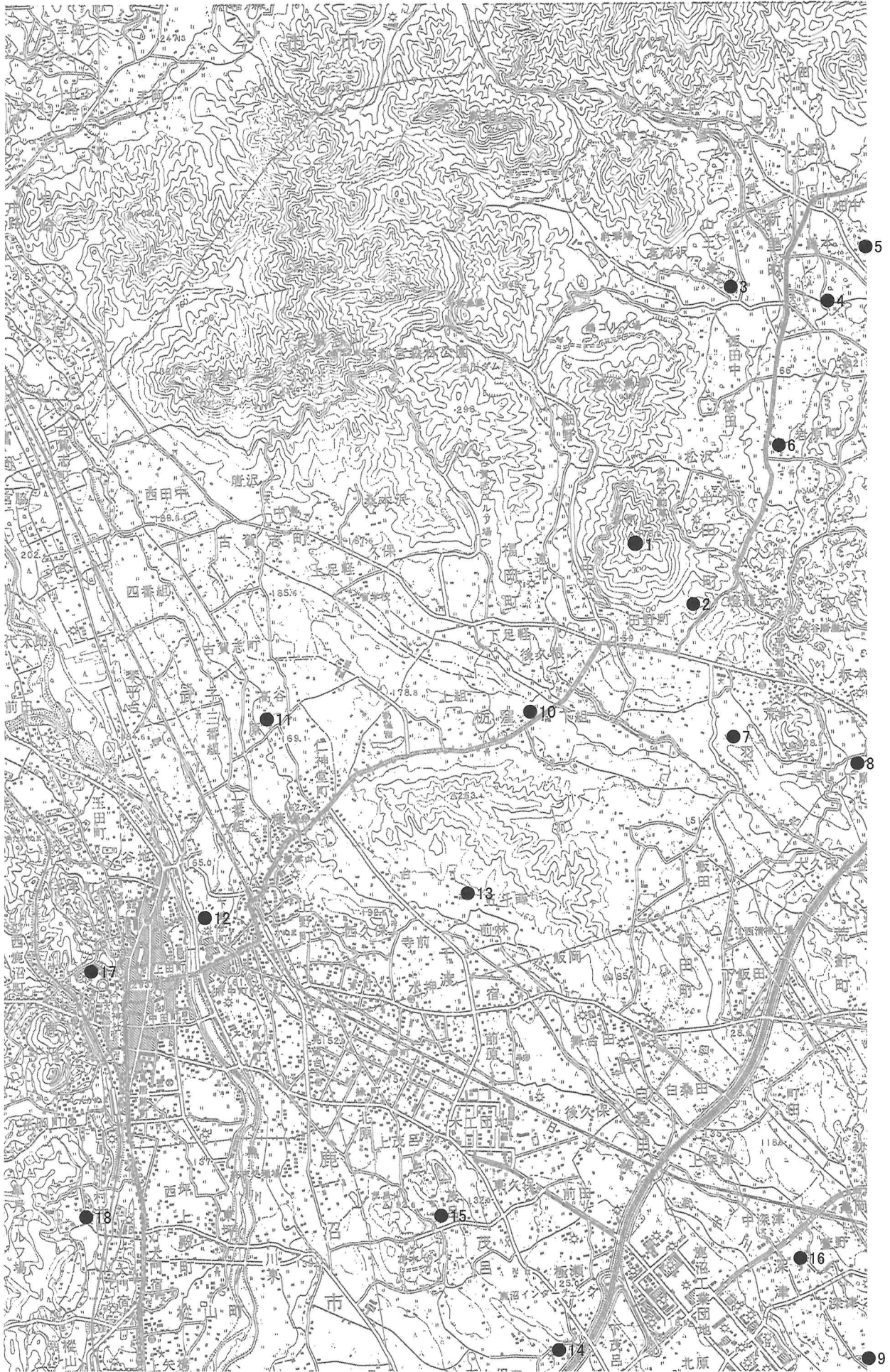
その後、秀吉の朝鮮出兵に参戦するが、慶長2年（1597）に秀吉より突然領地没収・追放の命が下り、国綱は改易となる。

【参考文献】

- 荒川善夫1993「中世下野の多気山城に関する一考察」『歴史と文化』第二号 栃木県歴史文化研究会
 荒川善夫・関口和也 2004「第7節宇都宮氏による多気山城の築城」『鹿沼市史』通史編原始・古代・中世
 鹿沼市史編さん委員会
 宇都宮市教育委員会1997『多気城跡』
 鹿沼市2002『鹿沼の城と館』
 栃木県教育委員会1982『栃木県の中世城館跡』

No.	遺名跡	所在地	備考
1	多気城跡	宇都宮市田下町ほか	天正13年に宇都宮国綱が宇都宮城より本拠を移す。
2	割田遺跡	宇都宮市田野町	平成4年度に多気城の外郭線となる堀・土塁が確認されている。
3	田中城跡	宇都宮市新里町	宇都宮氏家臣田中氏の居館と伝えられる。
4	高橋城跡	宇都宮市新里町	
5	大堀城跡	宇都宮市新里町	宇都宮氏家臣半田氏の居館と伝えられる。
6	岩原城跡	宇都宮市岩原町	宇都宮氏家臣高橋氏の居館と伝えられる。
7	羽下館跡	宇都宮市下荒針町	
8	中城跡	宇都宮市駒生町	平成2年度に城跡の一部を調査。
9	犬飼城跡（根古屋城跡）	宇都宮市上欠町	天正元年に犬飼康吉が城主となったと伝わる。
10	堀の内（栃窪）	鹿沼市栃窪	
11	高谷城跡	鹿沼市高谷町	宇都宮氏家臣高谷隼人が築城したと伝えられる。
12	府所城跡	鹿沼市下武子町	『那須記』に「府郡城主飯岡惣左衛門尉」とある。
13	千渡城跡	鹿沼市千渡	天正年間の築城と伝えられる。『那須記』に城主は宇賀地左京助とある。
14	茂呂城跡	鹿沼市茂呂	『那須記』に「師ノ城主市田備中守」とある。
15	堀ノ内（茂呂）	鹿沼市茂呂	『那須記』に「上師城主山崎丹波守」とある。
16	深津城跡	鹿沼市深津	永禄年間に宇都宮広綱の家臣小林豊後守が築いたとされる。
17	鹿沼城跡	鹿沼市今宮町ほか	天文元年壬生綱房が御殿山に城を築いたとされる。
18	村井城跡	鹿沼市大字村井	壬生綱重三男大門資長の築城と伝えられる。

第1表 周辺城跡一覧表



第3図 周辺城跡分布図 (1/50,000)

2 調査概要

今回の調査は、主郭部南側の第1図曲輪Ⅲ南側斜面の豎堀と東側の数段からなる腰曲輪を調査対象とした。特に間伐作業のために造られた作道により削られた部分の造成状況の調査を行った。以下、その結果について記す。

(1) 遺構

T-1 (第4図・第5図)

豎堀の南端部に、東西方向で幅1m×長さ7m、南方向に長さ2mのT字形のトレンチを設定し、堀・土塁の規模等を確認した。

堀は現状から約1.6mを掘り込み、底面はローム面に達する。表層(I層)の上に土塁の削平土が載る。第5図B-B'断面からもわかるように、堀はこの部分でローム地山を掘り残し、立ち上がりを見せる。堀の両側に土塁をもつが、東側が高く、西側が低いことから、東側の腰曲輪側が内側であることがわかる。東側土塁から堀底までの深さは約6m、外側と内側の土塁間での幅は約12mである。

T-2 (第4図・第5図)

このトレンチは、T-1の北側約22mのところに設置した。豎堀の内側土塁の構築状況を確認するために幅1.5m×長さ7mのトレンチを設定した。土塁の内側をKP層まで一旦掘り下げ、褐色地山の上に盛土をし、さらに土塁の内側斜面が崩れないように、17~27層(第5図E-E'セクション)を版築状に積み上げている。結果的に、土塁の内側には幅約3m、深さ約1mの溝状の掘り込みが形成される。1~8層はその溝の覆土層である。

曲輪b・曲輪c (第4図・第5図)

標高297m付近に平坦面をもつ曲輪で、先端部幅20m、平坦部奥側幅30m、奥行き約8mの台形状の曲輪である。D-D'ラインの地山直上で、一辺20cmの方形で平らな石を確認した。建物の礎石の可能性が考えられる。C-C'のセクションからこの曲輪が、地形を造成して造られていることが判明した。また、曲輪bの北東部の標高300m付近に先端部幅約10m、平坦部奥側幅約13m、奥行き約5mの台形状の小さな平坦部曲輪cが見られる。これは、曲輪bに侵入した敵に対し上方から攻撃するために設けられたものと考えられる。この部分も、F-F'、G-G'のセクションから地形を造成して構築されていることが判明した。

曲輪d・曲輪e (第6図・第8図)

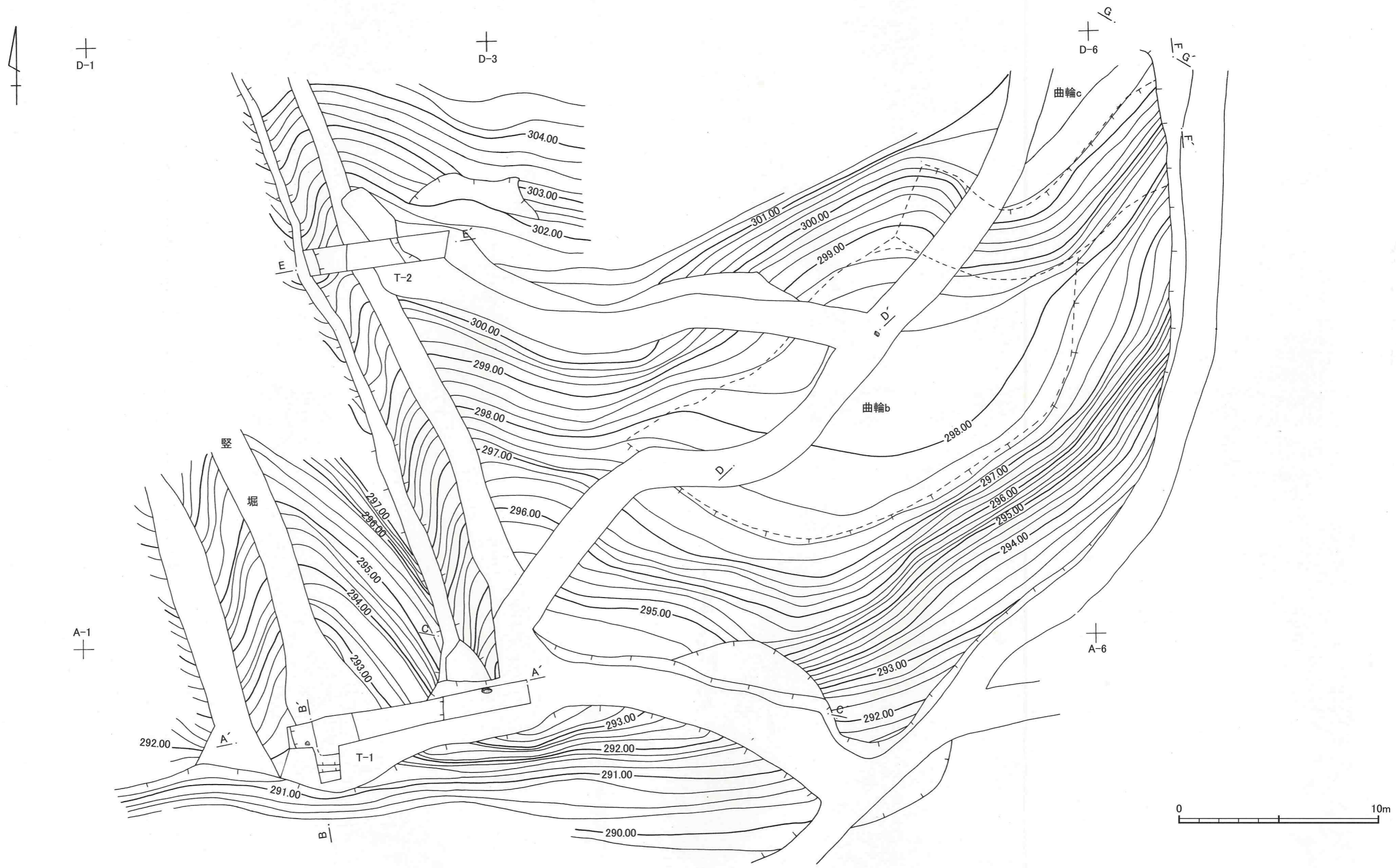
曲輪dは標高304m付近に平坦面をもつ曲輪で、先端部幅15m、平坦部奥側幅約25m、奥行き約5mの台形状の曲輪である。その右上の標高308m付近に曲輪eがある。先端部幅10m、平坦部奥側幅約20m、奥行き約4mの台形状の曲輪である。H-H'のセクションからこの曲輪が、地形を造成して造られていることが判明した。褐色地山の上に載る1~10層は盛土である。

曲輪f (第7図)

曲輪fは標高320m付近に平坦面をもつ曲輪で、先端部幅約40m、平坦部奥側幅約20m、奥行き約7mの台形状の曲輪である。この曲輪下の南西角から豎堀がはじまる。

曲輪g (第7図・第8図)

曲輪gは標高328m付近に平坦面をもつ曲輪で、先端部幅35m以上、平坦部奥側幅50m以上、奥行き約20mの曲輪で、今回の調査区内では最大のものである。K-K'はこの曲輪の南東部下セクションで、褐色地山の上に1~13層の盛土が載る。さらにその上の盛土状況はL-L'のセクションからわかる。かなり細かい単位で、地山から2m近い盛土がなされている。



第4図 堅堀・曲輪b・曲輪c平面図 (1/200)

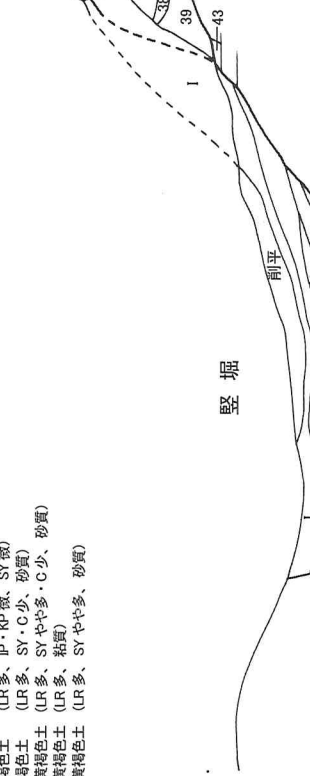
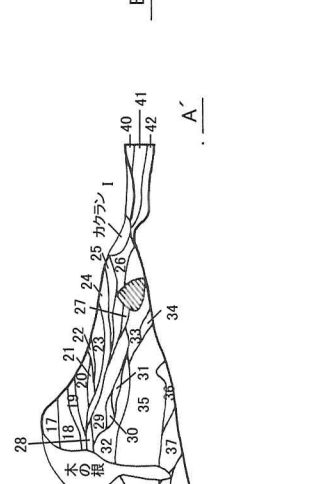
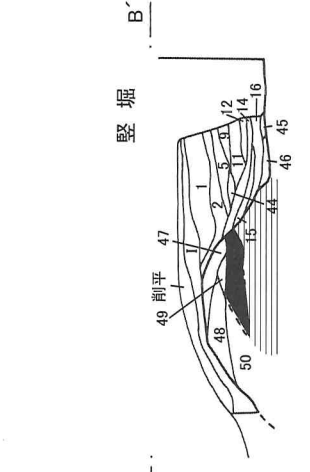
- 44 黄褐色土 (LR多、砂質)
 - 45 黄褐色土 (LR多)
 - 46 黄色土 (LR多、小LBやや多、SV、C)
 - 47 黄褐色土 (LR多、硬くまる)
 - 48 黄褐色土 (LR多、小LB少)
 - 49 暗黄褐色土 (LR少)
 - 50 黄褐色土 (LR多)
- L=A=292.700m
L=B=292.600m

- 36 暗褐色土 (LR少)
- 37 暗黄褐色土 (LB多、KPB少)
- 38 黄色土 (LRやや多、KP多)
- 39 黄褐色土 (LR多)
- 40 暗褐色土 (LR少、KP少)
- 41 暗黄褐色土 (LR多、KPやや多、KPB微)
- 42 黄色土 (KP多)
- 43 黄褐色土 (LR多、LBやや多、KP多)
- 44 黄褐色土 (LR多、砂質)

- 27 黄褐色土 (LR多、KP少)
- 28 暗褐色土 (LR少、KP少)
- 29 黄褐色土 (LRやや多、小KPB少、大KPB少)
- 30 暗褐色土 (KP微)
- 31 黄褐色土 (LRやや多、KPやや多)
- 32 暗黄褐色土 (LR多、KPやや多、小KPBやや多)
- 33 暗黄褐色土 (LR多、KP、KPB少)
- 34 黄褐色土 (LB多)
- 35 黄褐色土 (LR多、KPB少、KP少)

- 16 暗黄褐色土 (LR多、P少、SVやや多、C少、砂質)
- 17 暗褐色土 (LR少、KP少)
- 18 黄色土 (KP多、少KPBやや多)
- 19 暗褐色土 (小LB少、KP少)
- 20 黄褐色土 (LB多)
- 21 暗黄褐色土 (LR多、KP微)
- 22 黄褐色土 (LRやや多、KPやや多)
- 23 黄褐色土 (LR多、KP微)
- 24 暗黄褐色土 (LR多、KP少)
- 25 暗褐色土 (小LB、KP少)
- 26 黄褐色土 (LR多、KP少)

- I 表層 (LR少、KP微)
- 1 暗褐色土 (LR多)
- 2 黄褐色土 (LR多、KP少)
- 3 暗黄褐色土 (LR多、KPやや多)
- 4 暗黄褐色土 (LR多、KP微)
- 5 暗黄褐色土 (LR多、小LB少)
- 6 黄褐色土 (LR多、硬くまる)
- 7 黄褐色土 (LR多、小LB微、やや柔らかい)
- 8 黄褐色土 (LR多、小LB少、P・KP微、柔らかい)
- 9 黄色土 (LR多、SV微)
- 10 黄色土 (LR多、SV微)
- 11 黄褐色土 (LR多、P・KP微、SV微)
- 12 黄褐色土 (LR多、SV・C少、砂質)
- 13 赤黄褐色土 (LR多、SVやや多、C少、砂質)
- 14 暗黄褐色土 (LR多、粘質)
- 15 赤黄褐色土 (LR多、SVやや多、砂質)

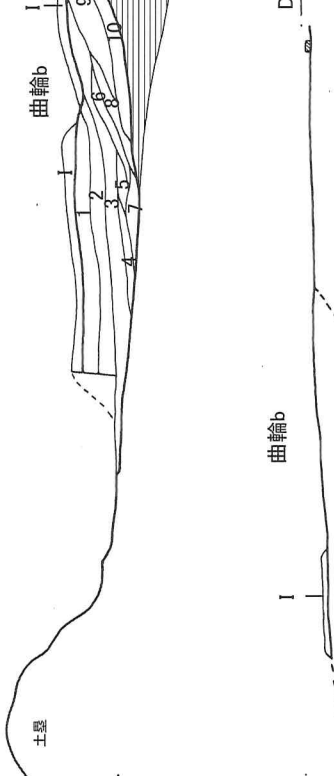
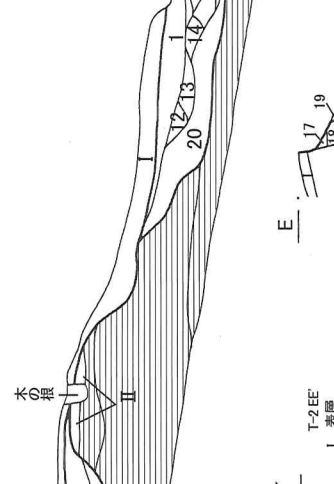
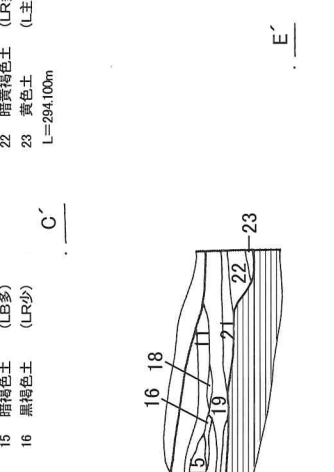


- 10 黄褐色土 (LR多、小LB少)
- 11 明褐色土 (LRやや多、小LB少)
- 12 暗褐色土 (LR少、小LB少)
- 13 黄色土 (LB多)
- 14 暗黄褐色土 (LRやや多、LB少)
- 15 暗褐色土 (LR多)
- 16 黑褐色土 (LR少)

- 5 黄色土 (L主体)
- 6 黄褐色土 (LR多、小LB、LB少)
- 7 黄褐色土 (小LB少、KP・KPB少)
- 8 暗黄褐色土 (黑色土、少LBやや多、LRやや多)
- 9 黄褐色土 (L主体)

- I 表層 (LR多)
- 1 暗褐色土 (LR多、P微)
- 2 黄褐色土 (LRやや多、P微)
- 3 暗黄褐色土 (LRやや多、P微)
- 4 暗黄褐色土 (LR少)

- 17 暗黄褐色土 (LR、小LBやや多)
 - 18 黄色土 (LB多)
 - 19 暗褐色土 (LRやや多、P微)
 - 20 黄褐色土 (LR・LB多)
 - 21 黄褐色土 (LR・LB多)
 - 22 暗黄褐色土 (LR多・小LB少)
 - 23 黄色土 (L主体)
- L=294.100m



- 1 黄褐色土 (LB多)
- 2 暗黄褐色土 (LBやや多、LB少)
- 3 暗黄褐色土 (LRやや多、LB少、KP微、C微)
- 4 黄褐色土 (LR多、KP微)
- 5 暗黄褐色土 (LR少、KP少)
- 6 暗褐色土 (LRやや多、KP少、砂質)
- 7 暗褐色土 (LRやや多、KPやや多)
- 8 暗褐色土 (LR多、小LB少)
- 9 暗黄褐色土 (LRやや多、KPやや多)
- 10 暗黄褐色土 (LR多、KPやや多、C微)
- 11 黄褐色土 (LR多、柔らかい)
- 12 黄褐色土 (LRやや多、KP多、硬くまる)
- 13 暗褐色土 (LRやや多、KP少)
- 14 暗黄褐色土 (LRやや多、KP少、硬くまる)
- 15 暗黄褐色土 (LRやや多、KPやや多、硬くまる)
- 16 黄褐色土 (LRやや多、KPやや多、硬くまる)
- 17 黄色土

- 18 黄褐色土 (LR多、KP少)
- 19 黄色土 (LR少、KP多)
- 20 黄褐色土 (LR多、KPやや多、C微)
- 21 黄色土 (LR多、KPやや多、KPB少)
- 22 黄褐色土 (LR多)
- 23 黄色土 (LRやや多、KP多、KPBやや多)

- I 表層 (LB多)
- 1 黄褐色土 (LBやや多)
- 2 暗黄褐色土 (LRやや多、LB少)
- 3 暗黄褐色土 (LRやや多、LB少、KP微、C微)
- 4 黄褐色土 (LR多、KP微)
- 5 暗黄褐色土 (LR少、KP少)
- 6 暗褐色土 (LRやや多、KP少、砂質)
- 7 暗褐色土 (LRやや多、KPやや多)
- 8 暗褐色土 (LR多、小LB少)
- 9 暗黄褐色土 (LRやや多、KPやや多)
- 10 暗黄褐色土 (LR多、KPやや多、C微)
- 11 黄褐色土 (LR多、柔らかい)
- 12 黄褐色土 (LRやや多、KP多、硬くまる)
- 13 暗褐色土 (LRやや多、KP少)
- 14 暗黄褐色土 (LRやや多、KP少、硬くまる)
- 15 暗黄褐色土 (LRやや多、KPやや多、硬くまる)
- 16 黄褐色土 (LRやや多、KPやや多、硬くまる)
- 17 黄色土

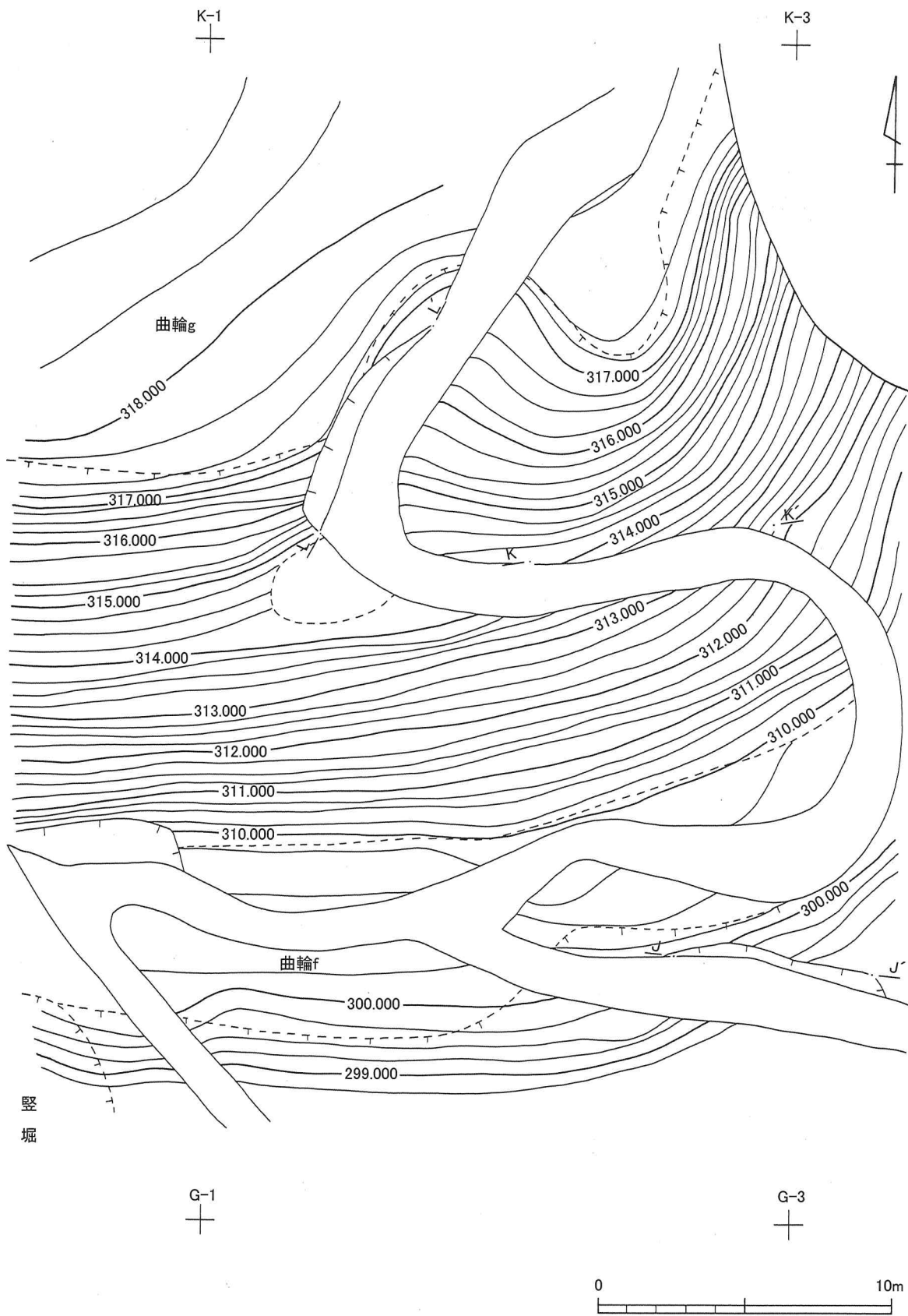
- FF・GG' I 表層 (LR多、LB多)
 - 1 黄褐色土 (LR多、小LB少)
 - 2 暗黄褐色土 (LR多)
 - 3 暗黄褐色土 (LB多、硬くまる)
 - 4 黄色土
- L=288.400m



第5図 断面図(1)

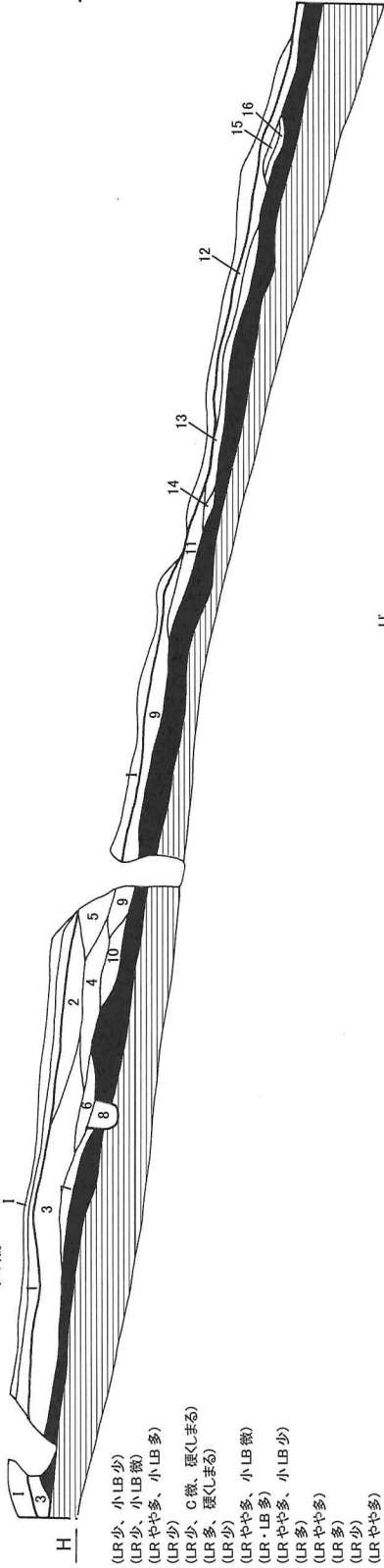


第6図 曲輪d・曲輪e 平面図 (1/200)



第7図 曲輪f・曲輪g 平面図 (1/200)

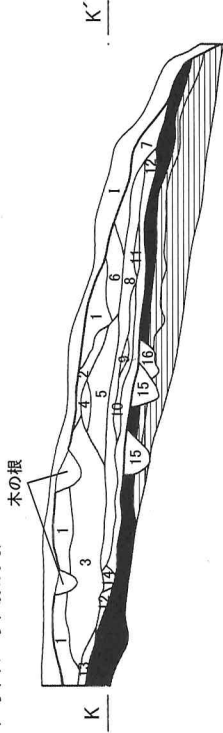
曲輪e



- H I 表層
 1 褐色土 (LR少, 小LB少)
 2 暗黄褐色土 (LR少, 小LB微)
 3 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LB多)
 4 暗褐色土 (LR少)
 5 暗褐色土 (LR少, C微, 硬(L)まる)
 6 暗褐色土 (LR少)
 7 暗褐色土 (LRやや多, 小LB微)
 8 暗褐色土 (LR・LB多)
 9 暗褐色土 (LRやや多, 小LB少)
 10 暗褐色土 (LR多)
 11 暗黄褐色土 (LRやや多)
 12 暗黄褐色土 (LR多)
 13 暗褐色土 (LR少)
 14 暗褐色土 (LRやや多)
 15 暗褐色土 (LR少)
 16 暗褐色土 (LR少)

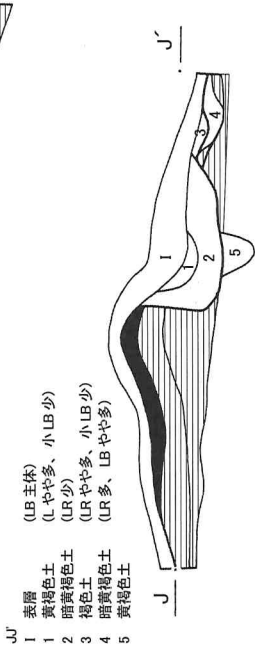


- I I' 表層
 1 暗黄褐色土 (LB多, 小LB少)
 2 暗黄褐色土 (LB微, 硬(L)まる)
 3 暗褐色土 (LR少)
 4 暗褐色土 (LR少, KP少)
 5 暗黄褐色土 (LR多, 大LB多, 硬(L)まる)
 6 暗黄褐色土 (LR少)
 7 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LB少)
 8 暗黄褐色土 (LR多, LBやや多)
 9 暗黄褐色土 (LR多, 小LB少)
 10 暗黄褐色土 (LRやや多, KPやや多, KP少, 硬(L)まる)
 11 暗黄褐色土 (KP少, 大LB多, 小LB微)
 12 暗黄褐色土 (LR少, 大LB多, 硬(L)まる)
 13 暗褐色土 (LR少, KP少)
 14 暗褐色土 (LR少, C微)
 15 暗褐色土 (LR微)
 L=309.600m



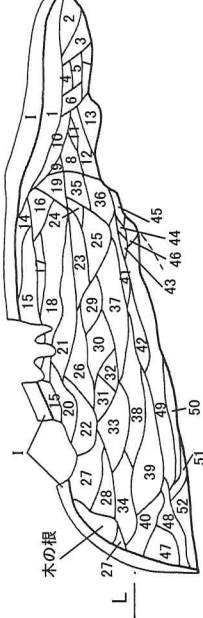
- K K' 表層
 1 暗黄褐色土 (LR多, 小LB少)
 2 暗黄褐色土 (小LB)
 3 暗黄褐色土 (LB少)
 4 暗褐色土 (LR少)
 5 暗黄褐色土 (LR多, LBやや多, 小LB少)
 6 暗黄褐色土 (LR多, LBやや多)
 7 暗黄褐色土 (LR多, 小LB少)
 8 暗黄褐色土 (LRやや多, KPやや多, KP少, 硬(L)まる)
 9 暗黄褐色土 (KP少, 小LB微)
 10 暗黄褐色土 (LR少, 大LB多, 硬(L)まる)
 11 暗黄褐色土 (LB多, 硬(L)まる)
 12 暗褐色土 (LB微, 硬(L)まる)
 13 暗褐色土 (LR少)
 14 暗褐色土 (LR少, KP少)
 15 暗褐色土 (LR多, LBやや多, 小LB少)
 16 暗褐色土 (LR多, KP少, C微)
 17 暗褐色土 (L微)
 L=313.000m

H'



- J J' 表層 (LB主体)
 1 暗黄褐色土 (Lやや多, 小LB少)
 2 暗黄褐色土 (LR少)
 3 暗褐色土 (LRやや多, 小LB少)
 4 暗黄褐色土 (LR多, LBやや多)
 5 暗黄褐色土

曲輪g



- L L' 表層
 1 暗黄褐色土 (LR多, LP微)
 2 暗黄褐色土 (LR多, LB多, 硬(L)まる)
 3 暗黄褐色土 (LR多, KPやや多)
 4 暗黄褐色土 (LR多, KP少)
 5 暗黄褐色土 (LRやや多, KP少)
 6 暗黄褐色土 (LR多, KP少, 小LB少)
 7 暗黄褐色土 (LR多, KP少)
 8 暗黄褐色土 (LR多, KP少, 小LB少)
 9 暗黄褐色土 (LR多, KP少)
 10 暗黄褐色土 (LR多, KP少)
 11 暗黄褐色土 (LR多, 小LBやや多, KPやや多)
 12 暗黄褐色土 (LR多, KP微)
 13 暗黄褐色土 (LR多, KPやや多, 硬(L)まる)
 14 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LB少)
 15 暗黄褐色土 (LRやや多, LBやや多)
 16 暗黄褐色土 (LR多, LB多)
 17 暗黄褐色土 (LR少, 小LB少)
 18 暗黄褐色土 (LR少, KP微)
 19 暗黄褐色土 (LR少, LP微)
 20 暗黄褐色土 (LR少, 小LB少)
 21 暗褐色土 (LR少, 小LBやや多, LB少)
 22 暗褐色土 (LRやや多, 小LBやや多)
 23 暗褐色土 (LB多)
 24 暗褐色土 (LB多, 大LB少)
 25 暗褐色土 (LRやや多, LBやや少)
 26 暗褐色土 (LR多, LB少)
 27 暗黄褐色土 (LR少, LB少)
 28 暗褐色土 (LR少, 小LB少)
 29 暗黄褐色土 (LR多, 小LBやや多)
 30 暗黄褐色土 (LR少, 小LB多, LB少)
 31 暗黄褐色土 (LRやや多)
 32 暗黄褐色土 (LR多, KPやや多, LB少, KP少)
 33 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LBやや多)
 34 暗黄褐色土 (LR多, LB多)
 35 暗黄褐色土 (LR少, KP少)
 36 暗黄褐色土 (LR少, 小LB微)
 37 暗黄褐色土 (LR少, 小LB少)
 38 暗黄褐色土 (LRやや多, LBやや多, KP微)
 39 暗黄褐色土 (LB多, 硬(L)まる)
 40 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LB微)
 41 暗黄褐色土 (LR微)
 42 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LB微)
 43 暗黄褐色土 (LR多)
 44 暗黄褐色土 (LRやや多, 小LBやや多, LB少)
 45 暗褐色土 (LR少)
 46 暗褐色土 (LR多, 小LB微)
 47 暗黄褐色土 (LR少, 小LB微)
 48 暗黄褐色土 (LR多)
 49 暗黄褐色土 (LR多)
 50 暗褐色土 (LR少)
 51 暗褐色土 (LR多, LB多)
 52 暗黄褐色土 (L=316.600m)



第8図 断面図 (2)

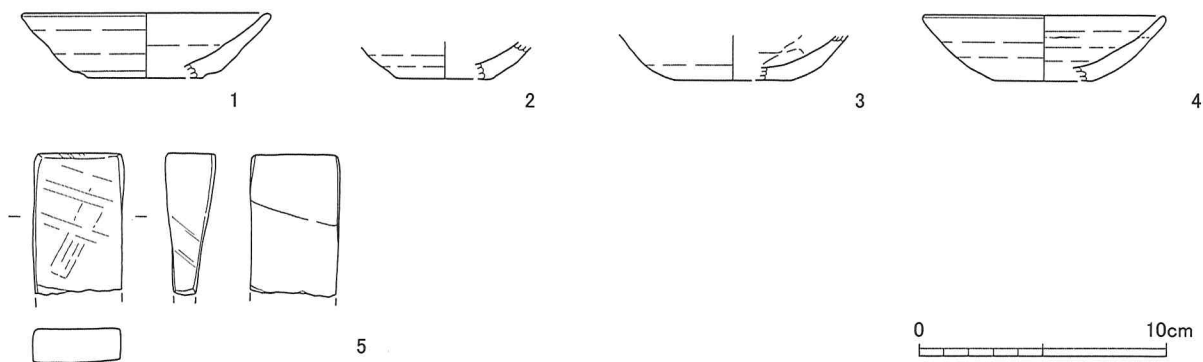
作道による等高線の乱れはあるが、第7図からわかるように元々、この部分は凹形になっており、虎口であった可能性が考えられる。

(2) 遺物

出土遺物は、かわらけ数点と砥石1点である。かわらけは、ロクロ成形のもので、すべて16世紀代のものである。砥石はT-1の堀底から出土した。詳細については観察表のとおりである。

No.	器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径							
1	かわらけ	(10.0)	2.6	4.5	平底で、体部は直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	褐色	砂粒・赤色スコリア粒を含む。	良好	曲輪b	1/6残 灯明皿
2	かわらけ			(4.0)	平底。	ロクロ成形。底部回転糸切り後ナデ。	橙褐色	砂粒・赤色スコリア粒を含む。	良好	曲輪b	底部一部
3	かわらけ			(4.6)	平底。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	乳白色	砂粒・赤色スコリア粒を含む。	良好	曲輪f	1/6残
4	かわらけ	(9.9)	2.6	(4.0)	平底で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	橙褐色	砂粒・赤色スコリア粒を含む。	良好	表探	底部一部
5	砥石	現存長(5.6)	幅3.5			四面に使用痕が見られる。	灰色	砂岩?		T-1堀底	破片

第2表 出土遺物観察表



第9図 出土遺物実測図

3 おわりに

今回の調査は、主郭南側の竪堀及び曲輪の一部を調査し、次の点が判明した。

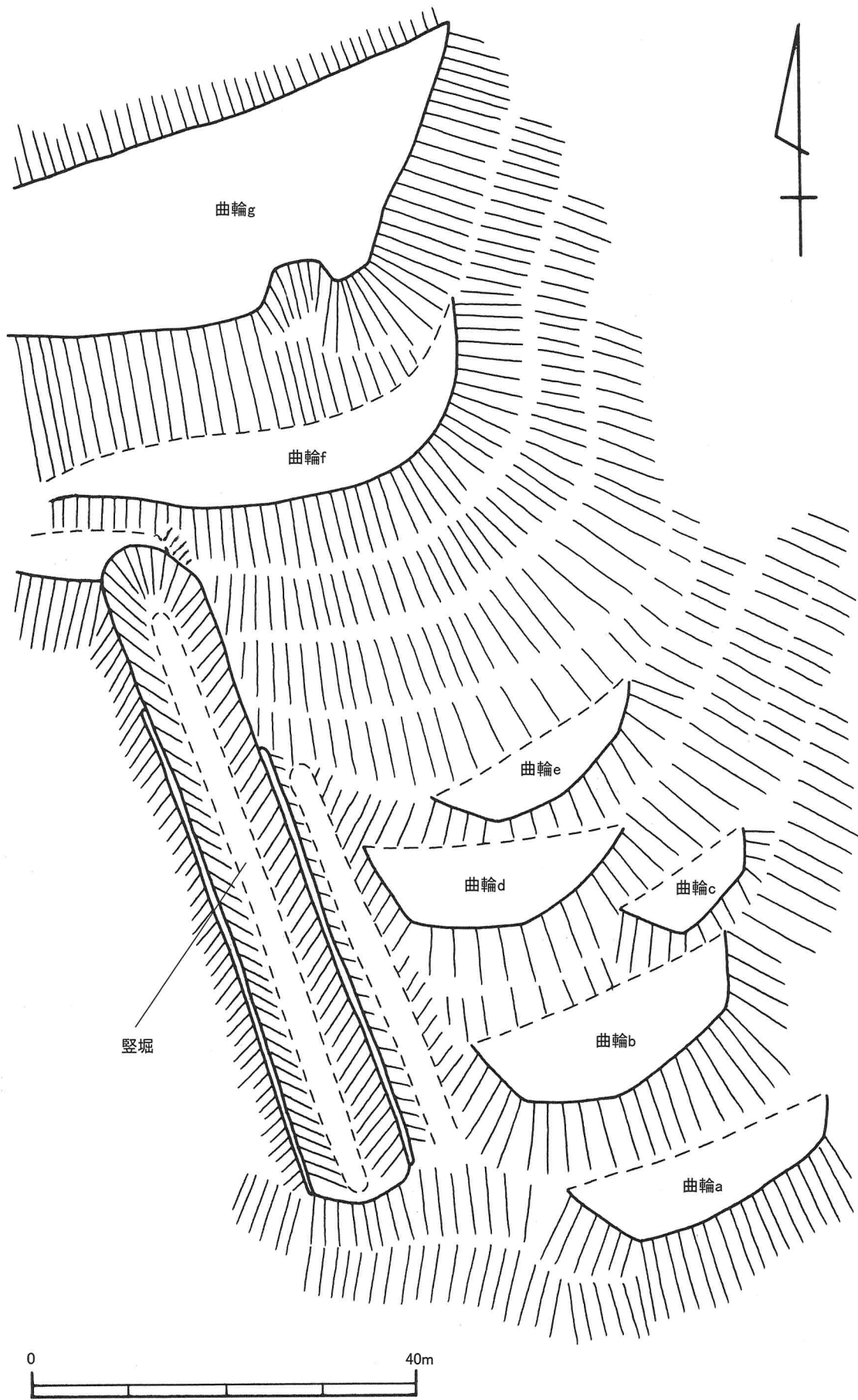
①竪堀は南北方向に掘られ、堀を挟んで両側に土塁を持つ。東側の土塁の内側には1 m程の溝が土塁に並行して掘られている。竪堀の規模は上幅約12m、下幅約2.5m、深さ約5 mの箱堀で、総延長は約70mである。竪堀の埋土下層には炭化物や焼土が混じる層が確認されたことから、城内で戦闘があった可能性が考えられる。

②曲輪は調査区内で7段確認された。作道により削られた断面を観察した結果、褐色地山の上にロームブロックを主体とした土を積み上げている状況が確認できた。よって、自然の丘陵部を切り盛りして平坦部を造成していることがわかった。平坦部の規模は、曲輪bが約200 m²、曲輪cが約60 m²、曲輪dが約140 m²、曲輪eが約70 m²、曲輪fが約220 m²以上、曲輪gは850 m²以上で、最小が曲輪c、最大が曲輪gである。また曲輪cは曲輪bの北東に隣接し、曲輪bに侵入した敵に対し、上部からの攻撃ができる位置関係となっている。また、曲輪dと曲輪eも同様の配置となっている。

③出土した遺物は極めて少ないが、かわらけや染付皿の破片が出土している。それらの遺物は16世紀代のものと考えられる。また、かなり使いこまれた砥石が竪堀内から出土しており注目される。

以上の点をまとめてみると、第10図に示すように曲輪は7段設けられている。曲輪aから曲輪fは斜面を切り盛りして幅の狭い平坦部を形成しているが、曲輪gはかなり大きく造成をし、広い平坦部をもつ曲輪を形成している。竪堀は曲輪bから曲輪fの西側に掘られ、堀の東側に高い土塁、西側に低い土塁をもつ。この堀は曲輪f直下で、西からの横堀と連結する。尚、堀の埋土下層に焼土が混入していることから、この城での戦闘があったと考えられる。

今回の調査区は、本丸部分に当たる御殿平の南側に位置することから、腰曲輪や竪堀により堅固に守られていた状況が判明した。特に鹿沼城に本拠を置く壬生氏は、南西方向から侵攻してくることから、この竪堀はそれに対する備えと考えられる。これらの遺構は出土遺物から、『宇都宮記』にある国綱が天正4年（1576）に普請をしたとされる時期もしくは、宇都宮氏が宇都宮城から本拠をこの多気城に移したとされる天正13年（1585）頃の16世紀後半段階に整備されたものと考えられる。



第10図 多気城跡調査区部分縦堀及び腰曲輪想定図 (1/600)

第Ⅱ章 岡本城跡

1 はじめに

(1) 調査の経過

岡本城跡は昭和45年4月1日に旧河内町指定史跡に指定された。古里村誌によれば、「南北百八十間、東西百七十間、面積は凡そ十町余りあり、四囲を廻らずに五重の濠をもってす。各濠の深さ凡そ二軒、広さ凡そ八間あり」とある。城郭跡は北東部の小高いところにあり、土塁と一ノ堀は現存しているが、その外側については堀跡や土塁も残っておらず、その正確な位置などはこれまで城跡が未調査であったことから不明であった。

そこで、平成19年の市町合併により岡本城跡が宇都宮市指定史跡となったことや近年、周辺の宅地開発が活発な動きを見せ始めたことから、城跡の現状把握と範囲確認のための調査を平成21年～平成23年度にかけて3回実施した。今回の調査では、50cmコンターで堀・土塁等を描き出し、さらに堀に試掘溝（トレンチ）を入れて規模や位置を確認するなどした。なお調査に当たっては国・県（平成21年度のみ）の補助を得て実施した。

第Ⅰ次調査は、平成21年7月1日に開始し、平成21年8月31日までの期間で実施した。史跡内西側の一ノ堀、二ノ堀、北側の崖下及び主郭部分の虎口周辺に計7本のトレンチを設定し、堀の位置や幅・深さ、虎口周辺の建物跡の確認を行った。調査の結果、主郭部分の堀・土塁の規模や、北崖下にも堀と土塁があったことが確認できた。また、主郭部分の虎口内側には区画溝があることや、溝内から16世紀のかわらけを確認できた。

第Ⅱ次調査は、平成22年8月2日に開始し、平成22年10月13日までの期間で実施した。主郭内東側や主郭部分の虎口周辺及び二ノ堀の東側部分に計7本のトレンチを設定し、主郭内の建物跡や区画溝などの有無について確認を行った。調査の結果、虎口内側に貼石遺構や建物跡を確認した。また、現在残っている北側崖部分の土塁の下から古い時期の堀跡が確認され、城が何回か造り替えられたことが判明した。二ノ堀の東側部分についても第Ⅰ次調査で確認された部分と繋がる堀跡が確認された。

第Ⅲ次調査は、平成23年11月15日に開始し、平成23年12月12日までの期間で実施した。主郭南側の二ノ堀と三ノ堀の間に計8本のトレンチを設定し、二ノ堀の南側の立ち上がり部分や東側崖の土塁・堀・虎口部分の状況を調査した。調査の結果、二ノ堀と三ノ堀との間に二ノ堀よりも古い時期の南北方向の堀跡を確認した。また、虎口部分の柱穴や東側崖際の堀と土塁を確認できた。南北方向の堀跡や崖際の堀跡の様子からこの城は改修工事が数回行われ、最終的に深い堀と土塁をもつ本格的な戦国期の城になったことが判明した。

【調査日誌抄】

(第Ⅰ次調査)

- 7月1日 プレハブ等の設置。測量に先立つ下草刈り。
- 7月3日 基準杭・水準点の打設。測量に先立つ下草刈り。
- 7月7日 基準杭打設。地形測量。
- 7月9日～7月17日 地形測量。
- 7月21日 地形測量。T-1を設定し、掘り下げ。
- 7月23日 T-1の掘り下げ。T-2、T-3を設定し、掘り下げ。



第11図 調査区全体図 (1/1,200)

- 7月27日 T-1、T-2、T-3の掘り下げ。
- 7月29日 T-1で土器2点出土。T-2の深さ1.5m付近で川原石がまとまって出土。東側の壁付近で小札と思われる鉄製品1点出土。T-4の設定。
- 7月30日 T-1の掘り下げ。T-2を掘り下げたところ、川原石の範囲の広がりを確認。鎬連弁門と思われる青磁片1点出土。
- 7月31日 T-4の掘り下げ。二の郭北西部の地形測量。
- 8月3日 T-1の掘り下げ。二の郭南西部の地形測量。
- 8月4日 T-1下層の掘り下げ。南側の壁を確認。T-2下層の掘り下げ。T-4の掘り下げ。溝及びピットを確認。
- 8月5日 T-1、T-2下層の掘り下げ。床面の確認できず。T-3掘り下げ。T-4溝及びピットの掘り下げ。溝から16世紀代と思われるかわらけが出土。
- 8月6日 T-1清掃後写真撮影。セクション図作成。T-3掘り下げ。T-4清掃後写真撮影。平面図及びセクション図作成。二ノ堀と想定される部分にT-5とT-6を設定し、掘り下げ。
- 8月7日 T-1一部を掘り下げ、セクション図を追加。南北方向のエレベーション作成。T-3の掘り下げ。土塁の表面に小砂利と川原石を確認。T-6掘り下げ。二ノ堀の北側立ち上がりを確認。かわらけの小片が出土。
- 8月11日 T-3の掘り下げ。T-5の掘り下げ。二ノ堀南側の立ち上がりを確認。埋土中よりかわらけ1点が出土。
- 8月17日 T-3掘り下げ。T-5掘り下げ。二ノ堀の北側立ち上がりを確認。清掃後写真撮影し、セクション図と平面図を作成。T-6を北に1.5m延長し、掘り下げ。
- 8月18日 T-4を東側に0.5m程拡張し、掘り下げ。T-6を南と西に0.5m拡張し、掘り下げ。土橋状の張り出しを確認。T-7をT-5とT-6の間に設定し、堀の繋がりを確認する。
- 8月20日 T-3の掘り下げ。T-6の平面図・コンター図作成。T-7の掘り下げ。平面図作成。今回の調査地区の空撮を実施。
- 8月21日 T-3の掘り下げを行い、ほぼ完掘状態とする。T-7の平面図・コンター図作成。
- 8月24日 T-1埋め戻し。T-3清掃後写真撮影をし、セクション図作成。T-4平面図・コンター図作成。
- 8月25日 T-1、T-5～7の埋め戻し完了。T-2堀底確認のための掘り下げ。T-4の鉄製品の取り上げ。T-3の平面図・コンター図作成。
- 8月26日 T-3、T-4の埋め戻し完了。T-2の堀底を確認し、セクション図追加。深さ6.5mの薬研堀であることが判明。
- 8月27日 T-2埋め戻し。調査終了。
- 8月31日 プレハブ等の撤去。
- (第II次調査)
- 8月2日 プレハブ等の設置
- 8月3日 基準杭・水準点の打設。測量に先立つ下草刈り。
- 8月5日 基準杭の打設。測量に先立つ下草刈り。T-10を設定。
- 8月6日 基準杭の打設。測量に先立つ下草刈り。T-10の掘り下げ。
- 8月10日～8月31日 地形測量。
- 8月10日 T-10の掘り下げ。T-11を設定し、掘り下げ。
- 8月17日 T-11の掘り下げ。T-12を設定する。T-10を西に1m広げ、掘り下げる。川原石や土器片、陶器片が出土。
- 8月20日 T-12の掘り下げ。
- 8月23日 T-12の掘り下げ。T-13を設定し、掘り下げ。

- 8月24日 T-12の掘り下げ。
- 8月25日 T-12の掘り下げ。溝を確認し、掘り下げた。
- 8月27日 T-12の掘り下げ。土器片が出土。
- 8月30日 T-12、T-13の掘り下げ。
- 8月31日 T-12の掘り下げ。下層より土器片が数点出土。T-13の掘り下げ。T-10を西側に1mほど拡張し、掘り下げ。
- 9月1日 T-10の掘り下げとトレンチ南側の貼石遺構の清掃。
- 9月2日 T-10の掘り下げとトレンチ南側の貼石遺構の清掃。T-12、T-13の掘り下げ。どちらのトレンチからも土器片が出土。
- 9月6日 T-11の掘り下げ。下層から硯のかけらが出土。T-12、T-13の掘り下げ。T-10を拡張し、石積みの様子を確認。
- 9月7日 T-11を清掃後写真撮影し、セクション図と平面図を作成。T-12を掘り下げ、清掃後写真撮影し、セクション図を作成。T-14を設定。
- 9月9日 T-12を清掃後写真撮影し、セクション図を作成。T-14の掘り下げ。
- 9月10日 T-10内の溝を掘り下げ、溝内からピットを3基確認。T-11とT-12の平面図を作成。T-14の掘り下げ。下層より土器片が多く出土。
- 9月13日 T-10の貼石遺構の平面図を作成。T-10を北と西に1mずつ広げる。ピットを1基確認。
- 9月14日 T-10の貼石遺構の平面図を作成。T-10を西側に1.5m拡張し、掘り下げる。T-14の掘り下げ。下層より土器片と鉄器が出土。
- 9月15日 T-10の貼石遺構とT-10の平面図を作成。T-12の掘り下げ。T-13の清掃後写真撮影し、セクション図を作成。T-14の掘り下げ。下層より土器片が数点出土。T-14の清掃後写真撮影し、セクション図、平面図を作成。T-15、T-16を設定し、掘り下げ。
- 9月17日 T-10内の溝を掘り下げ、清掃後写真撮影した。貼石遺構から茶臼が出土した。その後平面図・セクション図を作成。T-12を50cmほど延長して掘り下げ、平面図とセクション図を作成。T-13を清掃後写真撮影し、平面図とセクション図を作成。T-14内の溝を掘り下げたところ、鉄鍬や大きなかわらけ片が出土した。その後清掃し、写真撮影後平面図を作成。T-12で見られた古い溝とこの溝が繋がることが判明した。
- 9月21日 T-10の断ち割り。土塁盛土以前の古い溝を確認。T-12の平面図とセクション図の追加後、埋め戻し。T-13を掘り下げ堀底を確認。T-14の溝を掘り下げた後、写真撮影をし、セクション図と平面図を作成。
- 9月22日 T-10の清掃後、完掘写真を撮影。セクション図・平面図の作成。T-11の埋め戻し。T-13の東側の掘り下げ。T-12を60cm北側に伸ばし、掘り下げた。T-13の柱穴を掘り下げた。T-12とT-14の埋め戻し。
- 9月30日 T-10の貼石遺構の平面図・コンター図を作成後、埋め戻し。T-13の平面図とセクション図を作成後、埋め戻し。プレハブ等の撤去。
- 10月1日 T-15とT-16の掘り下げ。堀の北側の立ち上がりを確認する。
- 10月4日 T-15とT-16の掘り下げ。堀底を確認する。
- 10月5日 T-16の清掃後、写真撮影しセクション図を作成した。T-15のセクション図の作成。
- 10月6日 T-15の清掃後、写真撮影した。その後埋め戻し。T-16の埋め戻し。
- 10月8日 T-15とT-16の埋め戻し。
- 10月12日 T-15とT-16の埋め戻し。調査終了。

(第Ⅲ次調査)

- 11月14日 プレハブ等の設置。
- 11月15日 測量に先立つ下草刈り。
- 11月18日～12月5日 地形測量。
- 11月18日 T-17を設定し掘り下げた。土器片が1点出土。T-18を設定した。
- 11月22日 T-17を北側に50cm伸ばし掘り下げた。T-18の掘り下げ。土器片が1点出土。
- 11月25日 T-17、T-18の掘り下げ。二ノ堀の南側の立ち上がりを確認。二ノ堀の1.5m南側に二ノ堀より古い時期の溝を確認。T-19を設定し、掘り下げ。
- 11月28日 T-17の清掃後、写真撮影した。T-18の掘り下げ。T-19の掘り下げ、床面を確認。T-20を設定。
- 12月1日 T-17のセクション図を作成し、完掘する。T-18の清掃後、写真撮影した。T-19の掘り下げ。T-20の掘り下げ。柱穴を確認する。T-21を設定し、掘り下げ。
- 12月2日 T-18のセクション図を作成。T-19の掘り下げ、床面の確認。T-20を東に拡張。T-21で土坑2基と溝1条を確認し、掘り下げた。
- 12月5日 T-17とT-18の平面図を作成。T-19の掘り下げ。薬研堀であることが判明。T-20をさらに拡張し、柱穴を探す。T-21内の土坑と溝を掘り下げた。T-21の北側に溝の繋がりを確認するためにT-22を設定し、掘り下げた。
- 12月6日 T-17の平面図作成。T-19を掘り下げ、床面を確認し、セクション図を作成。T-21内の溝を掘り下げ、鉄製具が出土する。遺物出土状況を写真撮影し、平面図を作成。T-22を掘り下げ、南に2m拡張した。T-21とT-22の溝の繋がりを確認するためにT-23とT-24を設定し、掘り下げた。かわらけ片・内耳土器片が出土。
- 12月7日 T-19を掘り下げ、床面を確認する。その後、平面図とセクション図を作成。T-20の平面図とセクション図を作成。T-21の完掘写真を撮影。T-22を完掘し、セクション図を作成。T-23とT-24を掘り下げ、古い堀跡の繋がりを確認。
- 12月9日 T-17、T-19の清掃後、完掘写真を撮影。T-20を上げ、柱穴を探す。T-21の清掃後、セクションを写真撮影。T-22を清掃後、セクションと完掘写真を撮影。T-23のセクション図の作成。T-24の清掃後、完掘写真を撮影し、セクション図を作成した。
- 12月12日 T-17、T-18の埋め戻し。T-19のセクション図を作成し、埋め戻す。T-20を掘り下げ、追加のセクション図を作成する。その後、清掃しセクションと完掘写真を撮影。T-22を清掃し、セクション図を作成。T-24のセクション図を作成する。3番目の堀の層から茶臼が出土。平面図を作成後、埋め戻しをする。
- 12月13日 T-21とT-23のセクション図を作成後、埋め戻し。調査終了。
- 12月14日 プレハブ等の撤去。

(2) 遺跡の環境

岡本城跡の所在する宇都宮市は、栃木県の中央部に位置し、関東平野の最奥部にあたる。岡本城跡は栃木県の中央部を南流している鬼怒川の右岸に位置し、宇都宮市街地の北東へ約9km、高根沢町の中心地から西南西へ約4kmに位置する。

岡本城跡は鬼怒川右岸の標高約140mの岡本台地上に立地する。岡本台地は岡本城跡を北東端とし南西に傾斜する台地である。台地を沿うように九郷半川が流れており、台地下部の北側と東側はほとんどが水田である。周辺には民家が多少あり、南側には宇都宮市立岡本北小学校がある。

次に本遺跡の周辺約2km圏内の遺跡を中心に、歴史的環境について概略を述べる。

旧石器時代

岡本台地の段丘縁に位置する日枝神社南遺跡(9)では、チョッパー、フレイクが出土している。旧石器時代の遺跡は本遺跡のみであるが、立地的には調査が進めば他にも発見される可能性がある。

縄文時代

中期は、日吉神社北遺跡(6)、第二公園南遺跡(12)、第一公園東遺跡(14)等で加曾利E式等の土器片が、後期は古里中学校遺跡(2)、岡本小学校遺跡(8)で堀之内式等の土器片が出土しているが、現在はほとんどの遺跡が消滅しており、遺構も不明である。

弥生時代

現在のところ、未発見である。

古墳時代の集落

現在のところ、未発見である。

古墳時代の古墳

日枝神社南古墳は、平成元年に河内町教育委員会が実施した発掘調査の結果、古墳ではなく経塚であったことが判明した。このことから、近接した第二公園内古墳群(円墳2基)も古墳ではない可能性が出てきた。

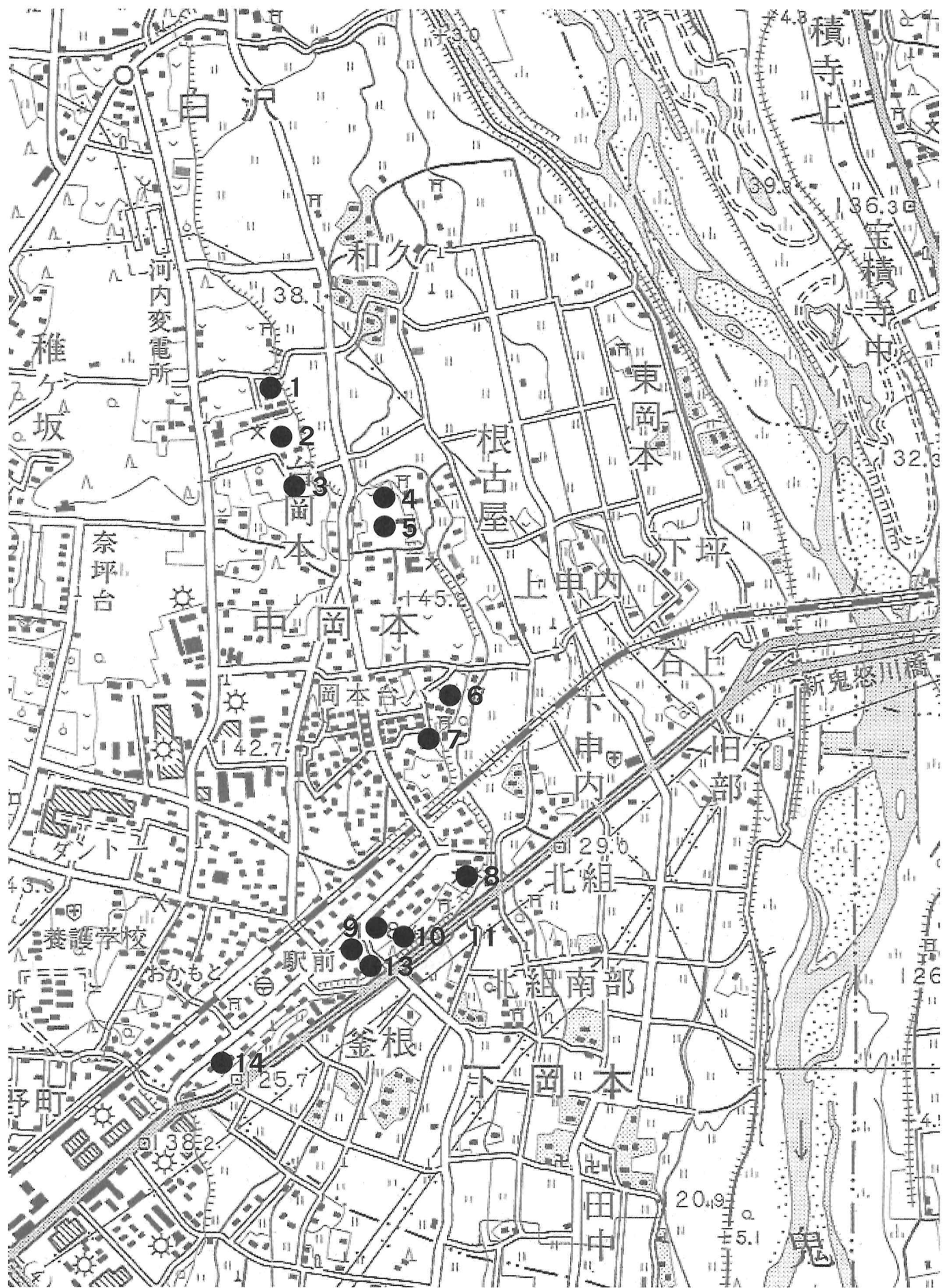
飛鳥時代以降

古里中学校北遺跡(1)、岡本城内遺跡(5)、日吉神社北遺跡(6)、日吉神社西遺跡(7)で土師器の土器片が出土しているが、現在のところほとんどの遺跡が消滅しており、遺構についても不明である。

(参考文献) 河内町教育委員会1997『日枝神社南遺跡・日枝神社南古墳発掘調査報告書』

NO.	遺跡名	所在地	時代と種別	概要
1	古里中学校北遺跡	宇都宮市中岡本町	土師器散布地	
2	古里中学校遺跡	宇都宮市中岡本町	縄文(後期)散布地	堀之内式
3	寺山遺跡	宇都宮市中岡本町	南北朝～室町の寺院跡	
4	岡本城跡	宇都宮市中岡本町	室町時代の城館跡	
5	岡本城内遺跡	宇都宮市中岡本町	土師器散布地	
6	日吉神社北遺跡	宇都宮市中岡本町	縄文(中期)土師器散布地	加曾利E式
7	日吉神社西遺跡	宇都宮市中岡本町	縄文 土師器散布地	
8	岡本小学校遺跡	宇都宮市下岡本町	縄文(後期)散布地	
9	日枝神社南遺跡	宇都宮市下岡本町	旧石器時代	チョッパー・フレイク出土
10	第二公園内古墳群	宇都宮市下岡本町	古墳時代の古墳	円墳(?)2基
11	日枝神社南古墳	宇都宮市下岡本町	古代の道路跡 江戸時代の経塚	経塚1基、東山道跡
12	第二公園南遺跡	宇都宮市下岡本町	縄文(中期)散布地	加曾利E式
13	第二公園古墳群	宇都宮市下岡本町		
14	第一公園東遺跡	宇都宮市下岡本町	縄文(中期)散布地	

第3表 周辺遺跡一覧表



第12図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

2 調査概要

調査は、三次にわたり行った。第Ⅰ次調査ではT-1～T-7の7本のトレンチを設定し、第Ⅱ次調査ではT-10～T-16の7本のトレンチを設定し、第Ⅲ次調査ではT-17～T-24の8本のトレンチを設定した。以下、その結果について記す。

(1) 遺構

T-1 (第13図)

主郭への虎口部分と考えられる南側中央土橋状遺構の西側に、幅1.5m×長さ6mのトレンチを設定し、遺構の確認を行った。

現状では土橋状となっている遺構は、断面観察の結果、後世に作業用として盛土されたものであることが判明した。1～6層は堀が埋まった後に盛土された層である。保存目的の調査であるため、2m以上の掘り下げを行わなかったが、部分的に掘り下げた結果、堀底はK P層下のローム層まで達し、現地表面から堀底までの深さは約3mであることがわかった。土塁の標高が147.400mであることから、土塁頂部から堀底までの深さは約6m、堀幅は約12mを測る。

T-2 (第14図)

T-2は、主郭の西側の堀の規模等を確認するために、幅1.4m×長さ5.6mのトレンチを設定し調査を行った。この場所は、主郭の土塁が後世に削平されている。保存目的の調査であるため、2m以上の掘り下げを行わなかったが、部分的に掘り下げた結果、堀底はK P層下のローム層まで達し、現地表面から堀底までの深さは約2.6mであることがわかった。また、堀の断面形状は薬研堀と考えられ、推定の堀底幅は約40cm、上幅は約10mを測ると推定される。なお、埋土中層から川原石がまとまって出土した。

T-3 (第15図)

T-3は、主郭の北側崖下をめぐる堀の規模等を確認するために、幅1.4m×長さ7.2mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、幅約5m、深さ60～80cmの堀が崖下裾部をめぐるということが判明した。また、その外側には40～50cmも盛土による土塁が併行してめぐり、さらにその外側を九郷半川が流れている。堀底は粘土混じりの礫層で、調査中も水が湧き出してくることから、当時は水堀であった可能性がある。堀底の標高が、135.250mであることから、主郭との比高は約10mである。

T-4 (第16図)

T-4は、主郭の南側中央の虎口と思われる土塁の切れている内側の状況を確認するために、幅2m×長さ7mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、現状では確認できない溝跡が確認できた。その規模は幅約3m、深さ約80cmの逆台形状の溝跡(SD01)で、底面から川原石が多く出土した。溝底面はI P層中である。また、溝内から、直径20cmの柱穴が2基確認できた。溝は土塁と併行して掘られ、土塁が切れた入口と思われる部分で内側に屈曲する。第Ⅱ次調査で、この西側を調査したところ、この続きと思われる溝が確認できたことから、入口部分において溝が凹形に掘られ、虎口部分を区画していたことが判明した。

T-5 (第17図)

T-5は、主郭の南西側の二ノ堀を確認するために、幅1.4m×長さ16mのトレンチを設定し調査を行った。この場所は、主郭の南西側で、現在は畑となっており堀跡の痕跡はみられないが、地元住民の話や、『河内町史』などから二ノ堀の存在が想定された。調査の結果、堀幅約9m、深さ約1mの堀を確認した。保存目的の調査であるため、堀の立ち上がり部分のみの調査とした。

この堀の南側に隣接して、幅1.6m、深さ50cmの溝跡が確認できた。断面観察の結果、二ノ堀の方が古く溝の方が新しいことが判明した。

T-6 (第18図)

T-6は、T-5の東側28mのところの二ノ堀のつながりを確認するために、幅1m×長さ8.6mのトレンチを設定し調査を行った。すぐ東側を現在の畑道がとおっているが、地元住民の話では、以前はこのトレンチ付近に道があったとのことである。調査の結果、二ノ堀の北側の掘り込みラインを確認した。

堀はこの場所でクランクし南側に突出し、C-C'断面でわかるように堀底も西側が上がってきていることから、土橋の可能性はある。A-A'での堀底の標高は、145.500mで、I P層が堀底となる。

T-7 (第19図)

T-7は、T-5とT-6の間に二ノ堀のつながりを確認するために、幅1.4m×長さ6mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、このトレンチを斜めに横切る堀を確認した。二ノ堀の南側のラインと考えられる。現況からの堀底の深さは1.4mで、堀底の標高は145.700mである。

T-10 (第20図)

第I次調査のT-4の東側に、幅8m×長さ8mのトレンチを設定し、主郭の南側中央の虎口と思われる内側の状況を確認するための調査を行った。調査前に土塁上に川原石が散在していたことから、虎口に関係する遺構と思われた。調査の結果、土塁が1mほど積まれた後に、その斜面上に川原石を古墳の葺石のように葺いている状況が確認できた。ただし、土塁の頂部ではなく、幅約5m、長さ約3mの土塁の内側のみに川原石を葺いている。

土塁裾部では幅約2m、深さ60cmの区画溝が確認された。この溝は位置関係からT-4のSD01とつながるものと考えられる。さらにSD01と接続する南北方向の幅約1.4m、深さ約40cmの溝を確認した。また、G-G'の断面観察の結果、土塁構築以前の溝跡も確認された。

C-C'ラインでは土塁下端部で柱穴と思われるピットを1箇所確認したが、反対側の土塁下端部で対となるピットを確認することができず、門に関連する遺構は見つからなかった。

I-I'の断面観察から区画溝に切られたピットやF-F'の断面観察から整地層(21層)に切られたピットが確認され、城の最終段階以前の柱穴で、この部分に掘立柱建物が建っていたものと思われる。

T-11 (第21図)

T-11は、主郭の南東部の土塁内側の状況を確認するために、幅1.6m×長さ9mのトレンチを設定し調査を行った。現状でも見られた溝部を調査した結果、幅約2m、深さ約60cmの断面逆台形の溝であることが確認できた。断面形状や規模が同じことからSD01と同一の遺構と考えられる。

T-12 (第22図)

T-12は、主郭の北側土塁の規模等を確認するために、幅1.6m×長さ14mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、5本の溝もしくは堀跡を確認した。

SD03は幅約1m、深さ約20cmの浅い溝跡で、整地層(1層)が上にのっていることから、それ以前の遺構であることがわかる。

SD04は幅約2m、深さ約60cmの断面逆台形状を呈する溝跡で、断面観察から5本の中では一番新しい時期のものである。その形状や規模はSD01に類似する。

SD05は上幅約2.6m、下幅0.8m、深さ約1mの溝跡もしくは堀跡で、断面観察から2時期の変遷が見られる。SD04に切られていることからそれ以前の遺構と考えられる。

SD06は幅60～80cm、深さ60cmの溝跡で、SD05、SD07に切られることから一番古い遺構と考えられる。

SD07は上幅約2m、下幅0.3m、深さ約1mの溝跡もしくは堀跡で、A-A'の断面観察からSD06→SD07→SD05の順と考えられる。

T-13 (第23図)

T-13は、主郭が東側に張出す部分の状況を確認するために、幅1.2m×長さ18mのトレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、溝2条と堀1基、土坑1基、柱穴等を確認した。

一番西側の溝は、幅約60cm、深さ約20cmのU字形の溝跡で、形状や規模、位置関係からSD03とのつながりも考えられるが、断面観察の結果、整地層を切っていることから、新しい時期の溝と思われる。その東側の溝跡は、幅約2m、深さ約60cmの断面V字形を呈する。断面形状はやや異なるが、SD01の繋がりと考えられる。

また、この溝跡に切れ、整地層(6層)下から上幅約6m、下幅約4m、深さ70cmの南北方向の堀跡を確認した。この堀跡の延長上には、現状の主郭を囲む堀の方向と一致する。

SK01は崖際の土塁下より、長軸1.2m、幅1m、深さ60cmの長方形のものが1基確認できた。整地層下であることから、一段階古い時期の遺構である。

T-14 (第24図)

T-14は、T-12の西側22mの位置に、北側土塁の規模等を確認するために、幅1.6m×長さ11mのトレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、溝跡1条と堀1基を確認した。溝跡は、幅約2m、深さ60cmの断面逆台形状を呈する。その規模や形状からSD04と同一遺構と考えられる。また、この溝跡は、北側の土塁とも一体のものであり、城の最終段階に存在したものと考えられる。

この溝跡の南へ5mのところ、上幅3.4m、下幅約1m、深さ約1.5mの断面逆台形状の堀跡が確認できた。整地層(1層)下からの確認であることから、それ以前の堀跡である。堀埋土中から15世紀代と思われるかわらけが出土している。

T-15 (第25図)

T-15は、二ノ堀のつながりを確認するために、幅1.4m×長さ7mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、二ノ堀北側のラインを確認することができた。土塁は削平により見られず、表土層を剥ぐとすぐに褐色地山となった。堀の傾斜角は50度である。遺構保護の調査であることから深さ2mまでの掘り下げとした。

T-16 (第25図)

T-16は、二ノ堀のつながりを確認するために、幅1.4m×長さ10mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、二ノ堀北側のラインを確認することができた。土塁は削平により見られず、表土層を剥ぐとすぐに今市軽石層(IP)の地山となった。堀の傾斜角は45度である。遺構保護の調査であることから深さ2mまでの掘り下げとした。

T-17 (第26図)

第Ⅱ次調査で行った二ノ堀の南側ラインを確認するために、幅1.4m×長さ3.2mのトレンチを設定し、遺構の確認を行った。

トレンチ北辺から40cm南側で二ノ堀の掘り込みラインを確認した。このすぐ北側を現在も使用している農道がとおっているため、これ以上の調査は実施しなかった。

また、この掘り込みより40cm南側で溝跡を1条確認した。幅は約2m、深さ約60cmの断面U字形を呈する(SD08)。現状ではその痕跡は見られないため、城の遺構に関するものと思われる。

T-18 (第26図)

T-17の東側20mに、二ノ堀の南側ラインを確認するために、幅1.8m×長さ8mのトレンチを設定し調査を行った。

トレンチ北辺から70cm南側で二ノ堀の掘り込みラインを確認した。このすぐ北側を現在も使用している農道がとおっているため、これ以上の調査は実施しなかった。

また、この掘り込みより1m南側でT-17で確認した溝跡のつながりを確認した。幅は約1.6m、深さ約80cmの断面U字形を呈し、SD08のつながりと考えられる。

T-19 (第27図)

T-19は、三ノ郭の東側崖上の土塁の規模等を確認するために、幅1m×長さ8mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、2時期の溝跡が確認できた。古い時期の溝跡は幅約2.4m、深さ約40cmの浅く幅広のもので、新しい時期の物は幅約2m、深さ約1mの断面U字形を呈するもので、崖上端の土塁と一体のものである。現況での土塁の高さは約1mである。

T-20 (第28図)

三ノ郭の虎口部分と思われる土塁の切れている内側の状況を確認するために、幅3m×長さ4.2mのトレンチを設定し調査を行った。調査の結果、現状では確認できない溝跡が確認できた。その規模は幅約80cm、深さ約20cmの浅い溝跡である。土塁が切れている部分であることから、虎口に関する溝であると考えられるが、門等の遺構は確認できなかった。

T-21 (第30図)

T-21は、現在農道が南北にとおっている場所で、地形が西に向かって緩く傾斜し、何らかの遺構があると考えられたことから、幅1.5m×長さ8.6mのトレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、現状では埋まってしまっている堀跡を確認した。断面観察の結果、この堀跡は4回の掘り直しが確認できた。一番古い時期のものが、一番深く、トレンチの西壁側で確認され、現況から約2mの深さである(I期)。26～30層の自然堆積で、形状から箱堀であったと考えられる。次に23～25層の薬研堀と考えられるもので、底幅は40cmである(II期)。次は20～22層で、底幅は2.4m以上、現況からの深さが約1mである(III期)。次は15～18層で、現況からの深さが1.2mでU字形を呈するもの(IV期)で、堀というよりは溝跡の表現の方が適切かもしれない。次に7層で、上幅1m、深さ40cmの溝跡で、その形状や規模からSD08と同じものと考えられる。

そしてこれらは、整地層(2～6層)によりバックされており、城の最終段階では機能していなかったものと思われる。

T-22 (第30図)

T-21の北側6mのところにT-21で新たに見つかった堀のつながりを確認するために、幅1.6m×長さ4.6mのトレンチと、幅1.6m×長さ2.4mのトレンチとを設定した。北側のトレンチではSD08

のつながりと考えられる幅約1m、深さ約40cmの溝跡を確認した。

南側のトレンチでは、T-21で確認された堀の繋がりと考えられる遺構の上場を確認したが、現道部分に近いことからこれ以上の調査はできなかった。

T-23 (第30図)

T-21とT-22の間にトレンチを設定し、堀の繋がりを確認した。

断面観察の結果、T-21同様4回の掘り直しが確認できた。I期は12～17層で、現況から約1.8mの深さである。II期は11層の薬研堀で、底幅は40cm、深さ1.7mである。III期は10層の箱堀で、現況からの深さが約1mである。IV期は7～9層で、現況からの深さが1.2mでU字形を呈する溝跡である。V期は6層で、上幅80cm、深さ30cmの溝跡で、IV期の溝跡の上層に位置する。

そしてこれらは、整地層(3～5層)によりパックされており、城の最終段階では機能していなかったものと思われる。

T-24 (第29図)

T-24は、T-21の南側7mに設定し、堀の繋がりを確認した。

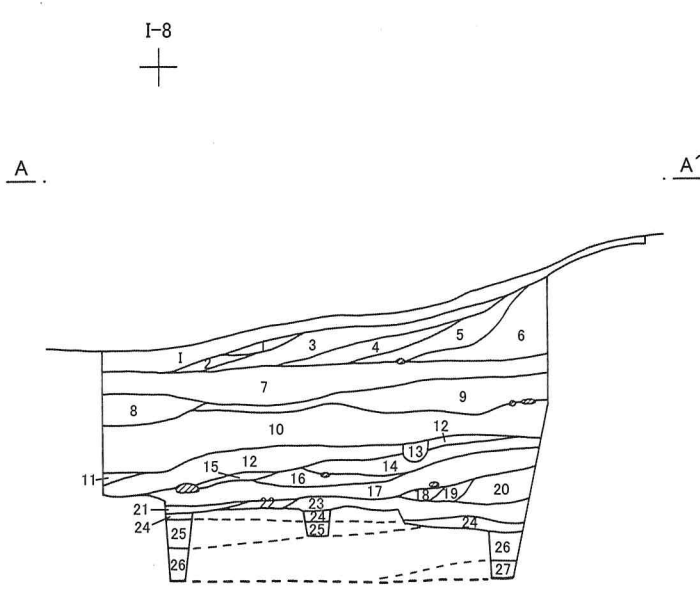
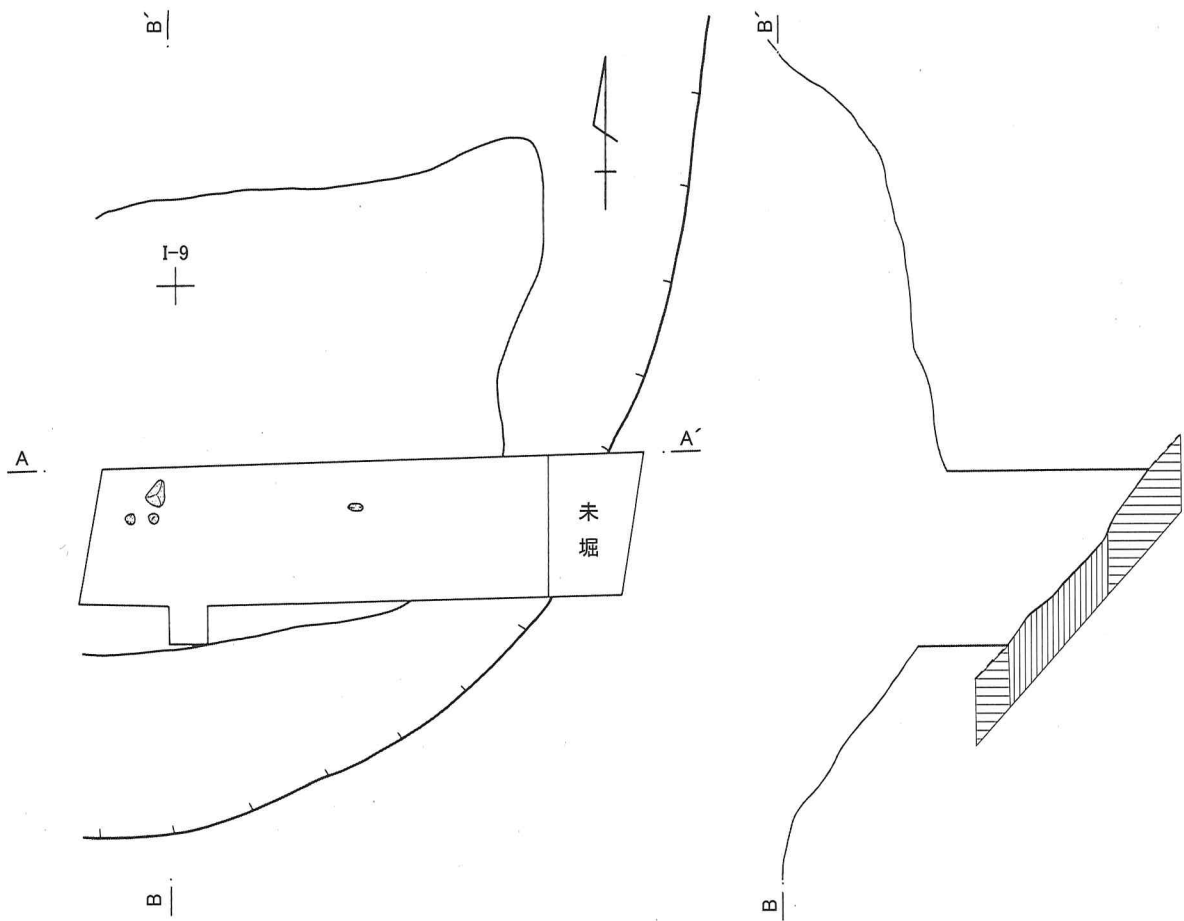
断面観察の結果、T-21同様4回の掘り直しが確認できた。I期は17～22層で、現況から約1.4mの深さである。II期は16層の薬研堀で、底幅は20cm、深さ1.4mである。III期は15層の箱堀で、現況からの深さが約0.8mである。IV期は11～13層で、現況からの深さが1.2mでU字形を呈する溝跡である。V期は10層で、上幅1m、深さ60cmの溝跡である。

そしてこれらは、整地層(1～3・7層)によりパックされており、他のトレンチで確認されたのと同様に城の最終段階では機能していなかったものと思われる。

(2) 遺物

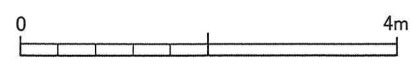
出土遺物は、かわらけ、内耳土器、青磁、白磁、染付、瀬戸焼、石製品(茶臼、砥石)、鉄製品(刀子、鉄鎌、紡錘車、釘、鉄滓)などが出土した。かわらけは、ロクロ成形のもので、すべて15～16世紀代のものである。詳細については観察表(第4表・第5表)のとおりである。

なお、53の内耳土器は、今回の調査区の外側にあたる中岡本地内の個人住宅建設に先立つ工事立会の際に出土したものである。

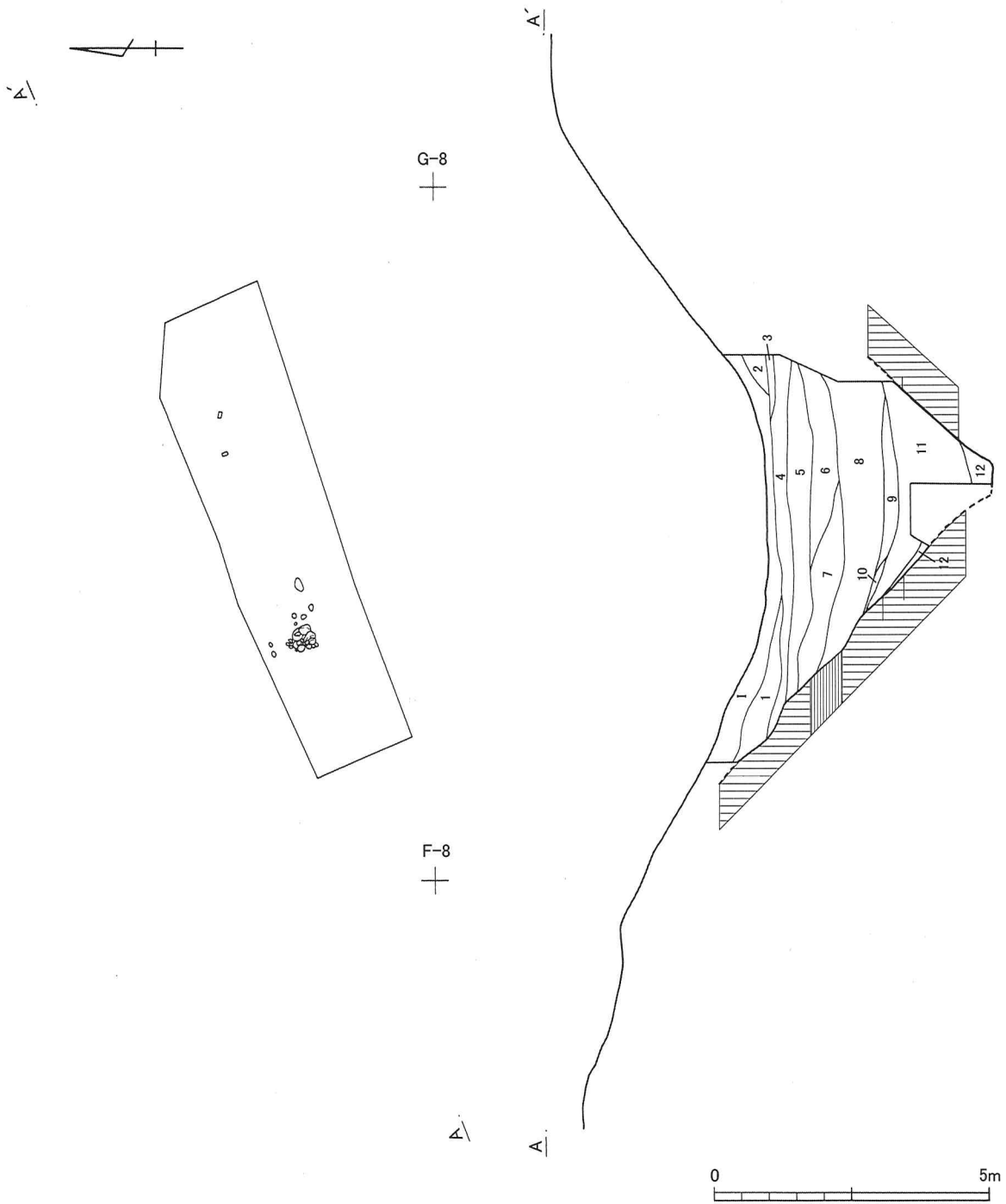


- I 表層
- 1 黄色土 (LR 多)
- 2 橙色土 (IP 多)
- 3 褐色土 (LR やや多、IP 少)
- 4 黄褐色土 (LB 多、IP 少)
- 5 黑色土 (IP・SP 微)
- 6 橙褐色土 (IP 多、SPB、IPB やや多)
- 7 暗褐色土 (LR 少)
- 8 暗褐色土 (LR やや多)
- 9 褐色土 (LR やや多、IP 多)
- 10 暗黄褐色土 (LR・IP・SP 少)
- 11 褐色土 (LR・小LB やや多)
- 12 暗黄褐色土 (LR・IP・SP 少)
- 13 暗褐色土 (LR・IP 微)
- 14 黑褐色土 (LR やや多、IP 少)
- 15 黄色土 (LR 多、IP 少)
- 16 黄白褐色土 (LR やや多、KP やや多)
- 17 暗褐色土 (LR・IP 少)
- 18 褐色土 (LR やや多、IP 少)
- 19 黄白褐色土 (LR・KP やや多)
- 20 褐色土 (LR やや多)
- 21 黄褐色土 (小LB、IP 少)
- 22 褐色土 (LR 少)
- 23 黑褐色土 (IP やや多、SP 少)
- 24 暗褐色土 (LR 少、IP 少)
- 25 褐色土 (LR やや多、IP 少)
- 26 黑褐色土 (LR・IP 少)
- 27 暗黄褐色土 (LR 多、IP やや多、さらさら)

L=145.600m

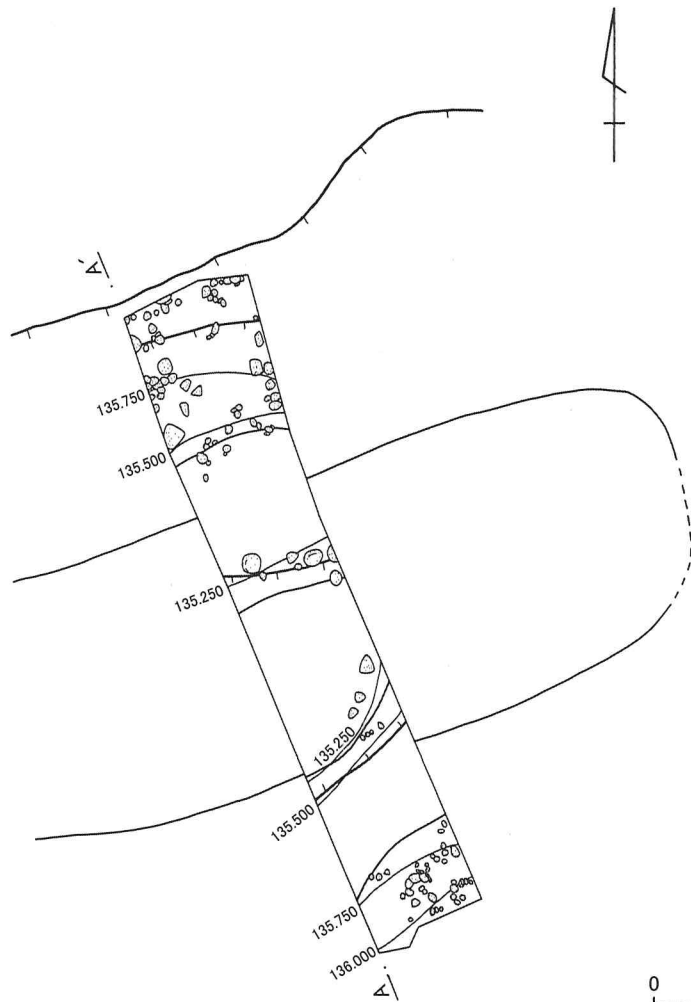


第13図 T-1 平・断面図



第14图 T-2平·断面图

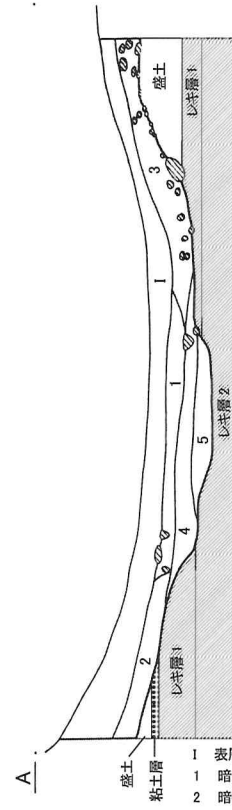
D-2



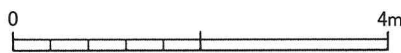
D-3



A'

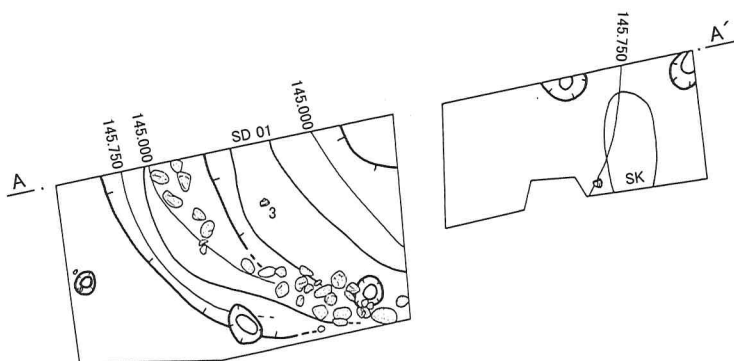


- I 表層
- 1 暗赤褐色土 (砂・小砂利混り層)
 - 2 暗褐色土 (粘質層)
 - 3 暗褐色土 (小石が混じる)
 - 4 黒色土 (粘質層、小石・小砂利を含む)
 - 5 暗灰色土 (粘土・小石・小砂利を含む)
- L=131.700m



第15図 T-3 平・断面図

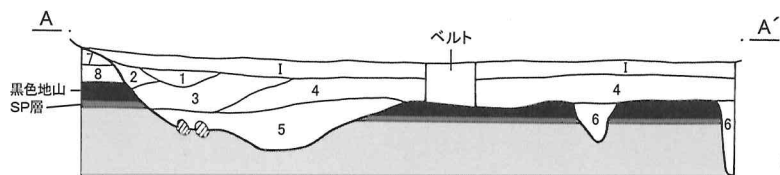
I-8



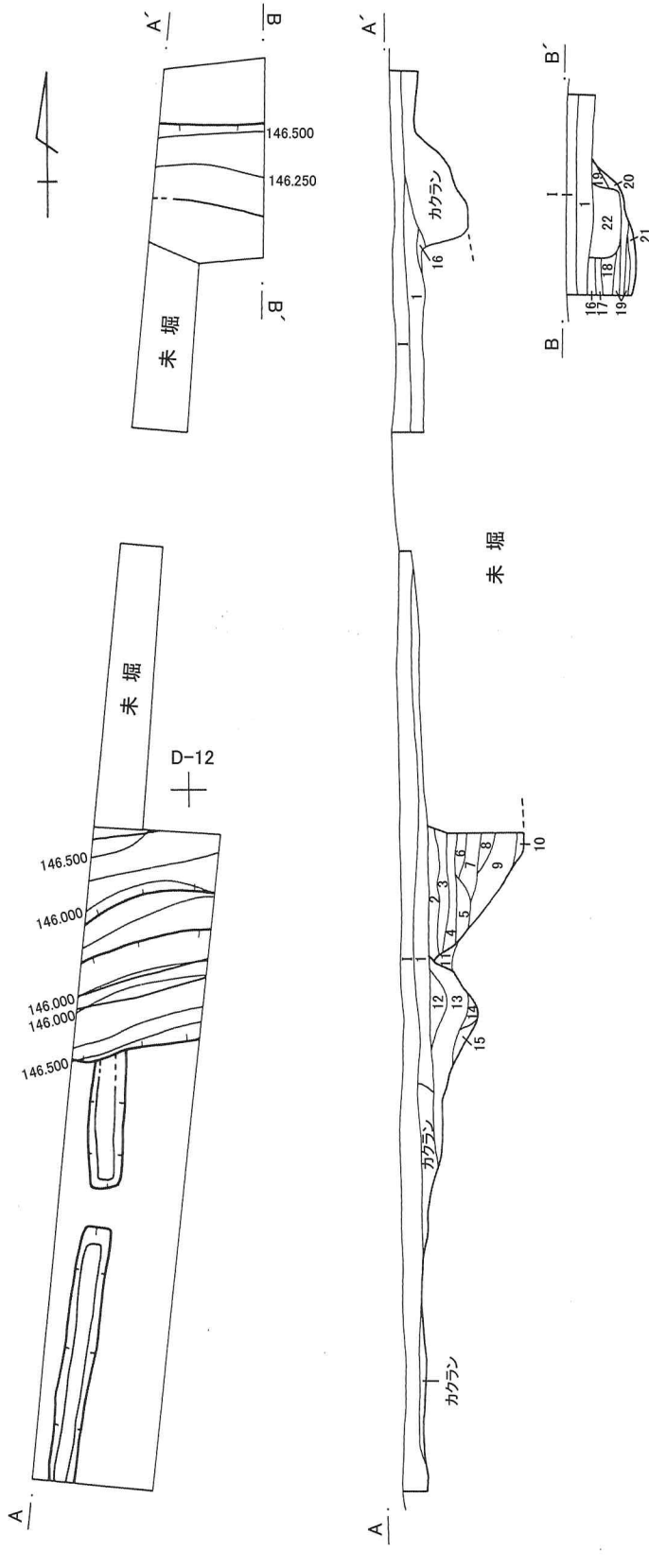
J-8



- I 表層
- 1 褐色土 (LR 少、小 LB 少、IP 少、硬くしまる)
 - 2 暗褐色土 (LR・小 LB 少、硬くしまる)
 - 3 黒褐色土 (LR 微、IP・SP 微、やや硬くしまる)
 - 4 褐色土 (LR、IP 微)
 - 5 暗褐色土 (LR 微、IP 少)
 - 6 黒色土 (IP 微、SP 少)
 - 7 褐色土 (LR 微、硬くしまる)
 - 8 黒褐色土 (LR 少、小 LB 微、やや硬くしまる)
- L=146.500m

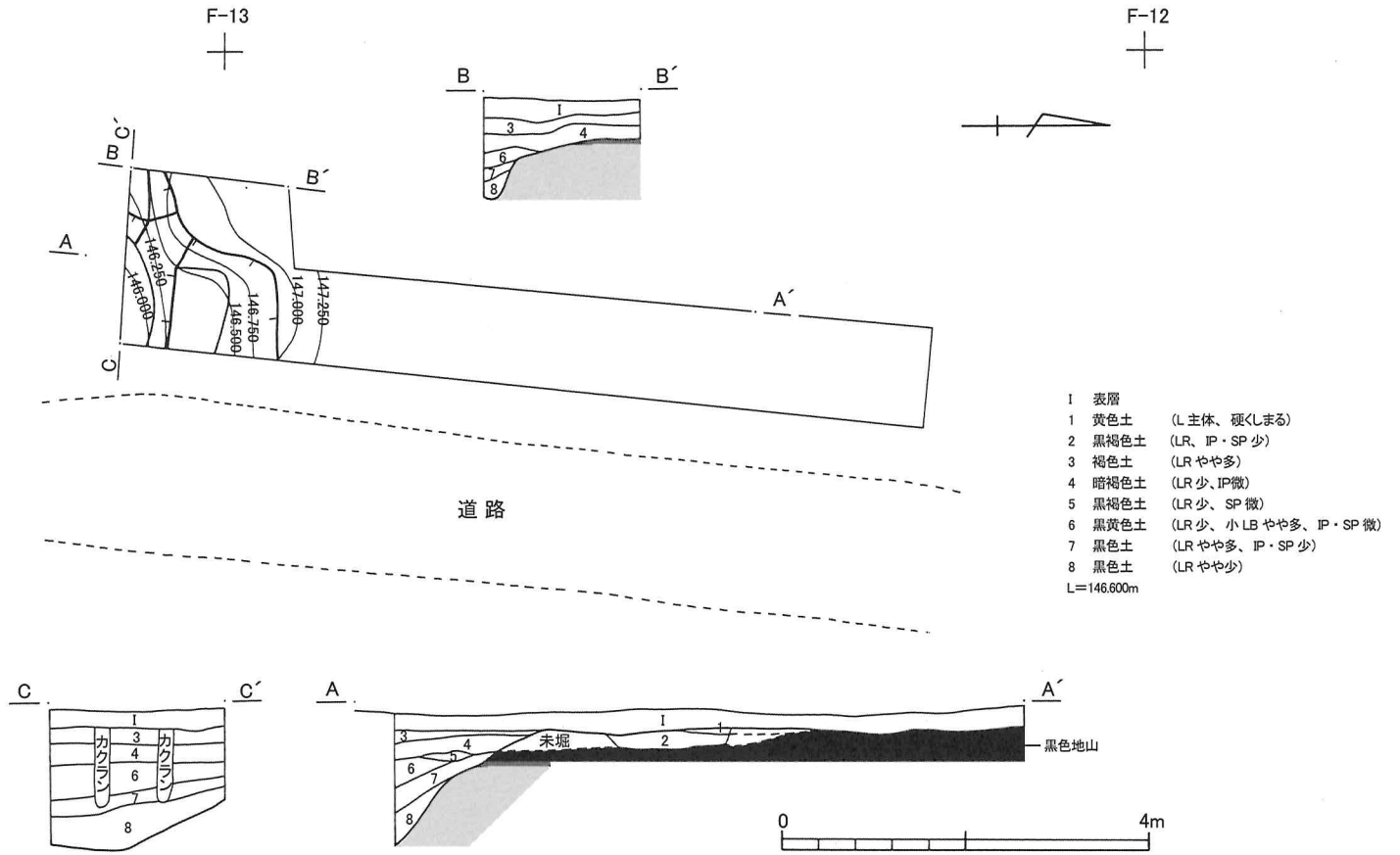


第16図 T-4 平・断面図



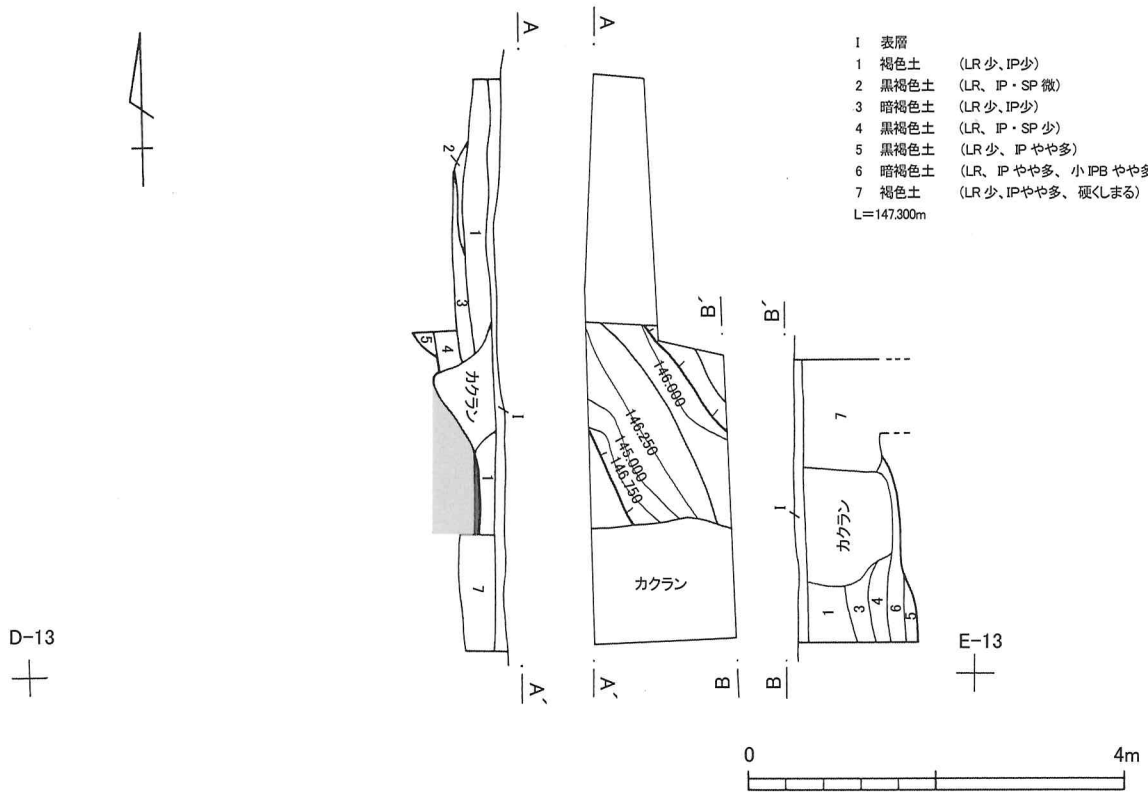
- I 表層
- 1 褐色土 (LR やや多、IP やや多、SP 少)
 - 2 暗褐色土 (LR 少、IP 微)
 - 3 褐色土 (LR、IP やや多、SP 微)
 - 4 黄褐色土 (LR 多、小 LB 微、IP 少、SP 少)
 - 5 橙色土 (IP 主体)
 - 6 橙褐色土 (LR やや多、IP やや多)
 - 7 黄褐色土 (LR 多、小 LB やや多、IP・SP 少)
 - 8 黒褐色土 (LR、IP 少)
 - 9 暗褐色土 (LR やや多、LB 少、IP・SP 少)
 - 10 暗黄褐色土 (LR 多、IP 少)
 - 11 暗黄褐色土 (LR 多、IP 少、SP 微)
 - 12 暗褐色土 (LR 少、IP やや多、SP 微)
 - 13 暗褐色土 (LR、IP 少、IPB 微)
 - 14 暗褐色土 (IPB 多)
 - 15 暗褐色土 (LR 少、IP 微)
 - 16 暗褐色土 (LR 少)
 - 17 暗黄褐色土 (LR やや多)
 - 18 黒褐色土 (LR やや多、小 LB やや多、IP やや多)
 - 19 黄褐色土 (LR 多、小 LB やや多)
 - 20 黒褐色土 (LR 少、IP やや多)
 - 21 黒褐色土 (LR やや多、IP 少)
 - 22 黒褐色土 (LR 少、IP 少、SP 微)
- L=146.000m

第17図 T-5平・断面図



- I 表層
- 1 黄色土 (L 主体、硬くしまる)
 - 2 黒褐色土 (LR、IP・SP 少)
 - 3 褐色土 (LR やや多)
 - 4 暗褐色土 (LR 少、IP 微)
 - 5 黒褐色土 (LR 少、SP 微)
 - 6 黒黄色土 (LR 少、小 LB やや多、IP・SP 微)
 - 7 黒色土 (LR やや多、IP・SP 少)
 - 8 黒色土 (LR やや少)
- L=146,600m

第18図 T-6 平・断面図



- I 表層
- 1 褐色土 (LR 少、IP 少)
 - 2 黒褐色土 (LR、IP・SP 微)
 - 3 暗褐色土 (LR 少、IP 少)
 - 4 黒褐色土 (LR、IP・SP 少)
 - 5 黒褐色土 (LR 少、IP やや多)
 - 6 暗褐色土 (LR、IP やや多、小 IPB やや多)
 - 7 褐色土 (LR 少、IP やや多、硬くしまる)
- L=147,300m

第19図 T-7 平・断面図

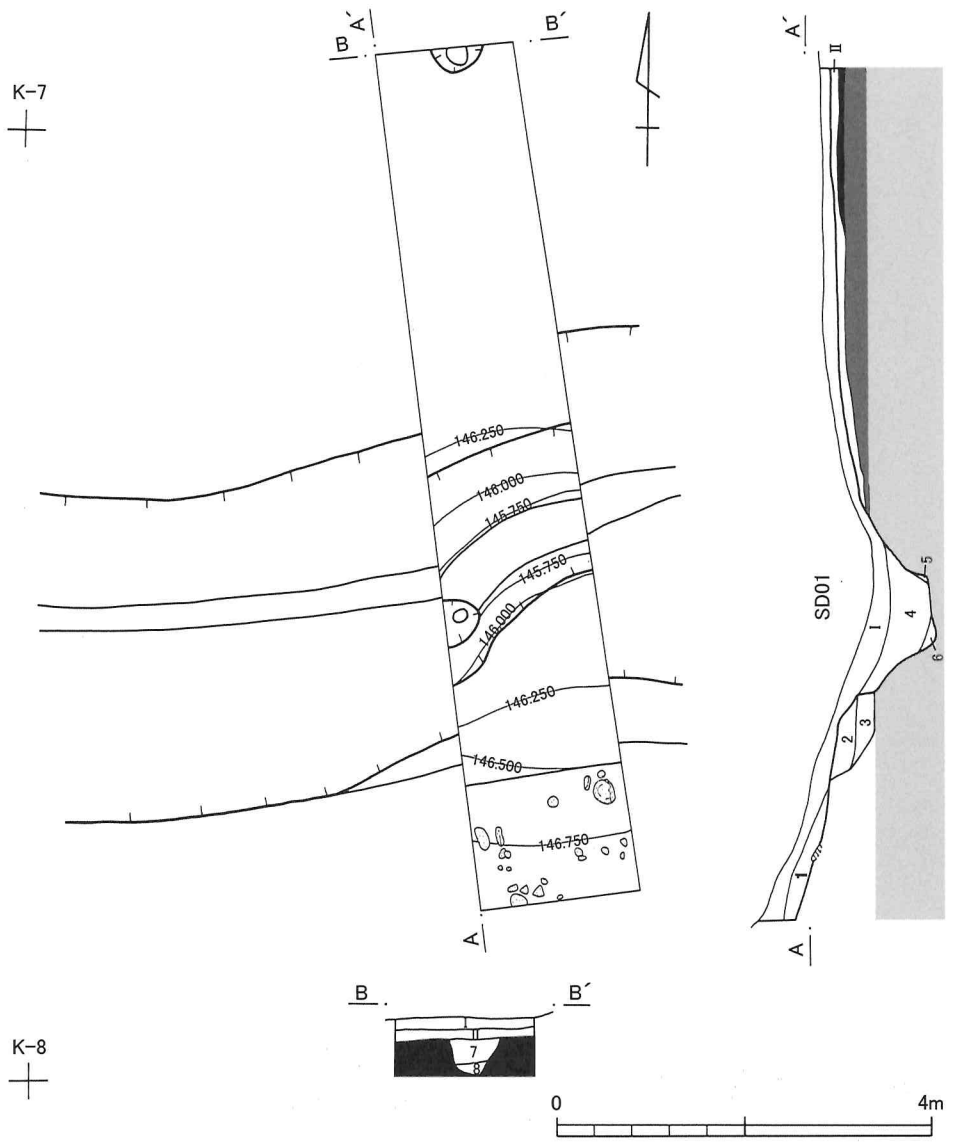
J-7

1	表層	
2	褐色土	(SP 微)
3	暗褐色土	(IP 微、柔らかい)
4	褐色土	(IP 少)
5	黒褐色土	(SP 微)
6	褐色土	(IP・SP 微、しまる)
7	暗褐色土	
8	褐色土	
9	褐色土	(柔らかい)
10	黒褐色土	(IP 微)
11	黒褐色土	(IP・SP 微)
12	暗褐色土	(IP 微)
13	褐色土	(IP・SP 少)
14	暗褐色土	(LR 少、SP 微)
15	暗黄褐色土	(LR 多、SP 微)
16	褐色土	(LR 少、IP 微)
17	褐色土	(IP やや多)
18	黒褐色土	(IP やや多、SP 微)
19	暗褐色土	(IP 微)
20	暗褐色土	(IPB やや多、SP 微)
21	暗褐色土	(IP・SP 微)
22	黒褐色土	(IP・SP 微)
23	暗褐色土	(IP・SP 少)
24	暗褐色土	(IP 微、やや柔らかい)
25	褐色土	(IP 少、SP 微、しまる)
26	橙褐色土	(IP 多)
27	黒褐色土	(IP 少)
28	黒色土	(IP 少)

L=A=147.600m BC=146.700m DE=147.000m
F~H=146.400m I=146.100m

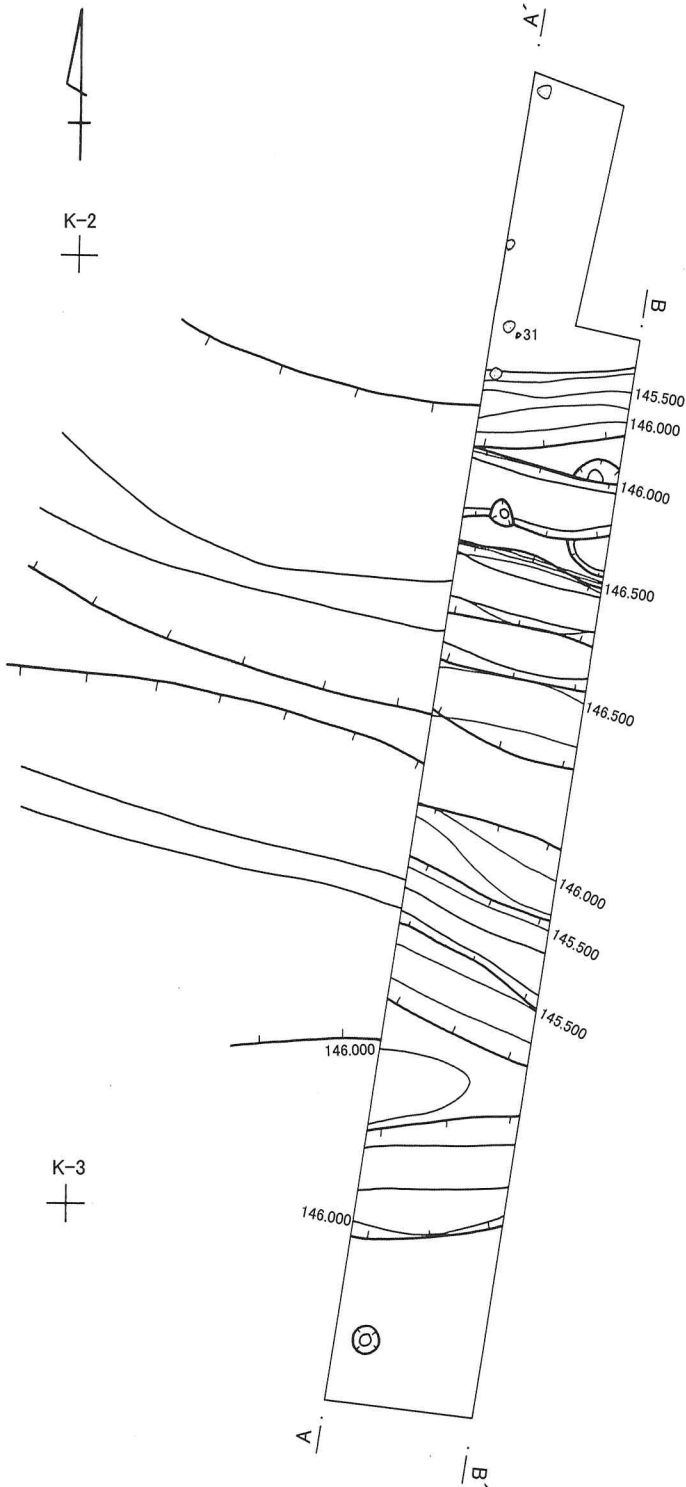
第20図 T-10平・断面図

-34-



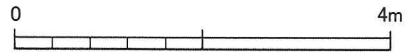
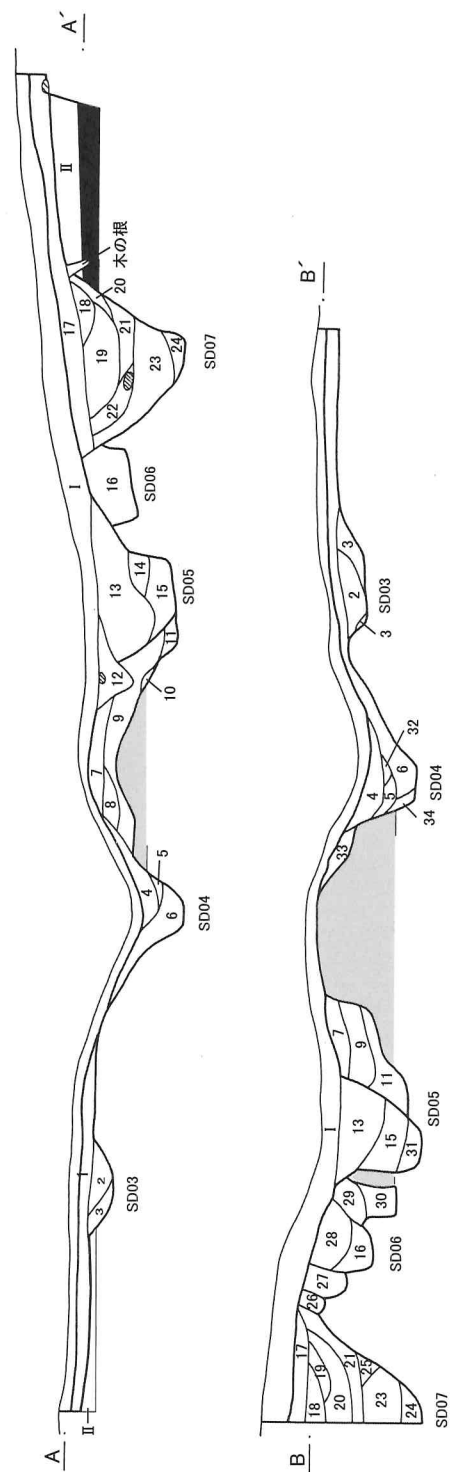
- I 表層
 - II 暗褐色土層
 - 1 暗褐色土 (LR 微)
 - 2 橙褐色土 (IP 多)
 - 3 暗褐色土 (IP やや多)
 - 4 褐色土 (IP 微、柔らかい)
 - 5 暗黄褐色土 (SP 多)
 - 6 黒褐色土 (IP 少)
 - 7 黒褐色土 (IP 微、SP 微、柔らかい)
 - 8 黒色土 (IPB 少、SPB 少、硬くしまる)
- L=146.800m

第21図 T-11平・断面図



K-2

K-3

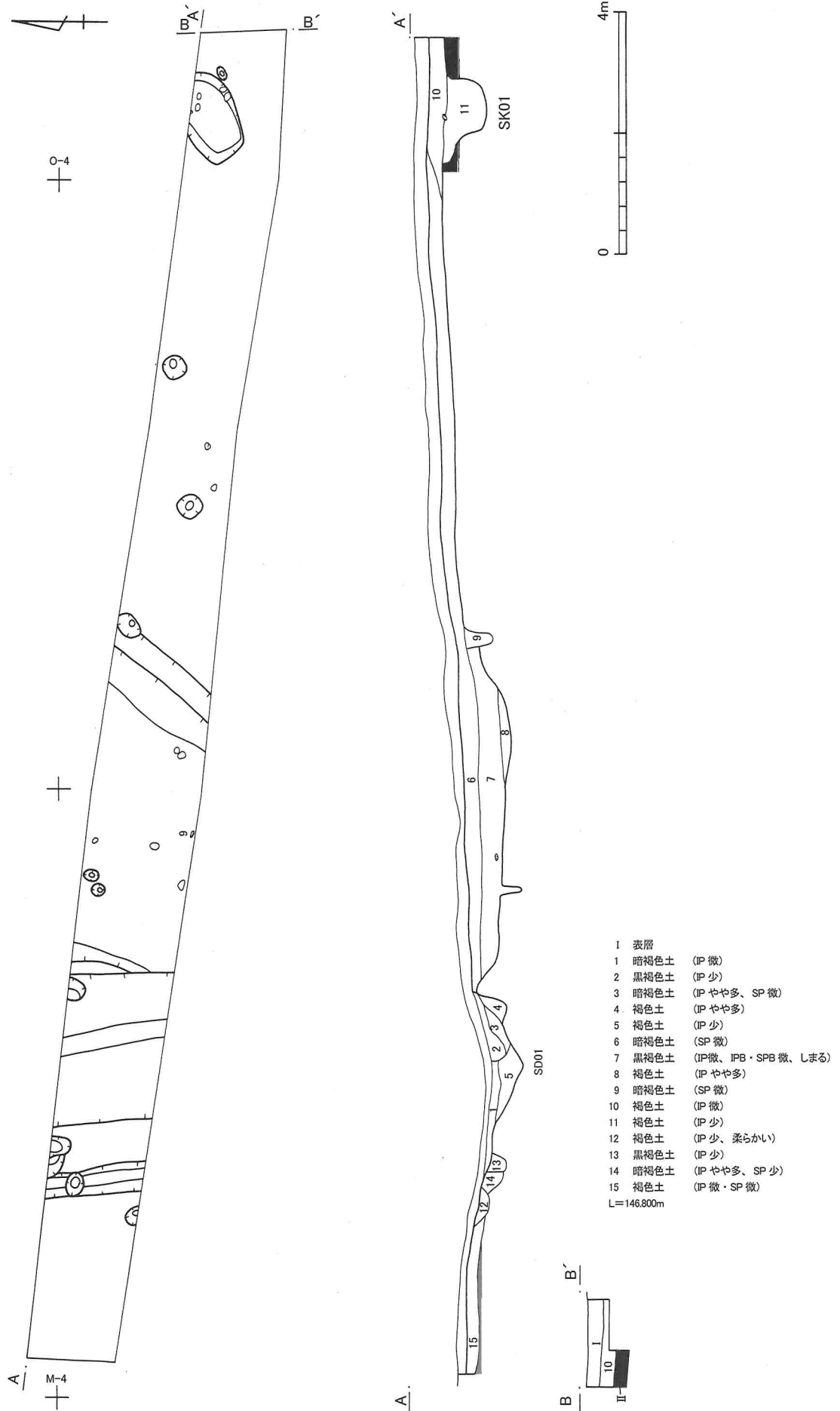


I 表層

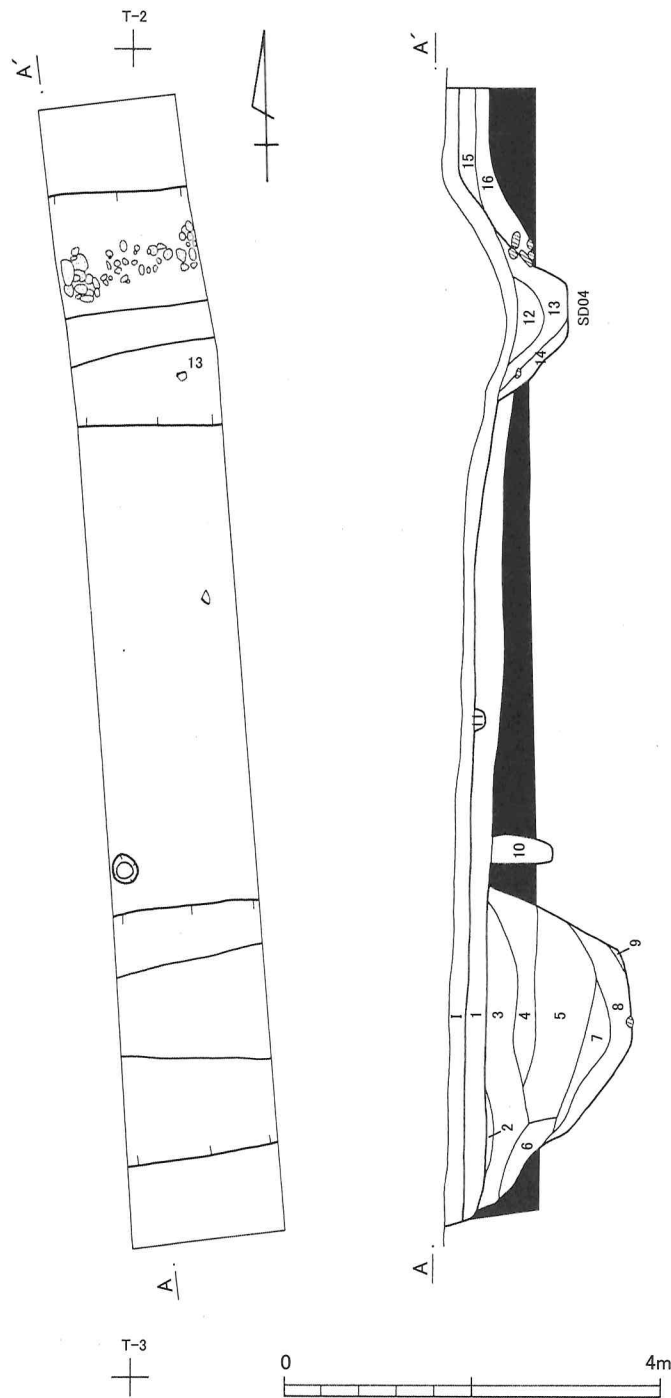
II 暗褐色土層

- | | | | |
|-------------------------|---------------------------|---------------------|----------------------|
| 1 黄褐色土 (LR 多、IP・SP 少) | 11 黒褐色土 (IP 微、硬い) | 21 黒褐色土 (IP 微) | 31 暗黄褐色土 (LR 多、IP 少) |
| 2 暗褐色土 (IP 微) | 12 暗黄褐色土 (LR 少、IP 微、SP 微) | 22 暗褐色土 (IP 微) | 32 暗褐色土 (IP 微) |
| 3 暗黄褐色土 (LB 多、IP 微) | 13 黒褐色土 (LR 少、IP 微) | 23 黒褐色土 (IP 微) | 33 黄褐色土 (LR 多) |
| 4 暗褐色土 (SP 微) | 14 暗黄褐色土 (IPB 多、SPB 少) | 24 黒褐色土 (IP 多) | 34 褐色土 (IP 少) |
| 5 橙褐色土 (IP 微、SP 微) | 15 暗褐色土 (IP やや多) | 25 褐色土 (IP 少) | 35 黒褐色土 (LR 微) |
| 6 褐色土 (LR 少、IP 微) | 16 黒色土 (IP 少、IPB 少) | 26 暗褐色土 (IP 微) | L=146.300m |
| 7 橙褐色土 (IPB 多) | 17 暗褐色土 (IPB 微) | 27 黒褐色土 (IP 少) | |
| 8 暗黄褐色土 (LR やや多、IP やや多) | 18 黒褐色土 (IP 微) | 28 黒褐色土 (IP 微) | |
| 9 暗褐色土 (IP 微) | 19 暗褐色土 (LR 少、IP やや多) | 29 黒褐色土 (LR 少、IP 少) | |
| 10 褐色土 (IP 微、SP 微) | 20 暗褐色土 (IP 少) | 30 黄褐色土 (LR 多、IP 少) | |

第22図 T-12平・断面図



第23図 T-13平・断面図



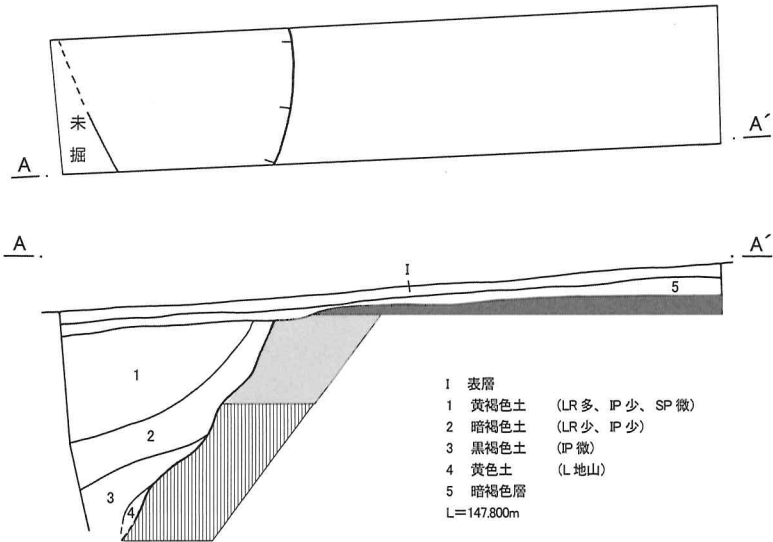
- 1 表層
 - 1 暗褐色土 (IP・SP 微)
 - 2 褐色土 (LR 少)
 - 3 暗褐色土 (IP 微)
 - 4 黒褐色土 (IP・SP 微)
 - 5 橙褐色土 (小 LB、小 IPB、やや多、SPB 少)
 - 6 黒褐色土 (IP 微)
 - 7 暗褐色土 (小 IPB 少、SP 少)
 - 8 黒褐色土 (IP・SP 微)
 - 9 暗橙褐色土 (IP やや多)
 - 10 黒褐色土 (SP 微)
 - 11 黒色土
 - 12 褐色土 (柔らかい)
 - 13 暗褐色土 (ややしまる)
 - 14 黒褐色土 (しまる)
 - 15 暗褐色土 (IP 微)
 - 16 褐色土 (SP 微)
- L=145.600m

第24図 T-14平・断面図

O-13

O-12

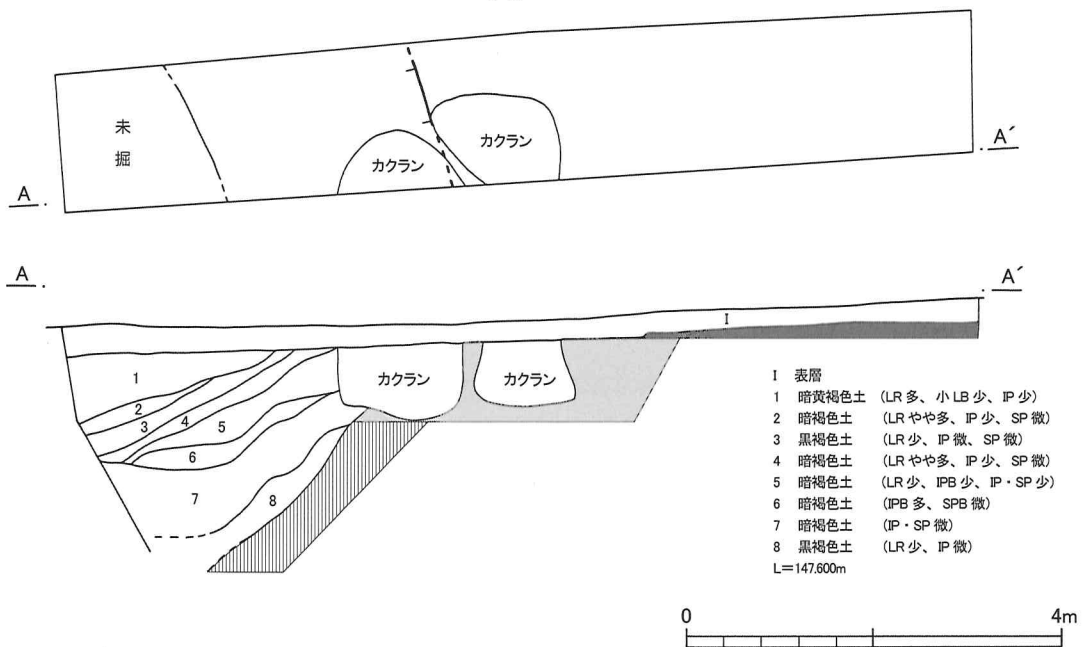
T-15



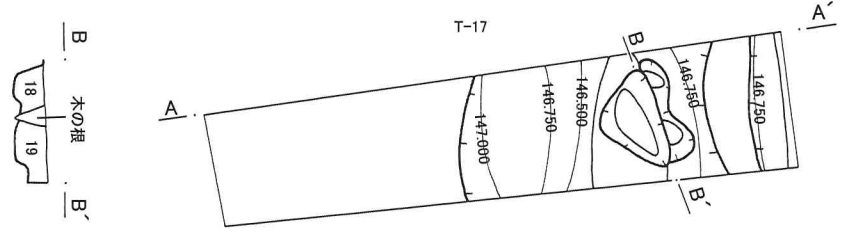
M-13

M-12

T-16

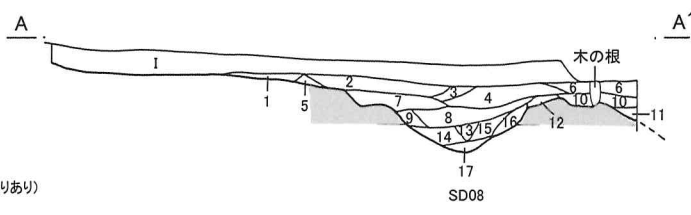


第25図 T-15・16平・断面図

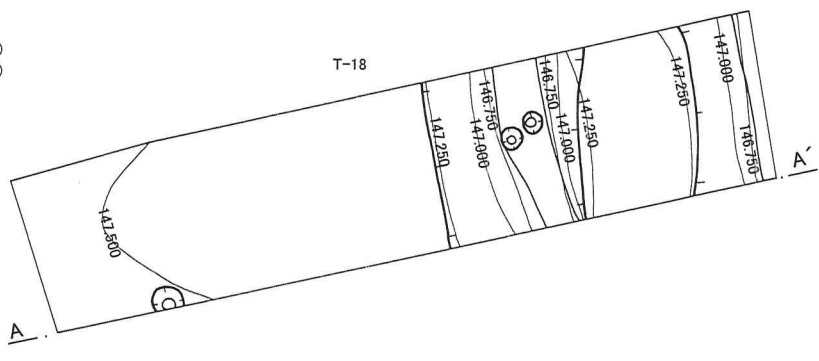
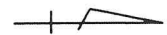


N-14

N-13

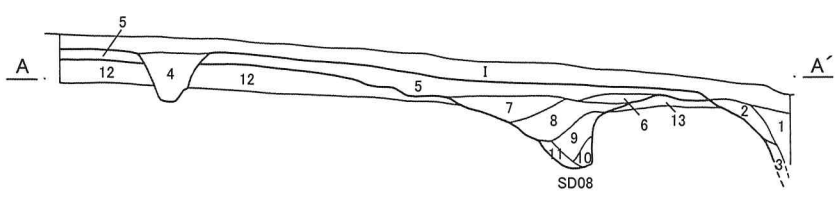


- 1 表層
 - 1 黒褐色土 (LR 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 2 暗褐色土 (IP 少、小 IPB 微、しまりあり)
 - 3 暗褐色土 (IP 微、SPB 微、しまりあり)
 - 4 暗褐色土 (IP 微、小 IPB 微、SP 微、しまりあり)
 - 5 暗黄褐色層 (SP 多、ややしまりあり)
 - 6 黒褐色土 (IP 微、柔らかい)
 - 7 赤褐色土 (IP 多、小 IPB 少、やや柔らかい)
 - 8 暗褐色土 (IP 微、柔らかい)
 - 9 暗褐色土 (IP 微、やや柔らかい)
 - 10 赤褐色土 (IP 微、小 IPB 微、ややしまりあり)
 - 11 褐色土 (IP 多、小 IPB 多、柔らかい)
 - 12 暗褐色土 (IP 微、小 IPB 少、しまりあり)
 - 13 暗褐色土 (IP 微、小 IPB 微、柔らかい)
 - 14 褐色土 (IP 多、小 IPB 微、柔らかい)
 - 15 褐色土 (IP やや柔らかい、柔らかい)
 - 16 褐色土 (IP 多、柔らかい)
 - 17 赤褐色土 (IP 多、しまりあり)
 - 18 暗黄褐色土 (LR 少、小 LB 少、IP 微、しまりあり)
 - 19 明黄褐色土 (LR 多、小 LB 少、IP 微、しまりあり)
- L=A=147.600m
L=B=146.700m

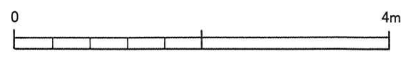


P-14

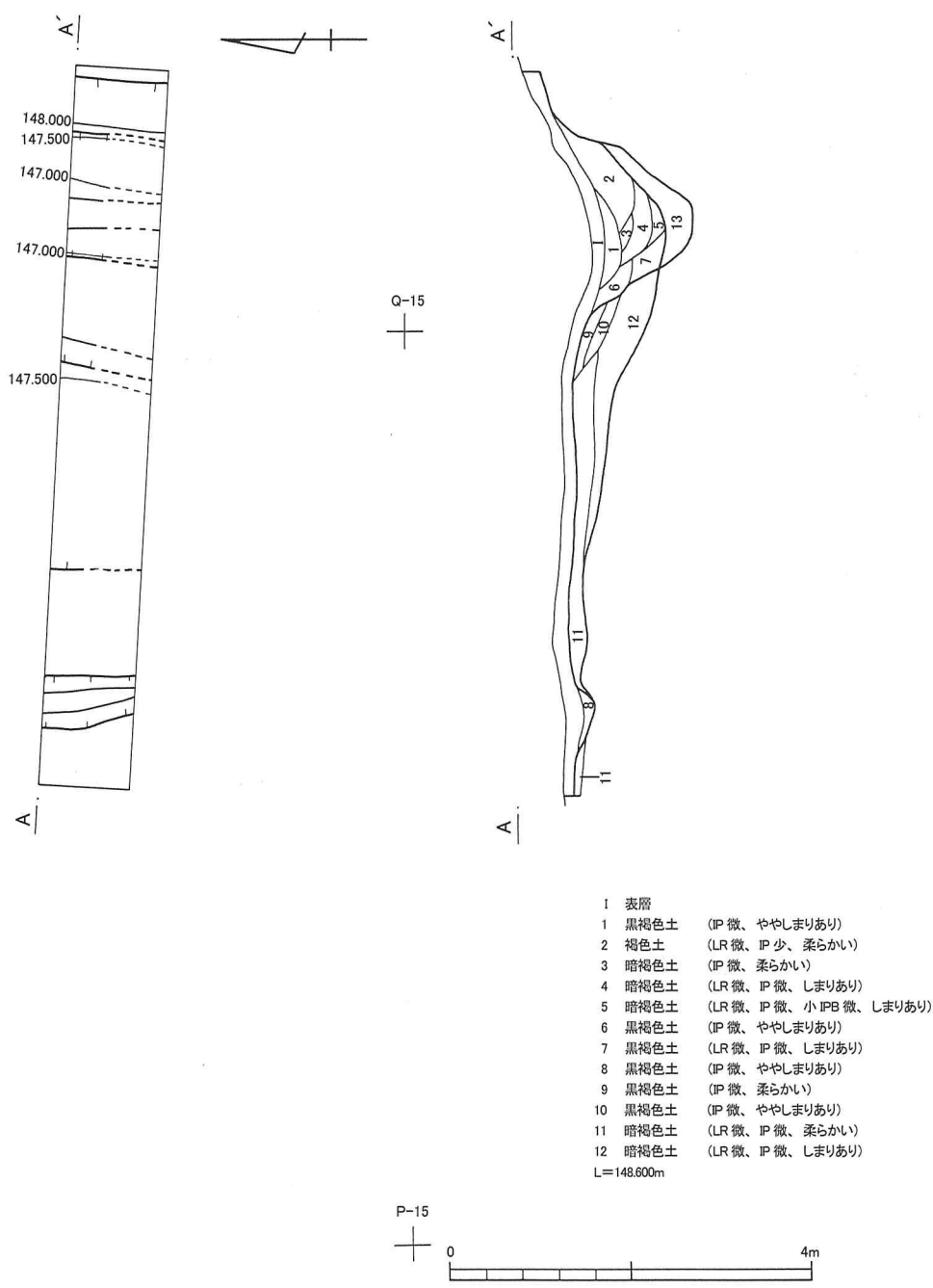
P-13



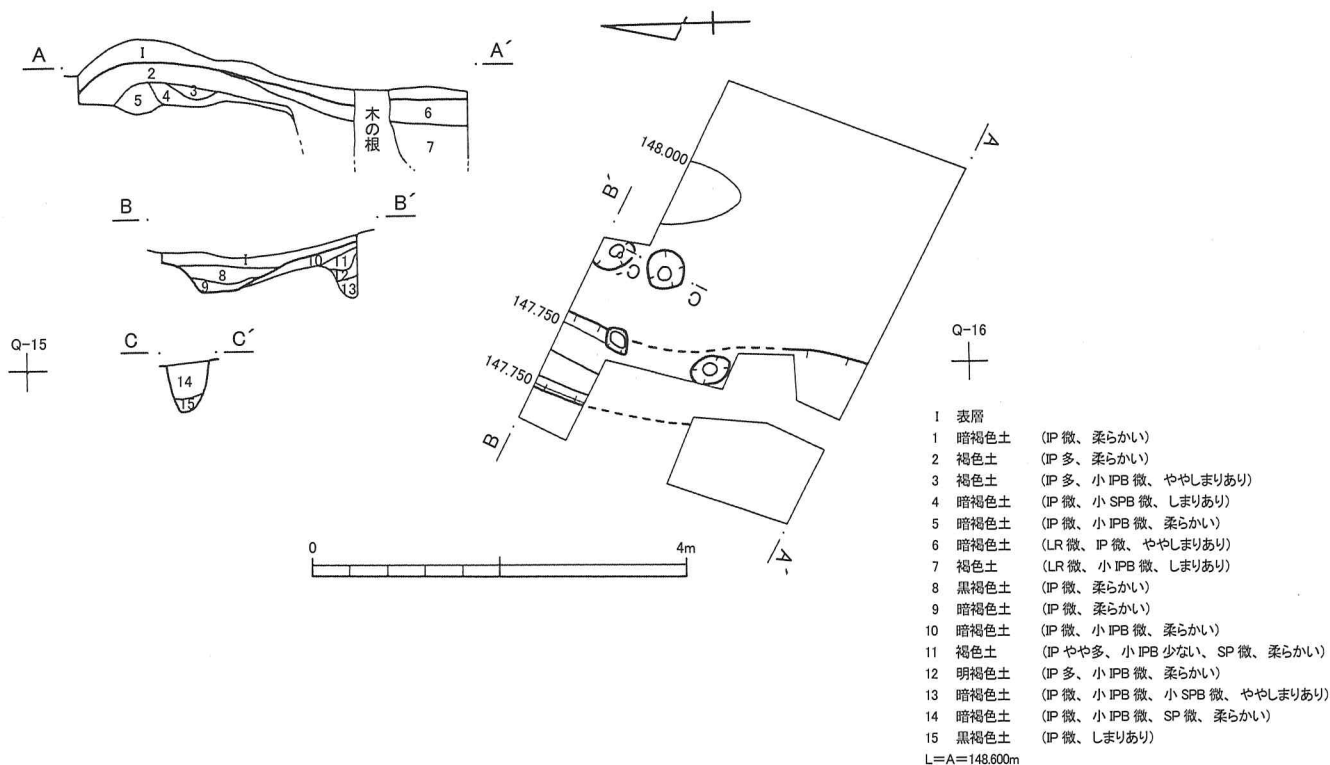
- 1 表層
 - 1 黒褐色土 (IP 微、柔らかい)
 - 2 黒褐色土 (小 LB 微、IP 微、柔らかい)
 - 3 暗褐色土 (IP 少、IP 微、柔らかい)
 - 4 暗褐色土 (LR 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 5 暗褐色土 (LR 微、IP 微、しまりあり)
 - 6 黒褐色土 (LR 微、IP 微、しまりあり)
 - 7 暗褐色土 (LR 微、小 LB 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 8 褐色土 (LR 微、IP 微、柔らかい)
 - 9 暗褐色土 (LR 微、小 LB 微、IP 微、柔らかい)
 - 10 褐色土 (LR 少、IP 少、柔らかい)
 - 11 暗褐色土 (LR 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 12 黒褐色土 (LR 微、IP 微、しまりあり)
 - 13 黒褐色土 (LR 微、ややしまりあり)
- L=147.600m



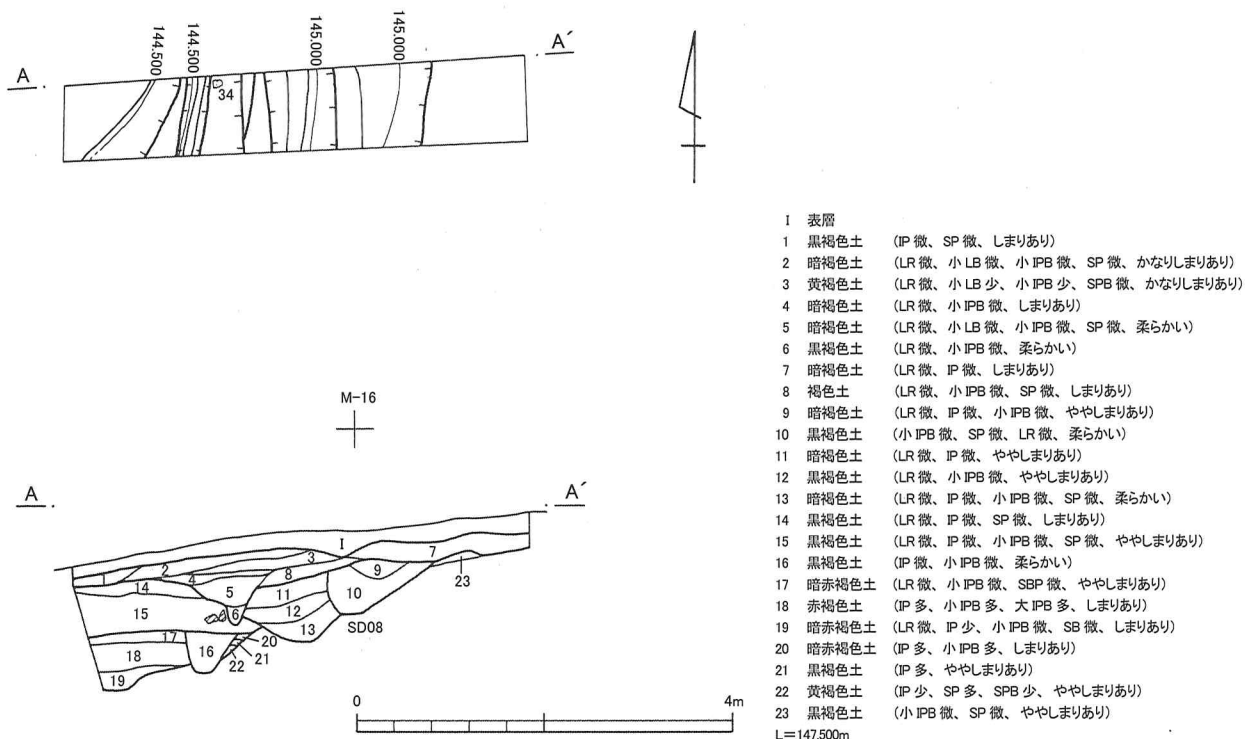
第26図 T-17・18平・断面図



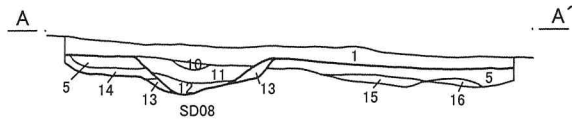
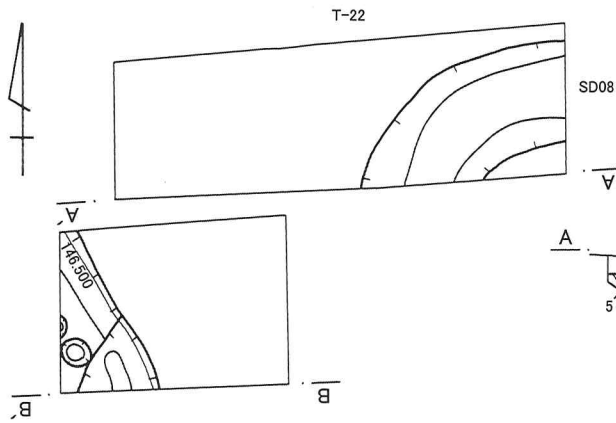
第27図 T-19平・断面図



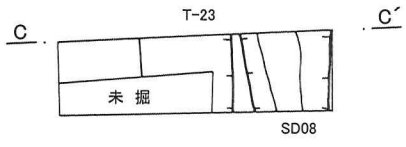
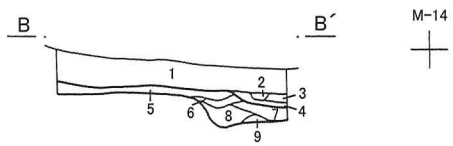
第28図 T-20平・断面図



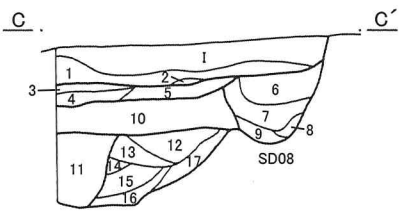
第29図 T-24平・断面図



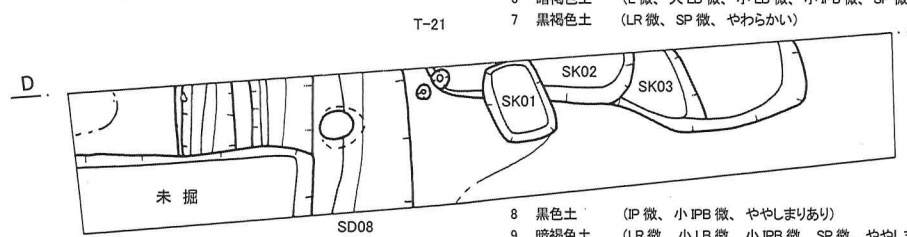
- T-22
- 1 黒褐色土 (LR 微、IP 微、SP 微、柔らかい)
 - 2 黒色土 (IP 微、柔らかい)
 - 3 暗褐色土 (LR 微、小 IPB 微、小 SPB 微、しまりあり)
 - 4 褐色土 (LR 微、IP 微、小 IPB 少、小 SPB 微、しまりあり)
 - 5 暗褐色土 (LR 微、IP 微、小 IPB 少、ややしまりあり)
 - 6 にぶい褐色土 (LR 微、IP 微、小 IPB 微、柔らかい)
 - 7 暗褐色土 (LR ごく微、小 IPB 微、しまりあり)
 - 8 暗褐色土 (LR 微、IP 微、小 IPB 少ない、ややしまりあり)
 - 9 赤色土 (LR やや多、小 IPB 多、ややしまりあり)
 - 10 黒褐色土 (IP 微、ややしまりあり)
 - 11 褐色土 (IP 微、小 IPB 少、SP 微、柔らかい)
 - 12 暗赤褐色土 (IP 少、小 IPB 少、SP 微、柔らかい)
 - 13 明赤褐色土 (IP 多、小 IPB 多、柔らかい)
 - 14 赤褐色土 (IP やや多、小 IPB 多、SP 微、柔らかい)
 - 15 褐色土 (LR 微、IP 微、小 IPB 微、SP 微、しまりあり)
 - 16 赤褐色土 (IP 少、大 IPB 多、大 SPB 少、小 SPB 微、しまりあり)
- L=147.300m



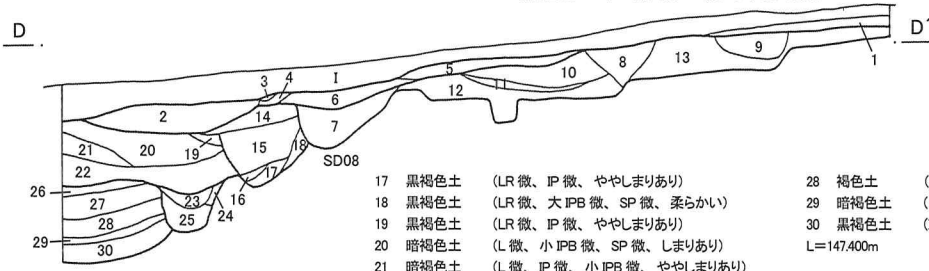
- T-23
- 1 黒褐色土 (LR 微、小 IPB 微、SP 微、かなりしまりあり)
 - 2 褐色土 (LR 多、小 IPB 微、しまりあり)
 - 3 赤褐色土 (小 IPB 微、大 SPB 微、かなりしまりあり)
 - 4 褐色土 (LR 少、大 LB 多、小 IPB 微、かなりしまりあり)
 - 5 暗褐色土 (LR 微、大 LB 多、IP 微、かなりしまりあり)
 - 6 暗褐色土 (LR 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 7 暗褐色土 (LR 微、IP 微、しまりあり)
 - 8 褐色土 (LR 少、IP 微、ややしまりあり)
 - 9 黒褐色土 (LR 微、IP 微、しまりあり)
 - 10 暗褐色土 (LR 微、IP 微、SP 微、しまりあり)
 - 11 黒褐色土 (LR 微、小 IPB 微、柔らかい)
 - 12 黒褐色土 (LR 微、IP 微、柔らかい)
 - 13 褐色土 (LR 少、小 IPB 少、しまりあり)
 - 14 暗褐色土 (LR 微、小 IPB 微、しまりあり)
 - 15 黄褐色土 (LR 微多、IP 多、IPB 少、しまりあり)
 - 16 暗褐色土 (LR 微、小 IPB 微、しまりあり)
- L=147.200m



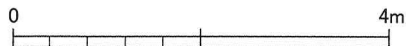
- T-21
- I 表層
 - 1 暗褐色土 (LR 微、柔らかい)
 - 2 褐色土 (L 微、IP 微、小 IPB 微、SP 微、しまりあり)
 - 3 褐色土 (LR 微、小 LB 少、しまりあり)
 - 4 黄褐色土 (大 SPB 多、小 IPB 微、しまりあり)
 - 5 黒褐色土 (小 IPB 微、SP 微、しまりあり)
 - 6 暗褐色土 (L 微、大 LB 微、小 LB 微、小 IPB 微、SP 微、かなりしまりあり)
 - 7 黒褐色土 (LR 微、SP 微、やわらかい)



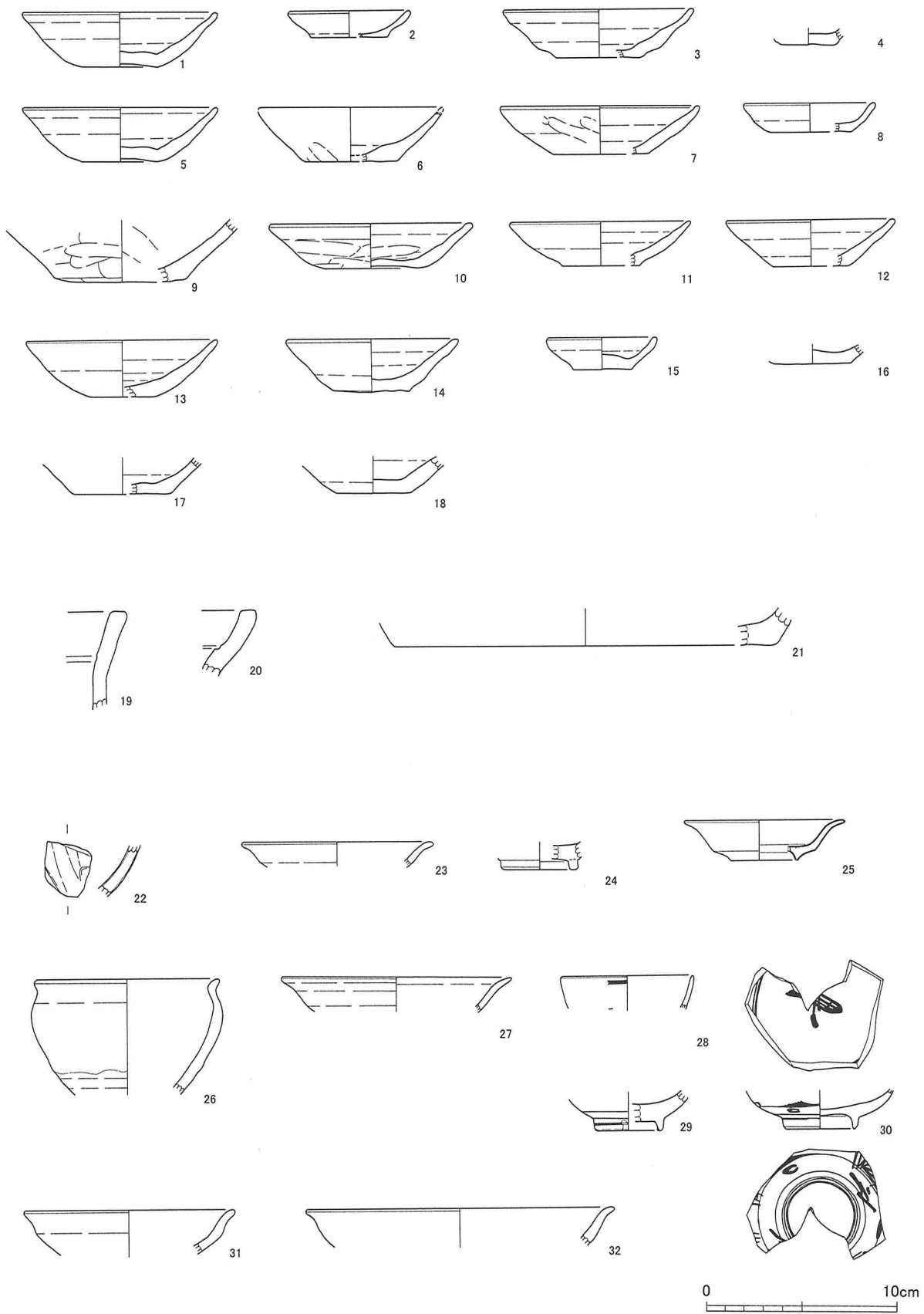
- 8 黒色土 (IP 微、小 IPB 微、ややしまりあり)
- 9 暗褐色土 (LR 微、小 LB 微、小 IPB 微、SP 微、ややしまりあり)
- 10 暗褐色土 (LR 微、大 IPB 微、小 IPB 微、大 SPB 微、小 SPB 少、しまりあり)
- 11 黄褐色土 (小 LB 少、SPB 多、大 SPB 微、小 SPB 微、しまりあり)
- 12 黒色土 (大 SPB 微、SP 微、柔らかい)
- 13 黒色土 (LR 微、しまりあり)
- 14 暗褐色土 (LR 微、IP 微、SP 微、しまりあり)
- 15 黒褐色土 (小 LB 微、小 IPB 微、SP 微、ややしまりあり)
- 16 黒褐色土 (LR 微、大 IPB 微、ややしまりあり)



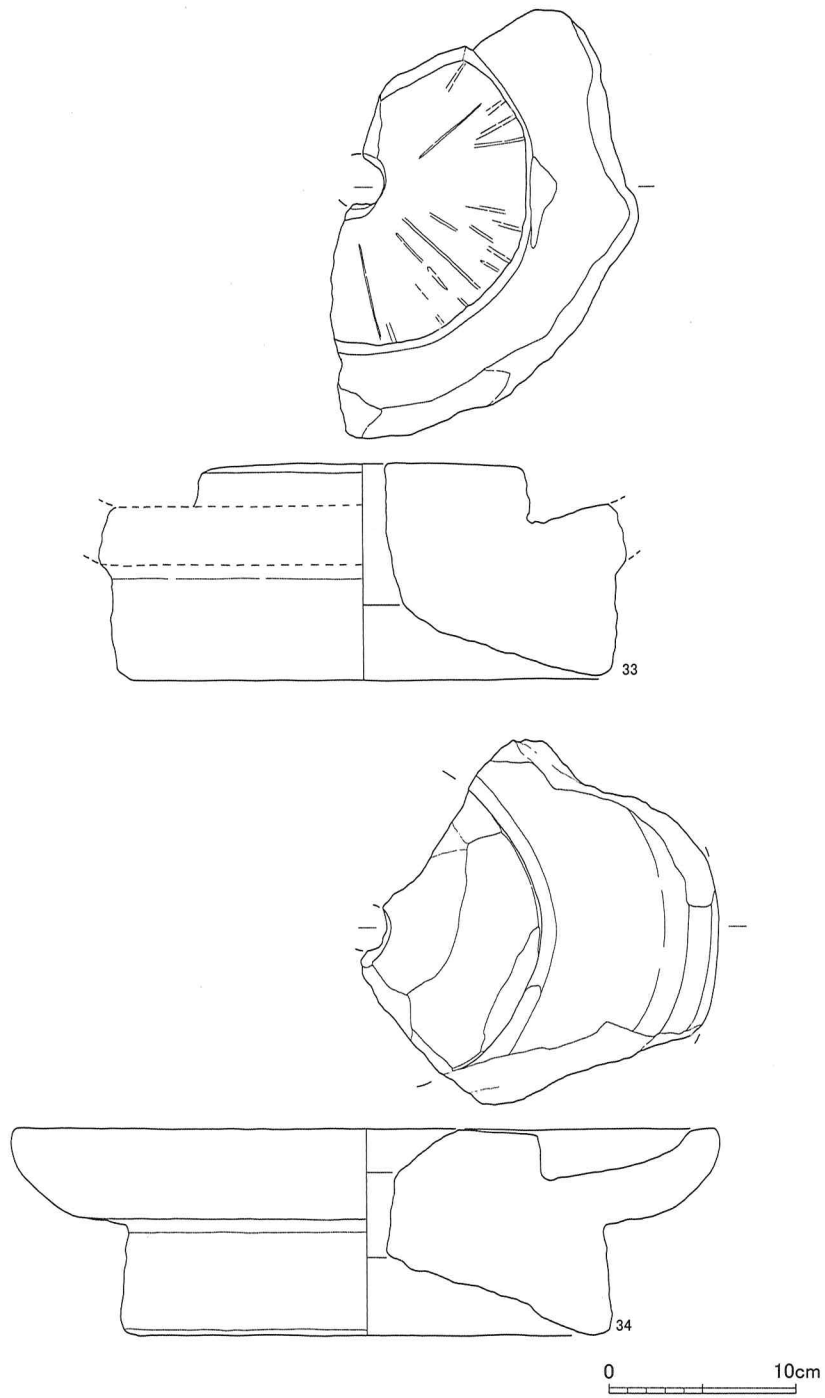
- 17 黒褐色土 (LR 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 18 黒褐色土 (LR 微、大 IPB 微、SP 微、柔らかい)
 - 19 黒褐色土 (LR 微、IP 微、ややしまりあり)
 - 20 暗褐色土 (L 微、小 IPB 微、SP 微、しまりあり)
 - 21 暗褐色土 (L 微、IP 微、小 IPB 微、ややしまりあり)
 - 22 黒褐色土 (IP 微、小 IPB 微、SP 微、ややしまりあり)
 - 23 黒色土 (LR やや少、小 LB 微、小 IPB 微、柔らかい)
 - 24 黄褐色土 (LR 多、小 LB 微、柔らかい)
 - 25 黄褐色土 (LR 少、大 LB 少、IP 微、柔らかい)
 - 26 暗褐色土 (LR 微、小 IPB 少、SP 微、ややしまりあり)
 - 27 赤褐色土 (大 LB 微、IP 微、小 IPB 少、SP 微、ややしまりあり)
 - 28 褐色土 (小 LB 微、小 IPB 少、SPB 微、ややしまりあり)
 - 29 暗褐色土 (LR 微、IP 多、小 IPB 多、しまりあり)
 - 30 黒褐色土 (IP 微、小 IPB 微、小 SPB 微、しまりあり)
- L=147.400m



第30図 T-21~23平・断面図



第31图 出土遺物実測図 (1)



第32図 出土遺物実測図(2)



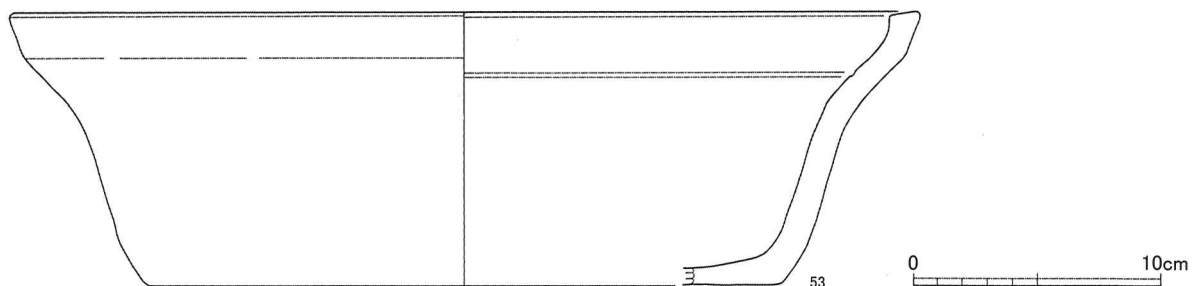
第33図 出土遺物実測図 (3)

No.	器種	寸法(cm)			(g)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考	
		口径	器高	底径重さ	重さ								
1	かわらけ	(9.8)	2.5			体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。口縁部外側に粘土の積上げ痕有り。	灰褐色	白色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 下層	1/5残	
2	かわらけ	(6.4)	1.4	(4.0)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。見込みナデ。底部回転糸切り後、板目状圧痕。	褐色	白色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-2 下層	1/2残	
3	かわらけ	(10.0)	2.5	(4.2)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り	乳白色	砂粒	良好	T-4	1/4残	
4	かわらけ			3.0		平底。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、板目状圧痕。	乳白色	白・黒色粒、赤色スコリア粒、透明粒	良好	表探	底部片のみ	
5	かわらけ	(10.2)	2.8	4.0		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラケズリ。	明褐色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-5 堀上層	1/3残	
6	かわらけ			(4.8)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。体底部外面にナデ有り。	内面にぶい黄橙色 外面 橙色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 0 No. 2	1/4残	
7	かわらけ	(10.4)	2.5	(5.0)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。体部外面にナデあり。底部回転糸切り。	乳白色	白・黒色粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 0 No. 7	1/4残	
8	かわらけ	(6.9)	1.5	(4.2)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。見込み部ナデ。底部回転糸切り。	橙褐色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 2 No. 1	1/4残	
9	土師器(甕)			(6.0)		平底。	内面ナデ。外面ケズリ後ナデ。底部ケズリ。	橙褐色	白色粒、透明粒	良好	T-1 3 No. 3	体底部破片1/3	
10	かわらけ	(10.6)	2.3	(5.4)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ナデ。	にぶい橙～黒色	白・黒色粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 3	1/4残	
11	かわらけ	(9.4)	2.3	(4.0)		平底で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部板目状圧痕有り。	にぶい橙色	砂粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 3	1/3残	
12	かわらけ	(8.8)	2.4	(4.0)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	内面にぶい黄橙色 外面灰黄褐色	白・黒色粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 3	1/5残	
13	かわらけ	(10.0)	3.0	(3.4)		平底で、体部が直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、板目状圧痕か？	乳白色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	やや良好	T-1 4 No. 2	1/4残	
14	かわらけ	(9.0)	2.7	4.0		平底で、体部はやや外反気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	内面橙色 外面浅黄色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 4 SD-7	1/3残 灯明皿	
15	かわらけ	(5.8)	1.7	3.1		平底で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、板目状圧痕。	暗褐色	白・黒色粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 4 SD-7	1/3残	
16	かけらわ			4.0		平底。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	橙色	白・黒色粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 4	1/2残	
17	かけらわ			(4.0)		平底。	ロクロ成形。底部回転糸切り。板上圧痕有り。	乳白色	白・黒色粒、透明粒、金雲母	良好	T-2 1 上層	体底部1/4残	
18	かわらけ			(5.0)		平底。	ロクロ成形。見込み部ナデ。底部回転糸切り。	浅黄色	砂粒、赤色スコリア粒、金雲母	良好	T-2 3 中層	体底部1/3残	
19	内耳土器					口縁部端は平坦。	内面に沈線がめぐる。	橙色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 0 No. 5	破片 口縁部一部	
20	内耳土器					口縁部端は平坦。	内面に沈線がめぐる。	内面 橙色 外面 暗褐色	白・黒色粒、透明粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 0	破片 口縁部一部	
21	内器土耳			(20.0)		平底。		にぶい赤褐色	白・黒色粒、透明粒	良好	T-2 4 中層	破片 底部一部	
22	碗(青磁)						鑄ぎ連弁文。	明オリーブ	緻密	良好	T-2	破片	
23	端反皿?(瀬戸)	(10.0)				口縁部端が反外する。		灰白色	やや緻密	良好	T-4	破片 口縁部一部	
24	陶器			(4.0)			貼り付け高台。	灰白	緻密良好	T-4	良好	T-4	1/6残
25	端反小皿(白磁)	(8.4)	2.1	(3.5)		短い高台を有し、口縁部は外反する。		白色	緻密	良好	T-7	1/6残	
26	天目茶碗	(9.7)				口縁部が短く屈曲する。		黒素地 灰白色	白・黒色粒、赤色スコリア粒	良好	T-1 3	1/6残	
27	端反皿?(青磁)	(12.0)				口縁部端が反外する。		灰白色	緻密 黒色粒	良好	T-1 0	破片 口縁部一部	
28	碗(染付け)	(3.3)						白色	緻密	良好	T-1 0 西側	破片 口縁部一部	
29	碗(染付け)			(3.4)		短い高台を付す。		灰白色	緻密	良好	T-1 0 溝内	1/4残	
30	碗(染付け)			3.5				乳白色	緻密	良好	T-1 0	1/3残	

第4表 出土遺物観察表(1)

No.	器種	寸法(cm)			(g)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径重さ	重さ							
31	小皿 (瀬戸?)	(11.0)				口縁部端が反外する。		白灰色	白・黒色粒	良好	T-12 No.1	破片 口縁部一部
32	折縁皿	(16.0)				口縁部が緩く反外する。		白灰色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	T-14	破片 口縁部一部
33	茶臼		11.5	(26.0)		受け皿用の羽をもつ	目が細かい。				T-10 No.10	1/3残
34	茶臼		10.9	(25.7)		受け皿用の羽をもつ	目が細かい。				T-24	1/4残
35	砥石		幅2.1	厚さ2.1				淡黄色	凝灰岩?		T-2上層	一部欠損
36	砥石		幅3.7	厚さ1.1				灰白色	凝灰岩		T-10	
37	砥石		幅3.4	厚さ1.7				灰白色	凝灰岩		T-10	
38	砥石		幅3.9					灰白色	凝灰岩		T-10	
39	砥石		幅3.0	厚2.6				灰黄色	凝灰岩		T-10	
40	砥石		幅4.0	厚2.2				灰オリーブ	粘板岩?		T-10 No.3	
41	砥石			厚1.6				灰色	凝灰岩?		T-11	
42	鉄製品 (刀子)	長(9.5)	幅1.4	厚3.5	11.8	切っ先及び茎部分が一部欠損。			鉄		T-14	
43	鉄製品 (鉄鏝)	長(12.0)	幅1.5	厚0.9	16.8	長茎のもの。			鉄		T-14	
44	鉄製品 (紡錘車)	長(7.5)	幅3.3	厚0.4(軸) 0.1(錘)	9.9	円盤状の中央に鉄の心棒を付す。			鉄		T-14 SD-4	
45	鉄製品 (不明)	長(4.5)	幅(0.8)	厚(0.4)	7.5	断面が薄い板状のもの。			鉄		T-21 鉄No.1	
46	鉄製品 (不明)	長5.3	幅2.2	厚0.1	1.7	断面が薄い板状のもの。			鉄		T-21 鉄No.1	
47	鉄製品 (釘)	長6.7	幅0.8	厚0.8	16.1	断面が四角形。			鉄		T-22 上層	
48	鉄滓				164.1				鉄		T-2 No.2	
49	鉄滓				57.2				鉄		T-10	
50	鉄滓				25.9				鉄		T-10	
51	縄文土器										T-5溝 埋土中	破片
52	縄文土器			(2.5)			単節縄文を施す。				T-12	破片
53	内耳土器	(36.5)	10.9	(25.4)		平底。口縁部端は平坦で、 体部が外傾気味に立ち上がる。	口縁部内面に沈線を施す。	内面暗褐色～ 明褐色、外面 黒褐色	白・黒色粒、 透明粒、赤色 スコリア粒	良好	試掘トレンチ	外面に煤付着

第5表 出土遺物観察表(2)



第34図 出土遺物実測図(4)

3 おわりに

(1) 確認調査成果について

平成21～平成23年度にわたる3次調査の結果、以下の点が明らかとなった。

まず、主郭（本丸）部分については、台地の北端に位置し、東西約75m、南北約65mで、北と東側が急崖、南と西側が空堀によって守られている。その堀の規模は、堀幅11～15m、深さ6m以上の空堀である。土塁は、現在西側が削平されて無いが、現状で残存している南側の土塁の高さが2.5mであることから西側にも同様の土塁がめぐっていたものと思われる。また、北～東にかけての崖上にも低い土塁がめぐり、堀の外側にも低い土塁がめぐる。

虎口は主郭南側中央部に位置し、T-1の調査から現状の土橋は後世に造られたもので、当時は木橋が架かっていたものと想定される。虎口内側には区画溝があり、溝内から16世紀代のかかわりが出土している。

T-12～T-14の調査で、現状では見られない古い時期の堀（第37図a堀・b堀）が確認され、その出土遺物から15世紀後半の時期と考えられる。これらの堀は、城の最終形態の時期には埋められている。

二ノ郭は主郭をL字形に囲み西側と南側に位置する。それを囲む二ノ堀は、堀幅約8～10m、深さ1.5～5mの空堀で、東側に向かって徐々に深くなる。現状では西側と北側崖際に一部堀と土塁が残っている。堀内からは16世紀代のかかわりが出土している。

この郭への虎口は、二ノ堀の西寄り部分のT-6で、堀の途切れる状況が確認されたことから、この部分に土橋があったと考えられる。

第Ⅲ次調査では、三ノ郭の東側を確認した。東側崖際に土塁があり、その内側に浅い溝をもつ。なお、土塁の下から古い時期の堀が確認され、2～3時期の造り替えが行われたと考えられる。

この郭の虎口は南東隅で土塁が切れていることから、東崖沿いのルートでの出入りが想定される。

また、現状では確認できない古い時期の堀がT-22～T-24で確認され、3～4回の掘り直しがあったことがわかった。なお、この堀は城の最終形態の時期には埋められている。

北崖下から東崖下にかけても堀と土塁が確認できた。調査は北崖下のT-3で行っただけであるが、堀幅が5～7mで、水堀であった可能性が指摘できる。

以上、今までの調査で15世紀後半～16世紀にかけて城が使用されていること、少なくとも3～4回の城の改修が行われていることが明らかになった。また、聞き取り調査や今回の調査から、この城は五重の堀で囲まれていたと考えられる。

(2) 発掘調査から見た岡本城

岡本城の築城については、南北朝期に岡本富高が築いたとする説と、寛正3年（1462）玉生信濃守綱重が築いたとする説がある。

岡本富高は、宇都宮景綱の孫で、宇都宮氏の重臣芳賀高名の弟とされる人物で、観応2年（1351）、駿河薩埴山合戦にて討死している。一方の玉生綱重は、系図によると寛正3年に常陸国笠間城へ遷ったと書かれているものもある。現時点での発掘調査からは15世紀段階以降の遺物しか見つからないことから、岡本富高築城説には疑問が残る。

次に城の変遷を見てみると、主郭部分及び三ノ郭内の堀で15世紀後半以降に3～4回の堀の掘り直しが行われていることが判明した。「玉生勘造家文書」の系図によると、以下のような玉生氏の動きが見られる。

天文19年（1550） 玉生重季、岡本根小屋城へ移る。

文禄元年（1592） 玉生勝昌、笠間城へ帰る。

文禄4年（1595） 玉生範昌、岡本根小屋城へ帰る。

このような動きと発掘調査から得られた堀の掘り直しとは何らかの関係があると考えられる。なお、玉生重季の岡本城入城への歴史的背景としては、1549年に起こった五月女坂の合戦で宇都宮尚綱が討死し、那須氏が宇都宮に攻めてくる可能性が高まった状況下での動きと捉えることもできる。

また、「那須記」「宇都宮記」には天正4年（1576）多気城の普請に関する記載中に岡本城主岡本美濃守という人物が登場する。一方、ほぼ同時期に、玉生美濃守高宗という人物も登場する。この人物は、天正13年（1585）多気城に宇都宮氏が本城を移した後、宇都宮城代として宇都宮城下を守り、天正18年（1590）の笠間氏滅亡後は笠間城主となる。そして、慶長2年（1597）の宇都宮氏改易に伴い、笠間城から退去している。

もしかすると、玉生氏がいない期間は岡本氏が岡本城に入っていた可能性も考えられる。堀の掘り直しも、このような城主交替による城の改築に伴う可能性もある。

この城の廃城は、慶長2年（1597）の宇都宮国綱の改易とともに廃城になったと考えられ、虎口部分の石積遺構は、城の最終段階のものと考えられる。

(参考文献)

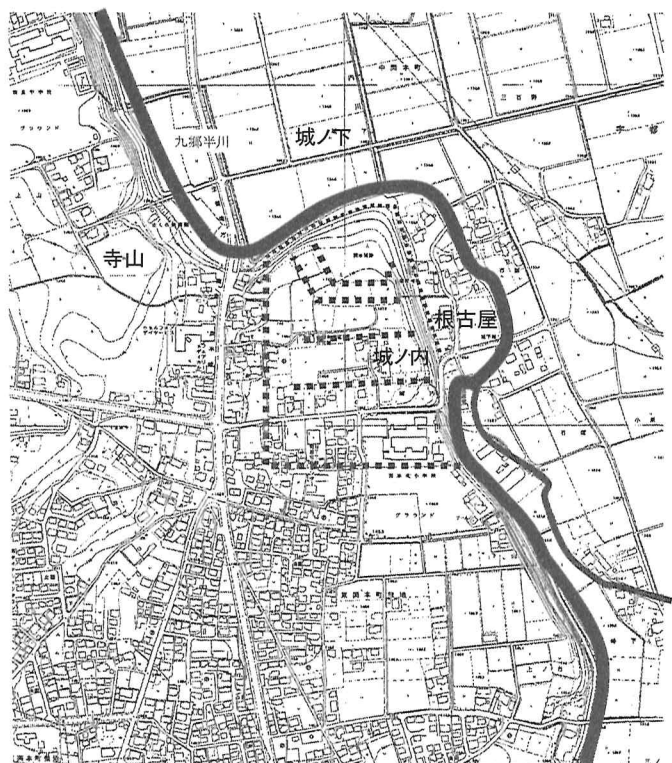
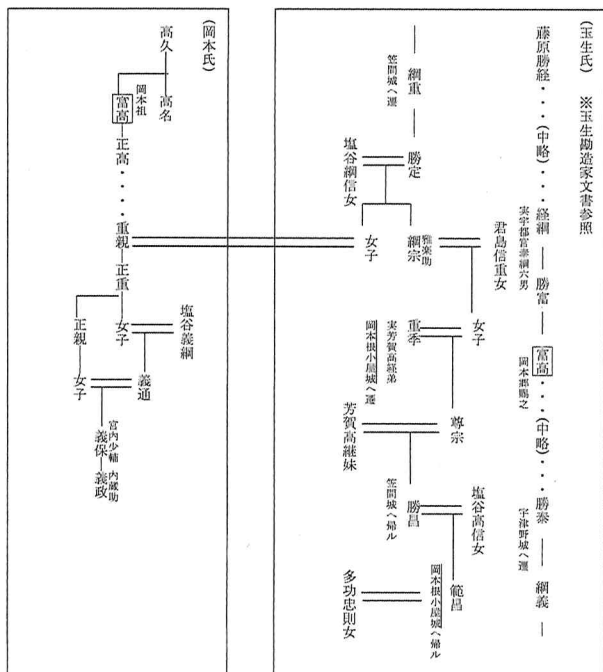
荒川善夫 2002 『戦国期東国の権力構造』 岩田書院

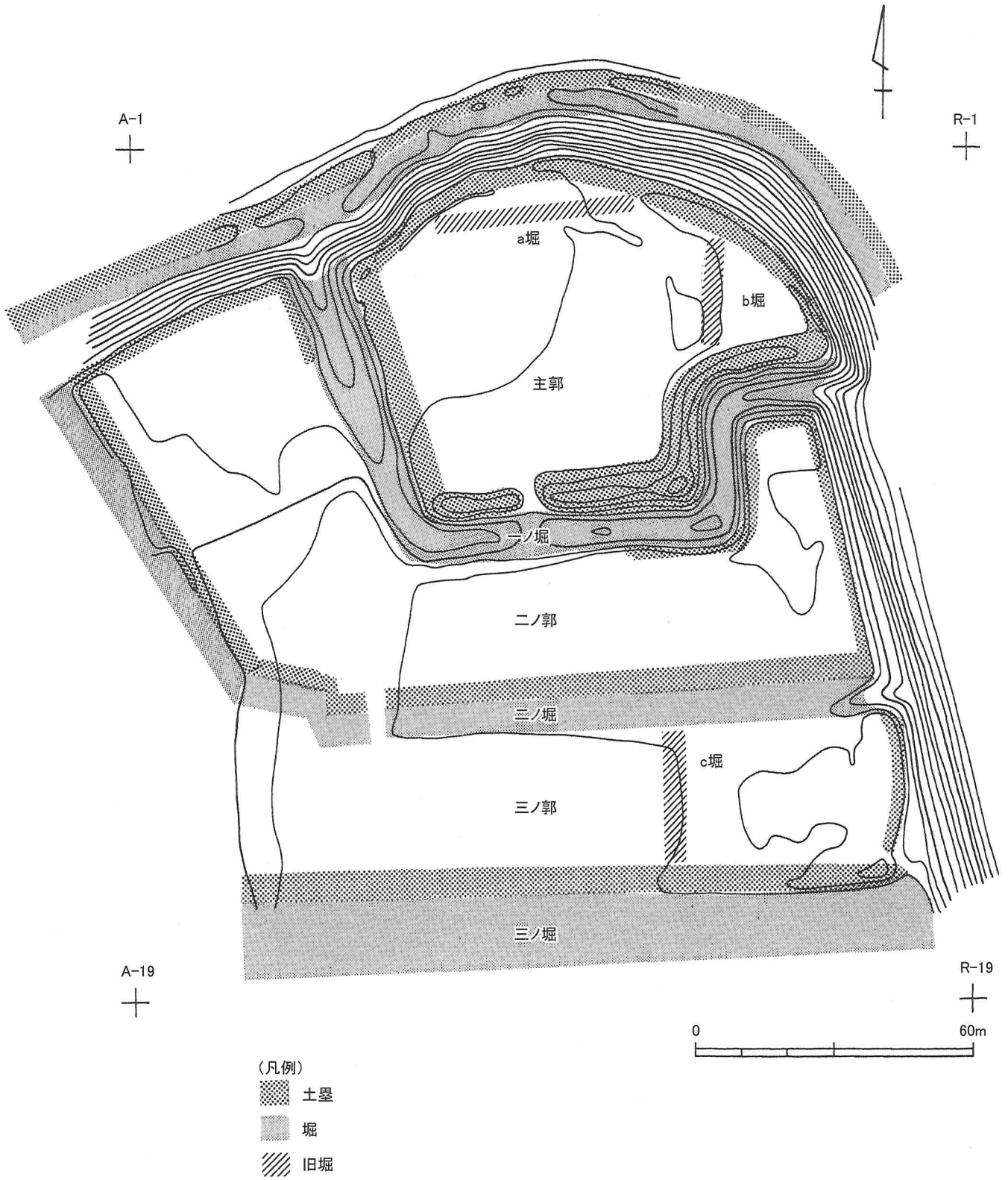
江田郁夫 2002 「元亀期の宇都宮氏一甲相同盟と宇都宮家中一」 『栃木県立文書館研究紀要』 第6号 栃木県立文書館

河内町教育委員会 1982 『河内町誌』

鈴木江津子 2008 「下野国宇都宮氏の旧臣「玉生家文書」を読む」 『歴史と民俗』 神奈川大学 日本常民文化研究所論集 24

玉生勝忠 1977 「玉生氏の系図について」 『下野の姓氏』 第12号 下野姓氏家系研究会





第37図 岡本城跡調査区部分復元想定図

写 真 图 版

PL1



① 豎堀状況（南から）



② T-1 確認状況（東から）



③ T-1 断面確認状況（南東から）



④ T-1 確認状況（北西から）



⑤ T-2 確認状況（東から）



⑥ T-2 断面確認状況（南東から）



⑦ 曲輪 f 断面確認状況（東から）



⑧ 曲輪 f 断面確認状況（南から）



①曲輪b 全景（西から）



②曲輪b 全景（東から）



③曲輪b 平坦部確認状況



④曲輪b 断面確認状況（東から）



⑤曲輪b 断面確認状況（南東から）



⑥腰曲輪遠景（北から）



⑦調査区全景（南から）

PL3



① T-1 調査前 (西から)



② T-2 調査前 (北から)



③ T-3 調査前 (西から)



④ T-3 堀確認状況



⑤ T-2 堀確認状況



⑥ T-4 確認状況



⑦ T-5 南側堀確認状況



⑧ T-5 北側堀確認状況



① T-6 堀確認状況



② T-7 堀確認状況



③ T-10 石積遺構確認状況 (北から)



④ T-10 石積遺構確認状況アップ (北東から)



⑤ T-10 溝確認状況 (東から)



⑥ T-10 溝確認状況 (西から)

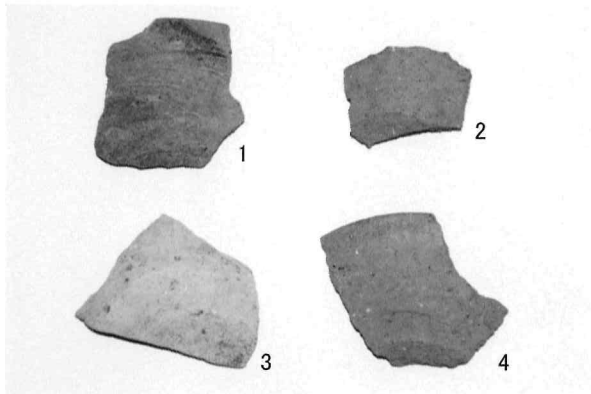


⑦ 岡本城跡遠景 (南上空から)

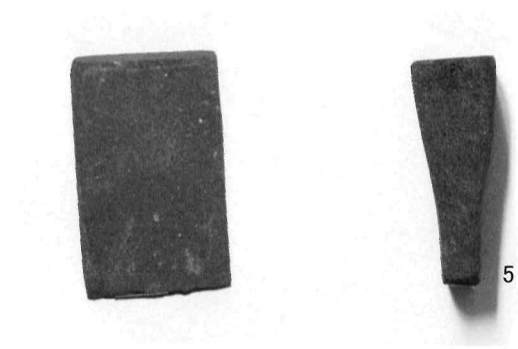


⑧ 遠景写真 (南から)

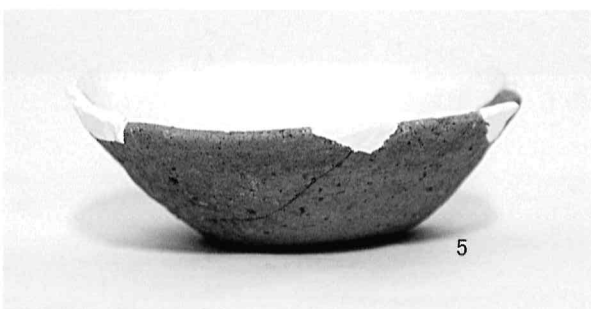
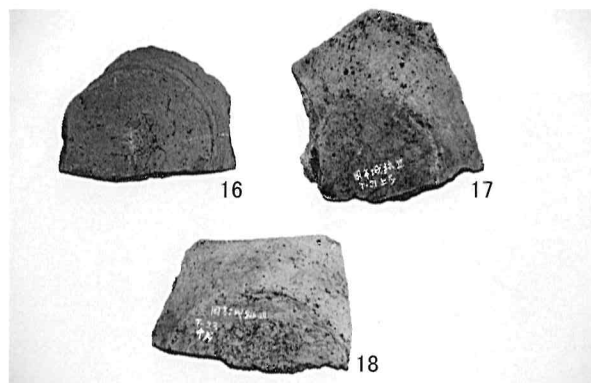
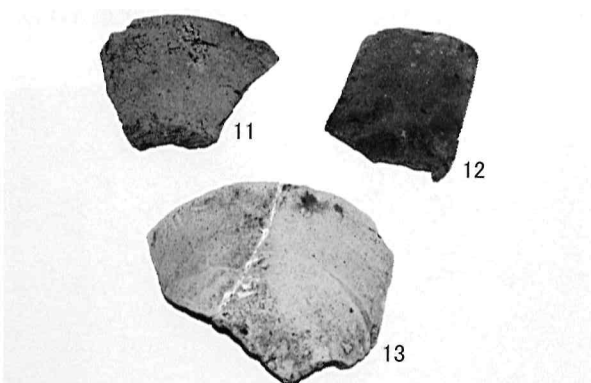
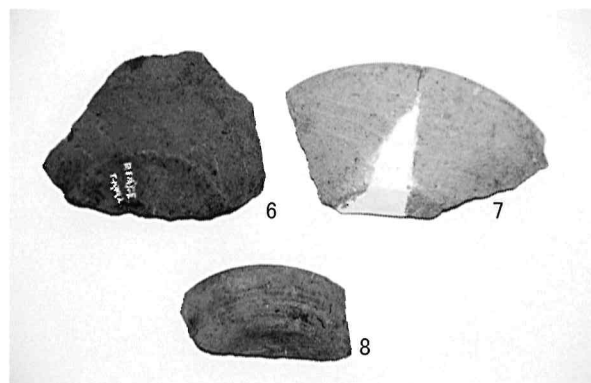
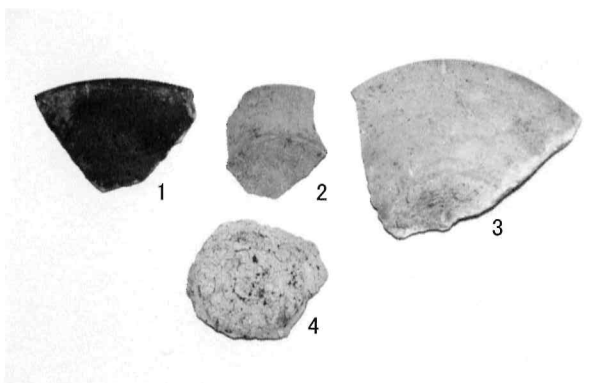
PL5



①多気城跡出土かわらけ



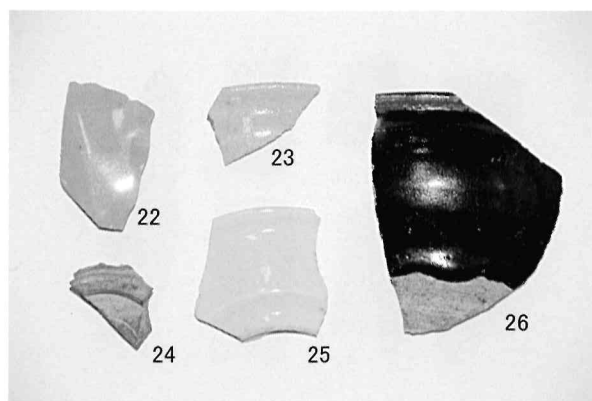
②多気城跡出土砥石



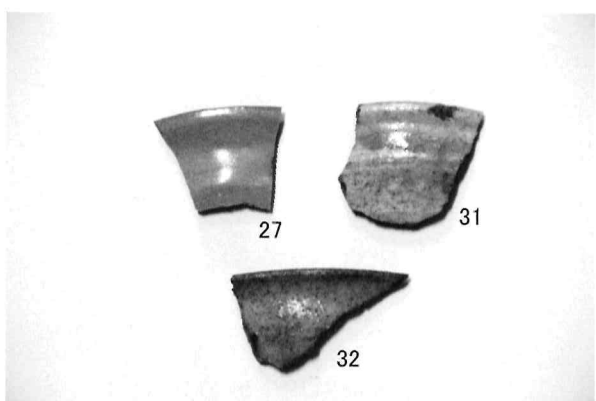
③岡本城跡出土かわらけ



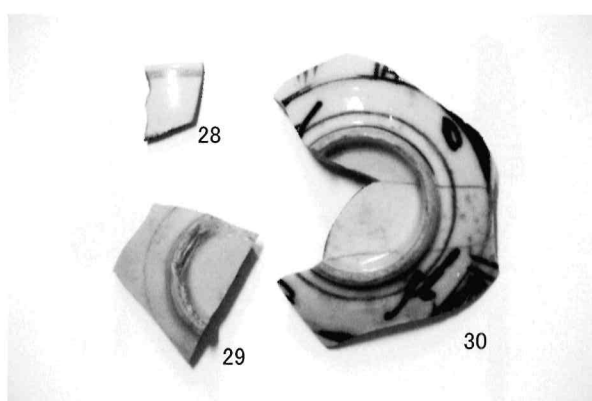
①岡本城跡出土内耳土器



②岡本城跡出土陶磁器(1)



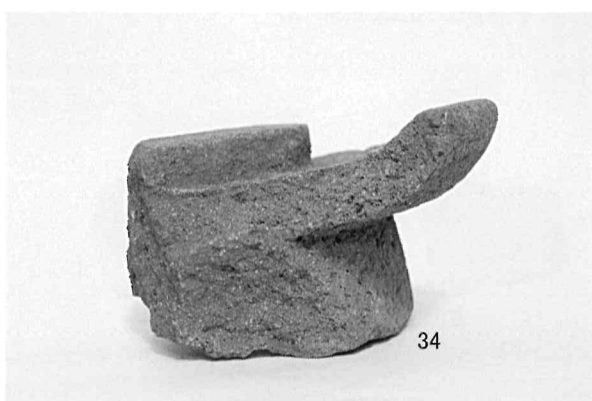
③岡本城跡出土陶磁器(2)



④岡本城跡出土陶磁器(3)

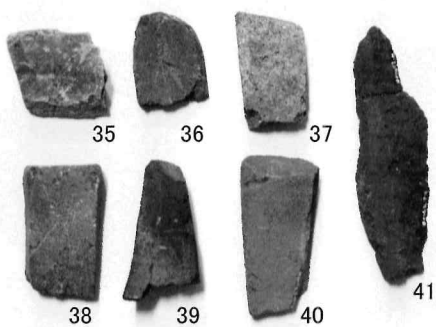


⑤岡本城跡出土茶臼(1)



⑤岡本城跡出土茶臼(2)

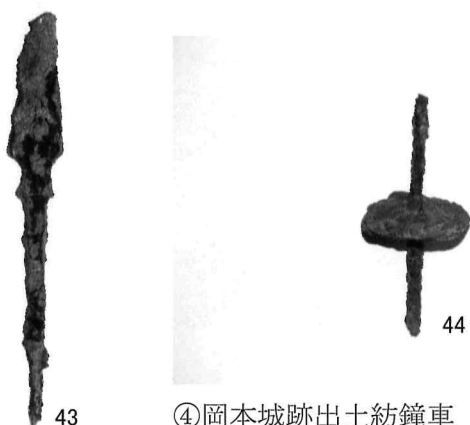
PL7



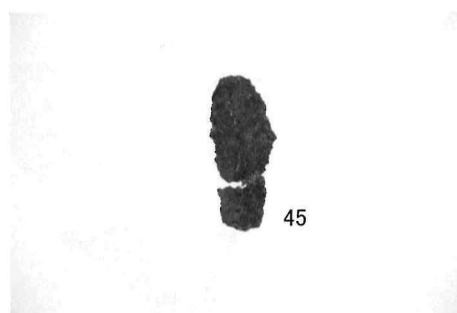
①岡本城跡出土砥石



②岡本城跡出土刀子

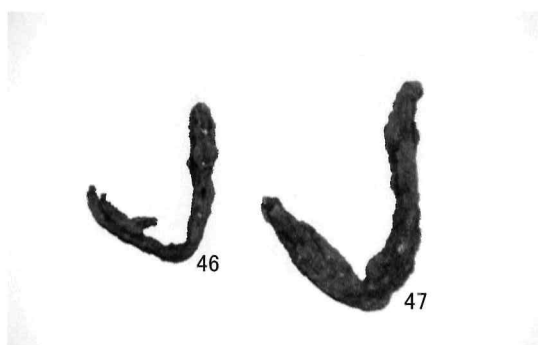


④岡本城跡出土紡鐘車

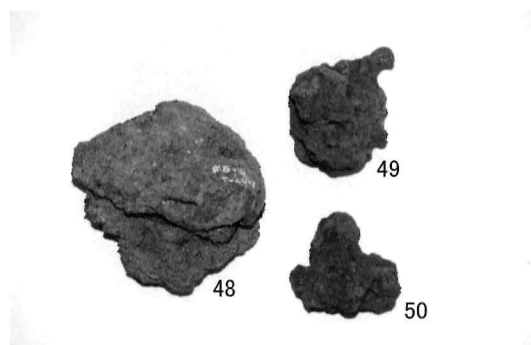


⑤岡本城跡出土鉄製品(1)

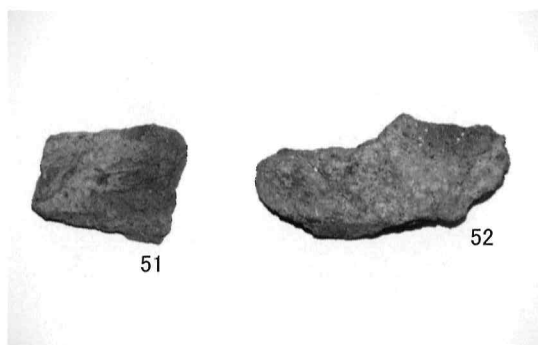
③岡本城跡出土鉄鍬



⑥岡本城跡出土鉄製品(2)



⑦岡本城跡出土鉄滓



⑧岡本城跡出土縄文土器



⑨岡本城跡出土内耳土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	たげじょうせき・おかもとじょうせき
書名	多気城跡・岡本城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第79集
編著者名	近藤真・今平利幸
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号 TEL028-632-2764
発行年月日	西暦 2013年(平成25年)3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
たげじょうせき 多気城跡	うつのみやし 宇都宮市 たげまち 田下町	09201		36度 36分 17秒	139度 48分 12秒	20100112 ～ 20100312	5000	遺跡の範囲確認のための調査
おかもとじょうせき 岡本城跡	うつのみやし 宇都宮市 なかおかもとまち 中岡本町	09201		36度 36分 55秒	139度 57分 3秒	20091024 ～ 20110130	500	遺跡の範囲確認のための調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
多気城跡	城跡	中世	堀・土塁	かわらけ、砥石	
岡本城跡	城跡	中世	堀・土塁	かわらけ、砥石、茶臼、陶磁器、鉄製品等	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第79集

多気城跡Ⅱ・岡本城跡

平成25年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課
(宇都宮市旭1-1-5)
TEL (028) 632-2764

印刷 下野印刷株式会社
(宇都宮市宝木町1-28-11)
TEL (028) 622-6953
